
永遠（とわ）のほitori〔長篇版〕

彩里美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠のほとり〔長篇版〕

【Nコード】

N4668F

【作者名】

彩里美月

【あらすじ】

傭兵のジムサは兵役を終え、ようやく帰郷の途にあった。交易都市カティガラに立ち寄ったジムサは故郷で待つ許嫁のメイシャにうりふたつの遊女に出会う。果たして彼女はメイシャなのか、それとも……？砂漠に花開いた奇跡のようなロマンス。 同名短篇小説の長篇版です。

プロローグ

『……待っているわ』

涙をこらえ、彼女が囁く。

手を伸ばせば容易に触れられる距離なのに、眼には見えない隔たりがふたりを引き裂いている。

ふたたび戻ってくる日まで、彼女に触れることはできない。

波うつ麦穂色の髪にも。

セレスの絹のように滑らかな頬にも。

カラージャの花のように可憐な、その朱い唇にも……。

紺碧の瞳から今にもこぼれ落ちそうな涙をぬぐってやることすら、今の自分にはできないのだ。

甘い吐息が感じられるほど近く顔を寄せ、俯いたまま彼女は囁いた。

『ずっと待っているから。だから、必ず生きて戻って来て……』

そう言って、彼女は艶やかな髪を一束、差し出した。

『……これは私よ。私はいつもあなたのために祈っている。その想いが、きっとあなたを守るから』

その髪は、戦が続くあいだずっと、この懐にあった。

幾度も危機は訪れたが、自分はこうして生き延びることが出来たのだ。

きっと君が祈ってくれたおかげだ。

長い月日が流れ、ようやくいま俺は故郷へ帰ろうとしている。

メイシャ。

君の待つサイラムへ。

青い湖のほとりに咲いた、小さくも美しい^{まち}城市。

懐かしい、俺たちの故郷。

もうすぐだ。

もうすぐ会える。

メイシャ——。

第1章 カティガラの遊女(1)

「……旦那。旦那！」

リズムカルに揺れる馬の背で、ジムサははっと我に返った。遙かに遠い故郷に思いを馳せるうち、いつのまにやら意識が飛んでしまっていたようだ。

声のした方を振り向くと、自分の馬の傍らを悠然と一頭の駱駝が歩いていた。

盛り上がったふたつの瘤のあいだに跨がった浅黒い顔の男が、皮膚の色とは対照的な皓齒を見せて笑う。

男は前方を指さし、陽気に声を弾ませた。

「旦那、カティガラが見えてきましたぜ。今夜は久しぶりに美味しいもんが食べますよ。今まで通りすぎて来たような、ちっこい城市まちとは違いますからねえ。隊商宿キャラバン・サライだって豪華なもんだ。クリセ以来ですな、こういう賑やかな城市まちは」

「……ああ、そうだな」

軽く頭を振ると、ジムサは馬上で座り直し、荒地ダシユトの彼方に浮かび始めた淡い緑色の線に眼を凝らした。

城市を砂嵐から守る防風林の並木だ。

それを越えると、漢概用水路の張りめぐらされた農耕地が眼路いっぱいに広がっている。

灰色と枯色の単調な荒野を見慣れた眼には、滴る緑は眩しいくらいだった。ジムサは無意識に眼を細めた。

進んでゆくにつれ、城市まちを囲む城壁が次第に姿を現し始めた。干乾し煉瓦で造られた分厚い壁の向こうに、人々が暮らし、旅人が行き交う巨大な町がある。

ついにバークトリシュ王国領の最東端だ。ここから先は、小規模な城市国家が点在する広大な沙漠地帯。沙漠を越え、さらに東へ進めばそこはもうセレスの領土だ。

カティガラは、バークトリシュ王国とオアシスに散らばる都市国家群、さらには南のシンドとを結ぶ交易路の結び目にあたり、この地方きつての繁栄を極めている。

もちろん、王都の壮麗さとは比較しようもないが、それでも小さな独立国の王城よりも一州都であるカティガラの方がずっと立派だということとは確かだった。その威容は、ジムサが数年前に訪れたときよりもさらに壮大になったように思えた。

あれは何年前ことだったろう。バークトリシュの傭兵として西へ向かう途中、ここに立ち寄ったのは……、五年、いやもう六年以上になるはずだ。

あのとき一緒だった仲間の半数は戦死した。後の半分は契約期間を終え、ジムサをバクトラに残してそれぞれ帰国していた。

やむを得ない状況だったとはいえ、自分ひとり取り残された気がするの否めない。戦が集結し、平穏な王都で不自由なく遇されていても、ジムサの心はつねにざわざわと波立っていた。

一刻も早く、帰らなければ――。

その気持ちは、バクトラを離れ、こうして馬の背に揺られるほどに強くなる。

心の奥底にひりひりするような焦燥を感じ、ジムサは無意識に馬を早めた。鞍に繋がれていた替え馬が引かれて走り出し、側にいた駱駝が驚いて飛び跳ねた。鞍上の男は懸命に駱駝をなだめ、ジムサの後を追った。

「旦那ア、待ってくださいよオ。そんなに急がなくなつて、城市は消えやしませんって。蜃気楼じゃないんですから……。もう、せつかちなあ」

いくら急かしたところで駱駝は速度ではとうてい馬には敵わない。ましてやジムサの馬はどちらも選り抜かれた遠征用の軍馬なのだ。

哀れっぽい男の声はあつというまに後方に飛び去り、ジムサは隊商の先頭に並んでいた。山のような積み荷を背負った駱駝の群れの傍らで、壮年の隊商長がジムサを見てにやりとした。

「ここで別れだな、兵隊さん。あんたのおかげでいろいろ助かったよ」

上の空で頷き、ジムサは扉の開かれた巨大な城門を見つめていた。多数の駱駝とロバ、馬が土埃をたてて門をくぐる。隊を構成するどの商人の顔にも、疲労以上に安堵と期待の色が浮かんでいた。

空を振り仰いだジムサは、乾いた眩い陽射しに眼を細め、深い吐息をついた。

終点ではないにせよ、故郷に近づいた実感が、確かにあった。

第1章 カティガラの遊女(2)

「いよいよお別れですねえ、旦那」

キャラバン

キャラバン・サライ

隊商とともにカティガラでいちばん大きな隊商宿に入り、持ち馬二頭を繋いで世話をしていると、先ほど駱駝に乗って並走していた男が人懐こくニコニコしながらまた話しかけてきた。

名をタシユカガという。

ダシユト

旅の途中、荒地で盗賊の襲撃にあった際、すんでのところをジムサに助けられて以来、彼は旦那旦那と親しげに声をかけてくるようになった。

キャラバン

当初、バークトリシュの民が大半だった隊商の中で、タシユカガは少しだけ目立った。彼はずっと南、シンドの商人だったのだ。隊商が王都を出発したときから彼が加わっていたことを、ジムサは見覚えていた。

キャラバン

出発時はそれほど大きな隊ではなかったが、途中で小さな隊商が加わり、次第に規模が大きくなった。盗賊の襲撃を避けるため、隊商はしばしば寄り集まる。それにつれて顔ぶれも賑やかになった。

キャラバン

一口にバークトリシュ人といっても、西のヘラス系と元々の住民その混血などいろいろだ。それに加えて東部オアシスの民やシンドの人間も加わった。隊商内では東西南北様々な言語が飛び交い、休憩ともなるとお国自慢の唄を交互に歌っては盛り上がるのがつねだった。

何本もの通商路が交差するこの辺りは、行き交う人々の顔だちも服装も言葉も百花繚乱の様相を呈する。バークトリシュではヘラス系言語が一応共通語となっているが、隊商を組むような商人は片言でも数力国語を話した。

タシユカガもまたそうした国境をまたぐ商人のひとりだった。彼はシンド特産の香辛料を首都で高い、代わりに有名なバークトリシュの金細工や貴重なガラス製品を手に入れて戻る途中だという。

ガラスは壊れやすいのが難点だ、と彼はよくこぼしていた。どんなに嚴重に梱包しても、帰り着くまでに半数以上が壊れてしまうという。

「それだけに値が張るもんで、まあ、そこそこ儲けさせていただいてますがね」

にやりと齒を剥き出したタシユカガの表情を見れば、彼が決して損をしてはいないだろうことは容易に想像がつく。きっと、希少価値を喧伝してシンドの王侯貴族に倍以上の高値をふっかけているに違いない。

抜け目ない商人のわりに、タシユカガは妙に開けっ広げで人懐こい一面もあった。ジムサより一回りくらい年上のようなだが、命を救われて以来、もともと低かった腰がまた一段と下がったようだ。

感謝されて嬉しくないわけではないが、あまり付きまとわれると正直言つて少し煩わしい。かといって突き放すのも気の毒だ。

さして重要な話題でもなければ適当に相槌を打っておくことにしたが、タシユカガはジムサが話を半分も聞いていないのがわかっていても平気で喋り続けた。要するに彼は口から先に生まれてきたようなお喋り好きな男なのだった。

今もまた、目鼻だちのくつきりした浅黒い顔に満面の笑みを浮かべ、タシユカガは道中の出来事をことこまかに上げ連ねてはひとりで笑い、辟易するジムサをよそにまくしたてていた。

「……いやいや本当に旦那にはお世話になって、いまあたしがこうしてあるのも旦那のおかげですからねエ。旦那とお別れするのは寂しいなア。どうせなら護衛としてシンドまで一緒に来ていただけませんかねえ？ お礼はたっぷりいたしますよ。——ああ、そう。そうですね、故郷で可愛い人^{キャラバン}が待ってるんでしたっけね。それじゃあ仕方ない。引き続きこの隊商にお世話になることにしますわ。と

いっても同道するのはどのみちカーシャ国までですがね。この隊はシンドには行きませんから。まあ、カーシャまで行けばシンドの商人も増えますしね。同行させてくれる隊は、いくらもあるでしょう」

「そうだな。ギンリンの峠越えは厳しいと聞くが、まあ気をつけて
際限ないお喋りを遮るように、少し強い口調でジムサは言った。
「はアい。旦那もね、オアシスの城市まちと城市まちのあいだは盗賊の跋扈
地帯ですから、何とぞお気をつけて。決して一人旅なんかいけませ
んよ」

ジムサはしかつめらしく頷いた。

そうなのだ。一刻も早くサイラムへ戻りたいのはやまやまなのだ
が、タシユカガの言うようにここまで同行させてもらった隊商キャラバンはサ
イラムを通らない。

カティガラで半月ほど商いや仕入れをして、それからカーシャ国
まで南下する。そこからは広大な沙漠と高山を避けて南回りのルー
トでさらに東へ向かうと言う。ところがサイラムは北回りの街道沿
いにあるのだ。

いたるところに山賊や追剥が出没する荒地ダシユトを単独で旅するのは、
言われるまでもなく自殺行為である。

ジムサは、カティガラで休息をとる間に北回りのルートで東に向
かう隊商キャラバンを探すつもりでいた。謝礼を払うくらいの持ち合わせはあ
るし、傭兵上がりのジムサはこれまでの隊商キャラバンでも腕の立つ護衛とし
て歓迎されて来た。

考え込むジムサの顔を覗き込み、タシユカガは揉み手をしながら
にやにやと締まりのない笑みを浮かべた。

「ところで旦那ア、今夜はぜひあたしに一杯おごらせてくださいよ。
いつぞやのお礼もまだですし」

ジムサは我に返り、ふっと苦笑した。

「礼？ …… ああ、もういいよ。道々、食べ物や水をわけてもらっ
たり、いろいろと世話になったしな」

「何をおっしゃいます。今夜は皆くつろいで、旅の垢をゆつくり落
とすんですよ。あたしらも一風呂浴びたら美味しい酒と料理、つい
でに綺麗どころもそろった、いいところへ行きましょうよ」

タシユカガはさらに頬を緩ませ、耳打ちするようにひそひそ言っ

た。

「旦那もきつとご存じでしょうけど、カティガラの色街といったらそれは有名なんですよ。東西南北いろんな顔だちの、ありとあらゆる色の肌や髪や眼をした美女が、それはもうよりどりみどりでエ……」

だらんと目尻を下げる男を見やり、ジムサは眉根を揉んだ。

「……あのな。言っただろうが。俺は、許嫁と結婚するために帰郷するところなんだ。街の女と遊んでなんぞいられるか！」

「まー、旦那ってば律儀ですねえ」

タシユカガは鳩が豆鉄砲を食らったように眼をしばしばさせ、おげさに驚いてみせる。ジムサはますます眉をしかめた。

しかし男は性懲りもなくすり寄ってくる。

「あつ、それじゃあ遊廓じゃなくて普通に飯が食える酒場ならどうです？ 飯食って酒飲んで、ついでに踊りを見るくらいなら、将来の嫁さんだつて文句言いつこありませんよ。ねっ、付き合ってくださいよオ、旦那ア。何たつてこれが最後なんですから」

拝み倒さんばかりの男を眺め、ジムサは溜息をついた。

「……あんたが行きたいだけなんじゃないのか、本当は」

タシユカガは肩をすくめ、にやにやしながら照れくさそうに頭を掻いた。

「へへ、実はおっしゃるとおりで」

ジムサはあきれて怒鳴った。

「だつたらひとりで行けばいいだろ」

「そこはそれ、旦那はバークトリシユの貴族様だし」

「ただの下級騎士だよ俺は。そもそも傭兵なんだ」

「でも、傭兵上がりで騎士に叙せられたんなら、戦で相当な働きをしたということですよねえ？」

タシユカガはジムサの長剣に素早く眼を走らせた。ふつと目付きが変わり、鋭い凝視を剣の柄や鞘に注ぐ。

「……鞘は地味に拵えてあるが、刀身は一級品のエンギシャル鋼

だ。ただの下級騎士が持てるようなシロモノじゃない。ものすごく高価な希少品なんですからね。金持ちの貴族だってそうそう買えない。きつと下賜されたんでしよう、えらい御方から」

ジムサは顔をそむけ、軽く舌打ちをした。

へらへらして見えてもさすがにプロの商人だ。この剣を抜いたのは、荒野で盗賊に襲われて逃げまどう男を助けたときだけだったというのに。

命の危険に晒されながらも、しっかりとモノは見ていたわけだ。まったく油断も隙もありはしない。

ジムサは不機嫌に鼻息をつき、ブラシかけを終えた馬の首をぽんぽんと叩いた。

「——おい、あと頼めるか」

近くにいた厩番の少年が、頷いて小走りに駆けてくる。

「ふすまと小麦をやってくれ。混ぜもんなしだぞ。金は必要なだけ払う」

頷いた少年に馬を託し、ジムサは揉み手で待ち受けているタシユカガには構わず歩きだした。

「ああつ、待ってくださいよオ、旦那ア」

「とにかく俺は、そういうところへは行かない」

「そんなこと言わずに。旦那のご相伴にあずかった方が、あたしとしてもいい思いができるんですから」

「何言つてんだ。娼館は身分なんか関係ないだろ。金さえ持つてりや誰だつて大歓迎さ。あんた、王都でがっばり儲けたんだろうが」

「妓楼にだつて格付けつてもんがあるんですよ。そりや、金さえあれば誰でも入れるところもいっぱいありますよ。でもせっかくカティガラに来たんだ、どうせならちよつと格の高い楼みせに行ってみたいじゃないですかア」

「そんなところは俺だつて門前払いだよ」

「だから、旦那は王都の騎士さんだから大丈夫ですつて。それもエングシヤール鋼の剣を佩くはようなお方だ。それに、何たって旦那は

男前ですからねエ……」

「あんだ、この傷が見えないのか」

憤然と振り返り、ジムサは自分の顔を指さした。

ジムサの顔には一目でわかる大きな傷がある。左の頬骨のあたりから頤にかけて、そして衣服で隠れてはいるが、右胸から脇腹にかけても一直線に刀傷が走っている。

「だからいいんじゃないですか」

タシユカガはひるむどころか平然と切り返した。

「ファウニとの戦いで負った傷なんですよ。強そうだし、凄味があつていいですよ。絶対モテますって」

ジムサはがつくりと肩を落とした。

——ダメだ、これは……。

「ねっ、行きましようよ、旦那。お別れにぱーっと、あたしに奢らせてくださいよオ」

「俺は行かん。許嫁に会うまでは、女には指一本触れたくない」

「頑固だなあ……。——わかりましたよ、それじゃあ御馳走だけにしますから。ね、それならいいでしょう？」

どうあつても諦めてくれそうにない。ジムサは溜息まじりに頷いた。

「言っておくが、怪しげなところは絶対ダメだからな」

「わかってますって。料理と歌と踊りだけ。それだけですよ」

にわかに元気づいた男に引きずられるようにして、ジムサは厩を後にしたのだった。

第1章 カティガラの遊女(3)

湯浴みをして服を着替え、夕暮れが迫る頃ジムサはタシユカガと連れ立って街へ出た。

たそがれゆく街路には吊りランプや松明が煌々と燈り、昼間の喧騒とはまた異なる活況を呈し始めていた。

気がつけば、酒場や料理屋が並ぶ通りのあちらこちらに、美しく化粧を施した女たちの姿が目立ち始めていた。

女たちの顔だちも衣装も様々だった。こまかな襷を寄せ、肩口を黄金のピンで留めた薄衣に身を包んだ女もいれば、胸のふくらみを強調するようなびったりと身体にまといつく胴着に踝まで届くスカートを合わせたもの、立ち襟のワンピースに鈴つきの刺繍帯を結んだものもある。

女たちは薄暗い店の出入口に佇み、通りがかる男たちに流し目や媚びるような微笑を送っていた。その傍らで、花を飾った白い窓辺から身を乗り出して外を眺めている女もいる。ヘラスの^{キクラ}竖琴を弾いたり笛をくちびるにあてた女、東方伝来の棹の長い琵琶^{ウイード}を抱えて爪弾く女の横顔もあった。

甘く薫る香料の煙が漂い、黄昏の街は奥に進むにつれさらに妖しく霞がかっていくように見えた。

ジムサは不意に足を止め、険しい顔でタシユカガを睨んだ。

「……おい」

「はい？」

にこにここと、無邪気そうに男は振り向いた。

「どこへ行くつもりだ」

「どこって、そりゃあもちろん料理酒場ですよ。楽しい歌と踊りがあつて、美味しい飯が食えて、手頃な酒がふんだんに飲める、旦那のご希望どおりの、全然怪しくない健全な店ですわ」

「——思いつき怪しい界限じゃないかっ」

憤然と怒鳴りつけ、ジムサは即座に踵を返した。

「ま、待って、旦那……」

「帰る。確か、隊商宿の近くにござっぱりした居酒屋があった。飯はそこでとる」

「せっかくカティガラに来て、何でわざわざそんな色気もそっけもないところへ」

タシユカガは慌ててジムサを追いかけてくる。

「色気はいらんと言うのに……」

眼を吊り上げたジムサの鼻先を、今までとは違う香りがふつとかすめた。それは、どこか重たげなところのある香料の香りとは異なり、みずみずしい清冽さを感じさせるものだった。

ジムサは無意識のうちにその香りの方に向き直っていた。

それは、かつて許嫁の髪や身体からほのかに香っていたのと同じく似た香りだった。

視線の先には、花籠を抱えた三人の女がいた。彼女たちは紅い花びらを通りに振りまきながら、ゆったりと街路を歩いていた。

いずれ劣らぬ美しい容貌の女たちだ。色とりどりの花を結い上げた髪に編み込み、耳朶や首もとには繊細な金細工。白いヘラス風の装束の腰を鈴やビーズを嵌め込んだ細いベルトで絞め、やわらかな革のサンダルが音もなく石畳の街路を踏む。

紅い花びらが夕風に舞う。かすかな鈴の音が、舞い散る花びらに重なった。

ジムサは声を失い、女たちの婀娜な道行を見つめていた。彼の視線は先頭をゆく女の横顔に吸いよせられていった。

彼女は三人のなかでも際立って美しい容貌をしていたが、その艶麗な顔には媚びたところがまるでなかった。彼女は女神のように凛として気品に満ち、静かに微笑みながら昂然と顔を上げていた。

花びらと一緒に媚態を振りまいているのは、後ろに従うふたりの女の方だった。ふたりは街ゆく男たちと婀娜な視線を交わしては、くちびるに当てた指先を誘うように差し伸べていた。

街の喧騒が急速に色あせ、遠のいてゆく。

ジムサは食い入るように先頭をゆく女の顔を凝視した。

彫りが深く、すらりと高く鼻筋が通った、それはオアシス地方によく見られる顔だちだ。街の灯火を映してきらめく青い瞳をまつすぐ前に向け、あるかなきかの微笑みを口の端に浮かべ、彼女は優美な足取りで典雅に歩いてゆく。

——メイシャ。

叫んだ自覚はなかった。口に出したかどうかさえ定かではない。

だが、きつと自分はその名を口にしたのだろう。

引き止められたかのようにふつと足を止めて振り向いた女の艶冶な顔が、脳裏に刻み込まれた十七歳の少女の可憐な面影と重なった。女の顔から、瞬時に高雅な微笑が消えた。

彼女は蒼い瞳を凍ったように瞪り、表情の失せた顔でじつとジムサを見つめている。

ジムサが足を踏み出すと同時に、女は弾かれたように顔をそむけた。懸命に何気なさを装いながらも、女は動揺したように足どりを早めた。

「ああん、待つてよ、お姐さア」

「そんなに早く帰ったら、女将さんに叱られちゃうわよう……」

連れの女たちが甘え声で文句を言ったが、彼女は足を止めようとはしなかった。女たちは周囲にひとしきりウイंकとキスを投げ、慌てて彼女の後を追っていった。

茫然と立ち尽くしていたジムサの横腹に、軽く肘が食い込む。思わず身をかがめると、タシユカガが浅黒い顔にわかったような含み笑いをニヤニヤと浮かべていた。

「やっぱり色気あるんじゃないですか、旦那ア」

「……あ？ 何だつて？」

「ずいぶん見とれてましたねえ、今の綺麗なお姐さんのこと」

「ち、違う！　ちよつと見覚えがあるような気がただけだつ」

慌てて抗弁したが、タシユカガはちつちつと舌を鳴らして首を振った。

「見覚えがあるとは旦那も隅に置けないねエ。ありやあ花売り娘なんかじゃない、玄人ですぜ。きつと妓楼の宣伝だ。どこの楼だろう。」

——あ、ちよつと、すみませんね。今そこをえらい別嬪さんが歩いていったが、いったいどの姐さんでしょうかねエ」

止める暇もなく、タシユカガは素早く近くにいた男をつかまえて尋ねていた。問われた男は顎を撫でながら感嘆まじりの溜息をついた。

「あれは遊女のディアネイラさ。この通りの奥にあるギルジラの楼、別名　赤い花の館　一番の売れっ妓だよ」

「遊女！」

タシユカガは勢い込んで掌を打ち合わせた。

「どうりで。その辺の娼婦とは雰囲気が違うなと思ったんだ。やっぱり品がいいね」

「しかし珍しい。彼女があんなふうに楼の娘たちと歩くことは今では滅多にないんだが。この頃じゃ金持ちが順番を争って彼女を側に侍らせたり連れ歩いたりしてるからなあ」

「そりやあ幸運だった。いい眼の保養になりましたわ。どうもこれはありがとうございます。——あーあ、佳い女だけど高嶺の花だ。」

旦那、残念ですが、あたしらじゃ手が出ませんわ。遊女は娼婦とはいえ別格ですからね。お大尽じゃなきや相手してくれません」

「遊女……？」

茫然と呟いたジムサに、タシユカガは戸惑ったように目をくりくりさせた。

「あれエ、旦那も知ってるでしょ。王都にもいたじゃないですか。美人で教養のある遊女を連れ歩くのは、言ってみれば上流階級の証ですからねえ」

「それは、知ってるが……」

女の紛れていった雑踏をつい目で追いながら、上の空でジムサは答えた。

まさか。人違いに決まってる。

確かによく似てはいた。だが、メイシャはサイラムの貴族で、何よりアールマティ神殿の正式巫女なのだ。遊女^{ヘタイラ}だろうと何だろうと、カティガラで娼婦なぞしているわけがない。

他人の空似だ。そうに決まってる。

それ以外、あり得ないじゃないか――。

「ねえ、旦那。遊女^{ヘタイラ}は無理にしても、その店、行ってみませんか？ あんなふうに客引きしてるくらいだ、敷居はそんなに高くないんじゃないかな。きつと、いろんな女の子がいて、料金別に見繕ってくれるに違いありませんよ。ねえ、行ってみましょうよオ」
ジムサにぎろりと一睨みされ、タシユカガは亀のように首をすくめた。

「……はいはい。健全な店ですね。わかりましたよ、もうっ。ホント、残念だなあ……」

ふたりは少し引き返し、市場通りに近い町中をしばらく行ったり来たりした。

「おっ、ここはどうです、旦那？」

タシユカガが示した店からは、松明の煙と料理の匂いに混じって陽気な喧騒と音楽、やんやの喝采が響いていた。どうやらシンド料理店のようだ。

「ここは前にも来たことがありましてね。カティガラで北シンドの料理を食べるんなら、ここが一番ですよ。はるばるガダーラから来た踊り子さんもいますよ。まあ、街の女も出入りはしてますが、無視すればいいだけのことで」

いつものようにまくしたてると、タシユカガはジムサを引きずるようにして酒場に入って行った。

店内はかなり混み合っていたが、どうにか空いたテーブルを見つけて、ふたりはようやく腰を落ち着けた。

しかしジムサの気分はまったく落ち着くどころではなかった。どれほど振り払おうとしても、先ほどすれ違った女のことから離れないのだ。

腹が減っていたはずなのに、食欲は失せてしまっていた。タシユカガが注文してくれた料理を進められるまま口に運んだが、ただ飲み込むだけで味にまで気が回らない。

酒もそれほど強い方ではないのに、気前よく振る舞われた特産の葡萄酒の杯をいくら重ねてもさっぱり酔えなかった。

賑やかな喧騒のなかでひとり鬱々と考え込んでいると、頭の上で不意に面白がるような声がした。

「おやあ？ どこかで見た顔だと思ったら……」

習い性か、反射的に剣の柄に手が伸びる。しかし、背に尖ったものを押し当てられ、ジムサはぴたりと動きを止めた。

「手を離せ」

抑えた低声が、耳元で冷たく響く。最初に聞こえた声が陽気な口調でたしなめた。

「こらこらフィディアス。すぐ刃物を抜く癖は改めた方がいいぞ」

「それはこいつに言ってください」

むすつとした声が応じる。

「……フィディアス？」

聞き覚えのある名前に振り向くと、長い黒髪を後ろで束ねた、自分と同年代の男が立っていた。

切れ長の黒い瞳が無感動にジムサを見返す。しかしジムサを驚かせたのはフィディアスではなく、その傍らに飄然と立っているひとりの青年だった。

「でん……」 □ 「！」

言いかけた言葉が途中で寸断される。フィディアスがジムサの足を思い切り踏みつけたのだ。

「おまえ、容赦なさすぎ……」

青年は気の毒そうに肩をすくめたが、フィディアスは意にも介さ

なかった。

「こいつの思慮がなさすぎなんです」

ジムサは踏みつけられた足をもつ片方の足でそつとさすった。
こうまでされれば見当はつく。微行中、おしのびというわけだ。

「お知り合いですかア、旦那？」

とろんとした目付きでタシユカガが青年を見上げた。

青年はにやりとし、ジムサの背をばんばん叩いた。

「おう。俺はこいつの上官だ」

「元でしょ、元」

無然と訂正したジムサを、青年は鋭い笑みを浮かべて覗き込んだ。

「何か文句あるのか？」

「いえ別に……」

むにやむにやと言葉を濁すと、タシユカガが酔った勢いで身を乗り出して来た。

「それは奇遇ですなあ。こちらへは何ぞ軍のご用向きで？」

「いや、休暇で遊びに来たのさ」

につこり笑う青年を、黙ったままジムサは横目で睨んだ。

「そうでしたかア。ささ、旦那もおひとつどうぞ。いやー、あたしはねえ、こちらの旦那に命を助けていただいたんですよ」

「ほう、それこそ奇遇だな。実は俺もこいつのお蔭で命拾いをしたんだ。そうか、人助けが趣味だったのか」

「趣味じゃなくて仕事です。どっちも」

「旦那はね、キャラバン隊商の用心棒をなさってたんですよう」

「ほう」

ジムサはむつつりと言い返した。

「別に用心棒として雇われたわけじゃありません。同行させてもらってる隊商が盗賊に襲われたら反撃するのが当然でしょう」

「相変わらず謙虚な奴だなあ、ジムサ。よし、ここはひとつ俺様が奢ってやろう。おい、酒追加だ。上物頼むぞ」

勝手に注文の手を上げる青年を、ジムサは慌てて引き止めた。

「もう結構です！ 充分飲みましたっ」

「おありがとうございます、旦那。あたくしはシンドから参りました者で、タシユカガと申します。香料や香辛料の他、金細工やガラス工芸品なんかも扱っておりますね、おかげさまで手広く商売させていただいております。その他にもご入り用のものがあれば何なりとお申しつけください。いろいろと伝もございますから、大抵のものは手に入りますよ。マドウーラの港に店を持っておりましてねエ。遠くは海の彼方のムドラーヤとも取引があるんです。ここは是非ともひとつ、ご贖に……」

身形からして青年がバークトリシュの大貴族と踏んだのか、タシユカガはしきりに揉み手をして得意の口上を述べ立てた。

かなり酔っていても商売っ気をなくさないあたり、見上げた商人魂といえる。

あまり興味なさそうに聞いていた青年は、葡萄酒のグラスを揺らし、からかうように尋ねた。

「ふーん……。それじゃ、どんな気位の高い女も一発で落とせるような媚薬とか、そういうものもあるのかな？」

「で……！？」

眼を剥いたフィディアスがうつかり口を滑らせかけるのを、今度はジムサが臍を蹴飛ばして阻止した。

足を踏まれたお返した。

フィディアスはちよつと涙目になってジムサを睨んだが、文句は言わなかった。

タシユカガは酔った眼を輝かせ、倒れそうなほどテーブルの上に身を乗り出した。

「そりやもうございますとも！ ええ、ええ、すぐに手配いたしますよ。えーと、お名前は、デ……？」

青年は鋭い笑みを浮かべた。

「いや。ディオ——」

フィディアスとジムサが同時に目を剥く。平然と青年は続けた。

「――ニユソス。ディオニユソスだ」

ちょうどそこに追加の葡萄酒が運ばれてきた。商人はとろんとした目をしばしさせ、爆発するように笑いだした。

「そいつぁいいや！　ありがたーい酒の神様のお名前じゃありませんか。その昔、シンドにまで葡萄酒をひろめてくださったという。いやア、ありがとうございます！　酒の神様に乾杯！」

――どうしてそんなに盛り上がるんだ……。

すっかり出来上がったタシュカガと、酔ったところを一度も見たことがない元上官が次から次へと杯を重ねるのを横目で睨み、ジムサは辟易と溜息をついた。

一方のフィディアスは、あくまで自分のペースで酒杯を傾けている。主人にひけをとらず、彼もまた酔いの気配とは無縁だ。

フィディアスを見ると、ジムサは未だに少し妙な居心地の悪さを感じる。彼は名前こそバークトリシュ風だが、その容貌はつい最近まで激しい衝突を繰り返していたファウニ族の顔だちそのものなのだ。

事実、フィディアスは血筋としては純粋なファウニ族である。まだほんの子どもの頃にバークトリシュの捕虜となり、それからずっと主人の元で暮らしている。

最初は奴隷身分だったが、軍功を重ねて自由民としての市民権を得た。それでも彼は、主人の元を離れることはない。

軍人としてはもとより、通訳としても重用されていることを、ジムサも実際に見聞きしてよく知っていた。

ふと考えてみると、いまこうして同じテーブルを囲んでいる四人の全員が、それぞれ異なる民の出なのだ。

ディオニユソスを名乗る青年は遙か西から来たヘラス系のバークトリシュ人。

南の国シンドの商人、タシュカガ。

オアシス地方東部の出身であるジムサ。

フィディアスは北の遊牧民ファウニ族だ。

この小さな酒場のテーブルは、国際交易都市カティガラの縮図、
ひいては大陸にまたがる広大な交易路の縮図とも言えるのだった。

第1章 カティガラの遊女(4)

いつのまに飲み比べになったのか知らないが、勝負は自称ディオ
ニユソスの圧勝だった。泥酔して足元も定まらなくなったタシユカ
ガに肩を貸して隊商宿に連れ帰り、これでやっと解放されるとジム
サは安堵の吐息をついた。

しかしそれは大きな間違いであった。

挨拶もそこそこ、逃げるように自室へ引き上げようとしたのだが、
青年はジムサの肩をがしつと捉え、白晳の容貌で涼しい笑みを浮か
べた。

あれだけ飲んでいたというのに、まったく酔っていない。ザルど
ころかワクもないのではと思われる酒豪ぶりだ。

青年は、ほんのわずか赤味のさした目許を愉しげにほころばせた。
「さーて、ようやく邪魔者も追い払ったことだし、改めて飲み直す
としようぜ」

「まだ飲むんですか……」

勘弁してくれとジムサは唸った。

「今度はもつと上品ないところへ連れてってやるよ。任せとけ」

「遠慮します。俺はもう寝ますんで。おやすみなさいっ」

「まあ待てって」

振り切って逃げようとしたジムサは、襟の後ろを猫みたいに掴ま
れ足を取られそうになった。

「何するんですかつ」

「上官の命令は聞くもんだぞ」

「俺はとつくに除隊しましたっ」

「おまえバークトリシュの騎士だろうが」

「叙任を断ったら斬首とか言ったのはあなたでしょ！」

「結局は受けたんだし。つまり俺は究極の上司ってなワケ。親父殿
を除けば、ね」

ジムサはにやにやする青年をぎろつと睨んだ。

「——で？　こんなところで何をなさっているのですか、バークトリシュ王太子、ディオメデス殿下」

「厭味だねえ」

感心したように青年——ディオニュソスならぬディオメデス王子は笑った。

「もちろん、微行^{おしのび}で遊びに来たに決まってるじゃないか。東部諸州は王太子の管轄だし、仕事にかこつけて王都から遠く離れた城市^{まち}でしばし遊んでようって魂胆さ。ファウニ戦の休養も兼ねてな」

「信じられませんね」

そっけなくジムサは応じた。

どれほど軽薄そうに見えても、第一王妃から生まれた異母兄をさしおいて王太子に冊立された人物だ。

比較的新興国であるバークトリシュでは、血筋と同じくらい個人的な能力も重視される。北辺を脅かすファウニとの攻防戦、隣国パルサワとの軋轢など、課題が山積みなのだ。

しかし今は、最大の敵対国である北の遊牧民ファウニと休戦協定が結ばれた直後である。確かに少しは休みが取れる時期と言えなくもない。休暇というのは案外本当かもしれないとジムサは思いなおした。

「ま、ともかくそういうことだから。身分は隠してるんで、そこんとこよろしくな。殿下なんてうっかり呼ばないように、くれぐれも注意してくれよ。名前はさっき言ったディオニュソスということで「似ていて間違えそうです……」

「じゃあ、ディオでいいよ。こいつもそう呼ぶ」

王太子は気さくにフィディアスを指した。そうは言われても、彼はもう二十年近くも側仕えをしているのだ。ここ数年の付き合いにすぎない自分とは比較にならない。

「それはどうも……。しかし、いかにも偽名くさいですね。酒の神様なんて」

「べつに偽名だとバレバレだっていいのさ。貴族のボンクラ息子が金にあかせて遊び惚けてるといふ設定だから」

「ボンクラ……」

「それがどうした？」

ジムサは眉根を寄せた。

「どうもそうは見えませんが……。あなたはボンクラにしては表情が鋭すぎるでしょう。いつだったか王都の宮廷詩人が歌ってるのを聞きましたよ。あなたは『宝石をちりばめた鞘に収まった、エンギシャルの蒼い剣』とか何とか」

「ふん、美辞麗句は詩人の生計の術さ^{たつきすべ}」

王太子は面白くもなさそうに肩をすくめた。

「しかし、そういうことならあれだな。いつそ鼻毛でも伸ばせばよかったかな？」

真顔で問われ、フィディアスはこめかみをぴくつかせた。

「やめてください……。宮殿中の女性が泣きます……」

「でも、どうしてわざわざボンクラを装わなきゃならないんです？」
「フィオメデスにはやりとした。」

「油断したネズミがボロを出しそうだな。——それじゃ、ボンクラはやめてドラ息子に変更だ。それなら素でいける。なっ」

「別にどっちだっていいですよ、俺は」

フィディアスが、脱力したように肩を落とす。

我が道を行かれる王子様のお守りはさぞかし大変なことだろう。

ジムサは我が身に降りかかった災難を忘れ、ほんの一瞬だけフィディアスに同情した。

「んじゃ決まり。さっ、行くぞー」

足どり軽く、王太子は歩きだした。途端に同情などどこかへ吹っ飛び、げっそりとした気分になった。

——絶対、何か魂胆がある。

油断したネズミって何だ……？

仕方なく後に従いながら、ジムサは眉をしかめた。

王太子ディオメデスが『エングシャルの蒼い剣』と呼ばれるのは、あながち阿諛追従というわけでもない。

青みがかったエングシャル鋼は、ただ単に磨いた鏡のように美しいだけではない。髪をひとすじその上に載せ、ふっと息を吹きかけるだけで斬れてしまうと云われるほど鋭いのだ。

つまり、不用意に触れば大怪我、という含みを持つ。

「おい、何してるジムサ。とつと来い」

王太子が尊大な口調で呼ばれる。ジムサは深々と溜息をついた。うっかりこの人の命を救ってしまったのが運の尽き。あるいは腐れ縁の始まりだったと言うべきか。

以来、妙に気に入られてしまい、戦が終結しても帰国の許可がなかなか出なかった。

どうしてあのとき彼の側にたまたまいたのが自分だったのだろう

……。

正直なところ、ジムサにはそれがちょっと恨めしかった。

第2章 赤い花の館（1）

ジムサは眼前にそびえたつ建物を茫然と見上げていた。

実際は、そびえたつというより佇むといった風情の瀟洒な館なのだが、ジムサの眼には地獄へ続く大門のように見えたのだった。

それは白い化粧漆喰を施した分厚い干乾し煉瓦の建物だった。前面にヘラス風の円柱を飾りつけ、咲き乱れる花をふんだんに飾った窓辺には葡萄の蔓が涼しげな陰を落としていた。

なかにいた女たちが人影に気付き、小さく奥行きのある窓から競い合うように顔を突き出して嬌声を上げた。

「いらっしゃあい」

「今なら空いてるわよお。寄っていつてよ、お兄さあん」

それぞれにしなを作り、にこやかに微笑みながら甘ったるい声を投げかける。青ざめたジムサの額を、たらりと冷や汗が流れた。

それは、絶対に来るまいと思っていた場所。

カティガラ名物と言われる巨大な色街の一角、とある妓楼の前に彼は硬直して突っ立っているのだった。

——どうしてこんなことに……！

ぎりぎりとお歯を噛みしめていると、傍らでディオが無頓着に尋ねた。

「どうしたんだ？ ジムサ」

ジムサは答えず、くるりと建物に背を向けた。

「俺は帰ります……っ」

「ああ？ 何言ってんだ、おまえ。カティガラに来て女と遊ばないなんて、馬鹿のすることだぞ」

「馬鹿で結構！ 言っただけでしょう、俺は結婚のために帰郷するんです。こんなところに足を踏み入れたりなんぞしたら、許嫁に顔向けできませんっ」

脱兎の如く逃げ去ろうとしたジムサの肩をむんずと押さえ込み、

デイオは囁いた。

「そう固いこと言うなって。黙ってりゃバレやしないよ。何たって独身最後のお楽しみだ、俺が万事お膳立てしてやるから、なっ」

「だから結構ですってば！」

必死で抗ったが、彼は着痩せして見えてヘラス伝来のレスリングが得意なだけあって意外に膂力はあるのだ。抵抗むなくジムサは店内に引きずり込まれた。

入り口をくぐった途端、待ち構えていた女たちが肌もあらわな衣装で現れて周りを取り囲んだ。どの女も黒く縁取ったつぶらな瞳に媚態を浮かべ、先を争って客の腕を奪いあう。

逃げ場を失ったジムサがひたすら目を逸らしていると、奥から女将とおぼしき恰幅のいい女がいそいそと走り出てきた。

四十代後半くらいだろうか。さすがに露出は控えめだが、けばけばしいほど派手な衣装を身にまとい、いかにも高価そうな装身具を首筋や耳朶にじやらじやら着けている。

女将は笑みくずれた顔で手をすり合わせながらも、中心に立つデイオの身形を抜け目なく検分していた。

白い麻の胴着にはくたびれた様子もなく、クラミス（短いマント）を留める肩口のピンは小ぶりだが宝石の嵌まった金細工。バックルの細工も手が込んでいる。やわらかい革のブーツにも綻びはなく、クラミスの陰に見え隠れする剣の鞘も立派なものだ。

連れのふたりも、簡素ではあるが仕立てのよい身形をしているし、決して貧相には見えない。

お眼鏡にかなったか、女将は白粉をはたいた顔に満足そうな笑みを浮かべ、キンキン声でまくしたてた。

「まあまあ、ようこそいらっしやいました。わたくしが当店の女将、ギルジラでございますアす」

——ギルジラ？

どこかで聞いたことがあるような……？

ジムサが眉をひそめる間にも、女将は思わせぶりに眼をしばしば

させながらディオにすり寄っていった。

「どんな妓がお望みで……？　うちはね、そんなに大きな楼^{みせ}じゃございせんけれど、それはもう素敵な娘ばかり揃えておりますのよ。オアシス中部の娘が多うございましてね。みんな色白で眼がぱっちりして、若くて可愛い娘たちばかり。ご予算に応じて、どのようにもあんばい出来ますからご心配なく……」

いかにも大貴族らしいもったいぶった顔で聞いていたディオは、尊大そうにフィディアスに顎をしゃくった。

設定『金持ちのドラ息子』　というわけだ。

ジムサの知るふだんの彼は、人を顎で使うタイプでは決してない。しかし、そんな横柄な仕種もごく自然に見えてしまうあたり、やはり氏も育ちも人並みはずれているゆえであろうか。

心得た様子で頷いたフィディアスが無表情に進み出、小さな革袋を女将に手渡した。さつそく革袋を覗き込んだ女将が歓声を上げた。

「まあ……　っ、銀貨ばかりかダリツク金貨まで！　まあまあまあ、ありがとうございます、最高のおもてなしをさせていただきますわ！」

フィディアスが何やら小声でひそひそと耳打ちをすると、女将は満面の笑みを浮かべながら頷いた。

「ええ、ええ、わかっておりますとも。万事心得ておりますからどうぞご心配なく。ご身分の高い方々にも臍^{へタイラ}にしていただいておりましてね。うちには最高級の遊女^{ヘタイラ}がおりますからねえ。——ところで、どなたかのご紹介で……？」

フィディアスの耳打ちに眼を瞠った女将は、さらに媚びへつらった表情になった。

「まあ、そうでしたの！　それで急に……。まあ、いやだわ。言ってくだされば準備万端整えてお待ちしておりますのに……」

女将は浮き浮きした足どりで一同を奥へ案内した。

「さささ、どうぞこちらへ。さいわい、とってもいいお部屋が空いておりますわ。さあ、どうぞ。ところで、お料理はどんなものをお

運びたしましょうね」

「食事は済ませて来たから軽くつまむものがあればいい。酒は上等なのを持つてこいよ」

デイオが横柄な口調で命じると、女将は追従の笑みを浮かべ、揉み手をしながら頷いた。

「もちろん最高級の葡萄酒をお持ちいたしますとも」

「それから、この楼の最高位の妓おんなを寄越してくれ。ふさがっていてもこつちが優先だぞ」

「心得ておりますよ。さあさあ、こちらへどうぞ」

女将はたむろしている女たちに目配せし、先に立って一行を階段へと促した。階段を昇り始めると、階下の女たちはいつせいに声を張り上げ順番を競い始めた。

仄昏い二階の廊下には龍涎香の香りが甘ったるく漂っていた。サイラムの神殿で焚かれていた香に似たその香りは、懐かしい少女の面影と、たそがれゆく街路で出会った彼女によく似た女を、同時に思い起こさせた。

ぼんやりしているうちに贅沢な内装の広い部屋に通され、我に返ったジムサは今更ながら虚しい抵抗を試みた。

「あ、あの、俺やっぱり……」

王太子はうるさそうに眉をひそめ、手を振った。

「わかったよ、そんなにいやなら無理強いはしないって。ちよつとくらい俺に付き合ってくれたっていいだろ。それに隊商宿キャラバン・サライの寢床より、ここの閨ねやの方が寢心地はうんといいいはずだぞ。たとえ独り寢でもな」

どうあっても勘弁してくれそうにない。ジムサはがっくりと肩を落とした。

——ごめんよ、メイシヤ。不可抗力なんだ。なるべく女たちからは離れてるようにするから許してくれ……。

ジムサが必死に祈っていると、慌ただしい足どりで女将が戻ってきた。

「たいへんお待たせしてあいすみません。ご指名の遊女^{ヘタイラ}をお連れしましたわ。実はもう別口のお声がかかっていたんですけどね、無理を言って席をはずさせていただいたんですのよ」

恩きせがましく言い、女将は肩ごしに振り向いた。

「——さあ、お入り。あの方のご紹介なのだから、くれぐれも失礼のないようにね」

女将に促され、ひとりの女が静々と入ってきた。

興味があつたわけではないが、ついucci眼を向けたジムサはその場で飛び上がりそうになった。

許嫁とそっくりな容貌を持つ女が、つましくそこに控えていた。「カティガラーの呼び声も高い当店自慢の遊女、ディアネイラにございます」

女将が自慢たらしい声を張り上げる。ジムサの脳裏に、タシユカガの問いに応えた男の声がよみがえった。

『あれは遊女のディアネイラさ。この通りの奥にあるギルジラの楼、別名 赤い花の館 一番の売れっ妓だよ』

あのとときは異なる肌が透けるようなきわどい衣装に身を包み、メイシャにそっくりな女が艶美な微笑みを浮かべて優雅に一礼した。顔を戻し、女は初めてジムサに気付いた。

黒い縁取りを施した蒼い瞳が声もなく見開かれる。夕暮れの街角で振り向いたときと同じように、その表情が不意にこわばったように思えた。あるいは、それもただの錯覚なのだろうか……。

不審を感じた女将が後ろから邪険に彼女を突っ付いた。我に返った様子で立ち上がり、優雅な微笑を取り繕って、女はディオの傍らに侍った。

給仕役が運んできた葡萄酒の壺を受け取って差し出された杯に注ぎながら、彼女は優美な声音で尋ねた。

「ようこそいらっしやいませ。旦那さまはどちらからいらしたんですの？」

それはなまりのない完璧なヘラス語だった。王都で話されている

アクセントそのものだ。ジムサの疑惑は大きく揺らいだ。メイシャだったら自分と同じようにオアシスなまりのヘラス語を喋るはずだ。杯を一息にあり、ディオはよどみない明瞭な口調で応じた。

「王都だ」

「まあ素敵！ 皆に都の話聞かせてくださいな。いま都ではどんなものが流行っていますの？」

ディアネイラは蜜のように甘い口調でねだり、ジムサに背を向ける格好で男に酌を続けた。

その背を流れ落ちる髪は、よく実った麦穂色をしていた。風にそよいでなびく、美しい黄金色。仄暗い灯火にさえ、まばゆいほどにキラキラと輝いている。

——メイシャと同じ色だ。

そう思ったとたん、鼓動が早くなった。

ジムサは無意識に懷を探った。別れ際にメイシャがくれた髪は、大切に布に包み、肌身離さず持ち歩いている。

折にふれて取り出しては眺め、くちづけた愛しい女の分身だ。

会話の端々で婀娜な笑い声を上げているディアネイラの髪は、懷中の大切な髪とまったく同じ色合いに思えた。

ふと人の気配を感じ、ジムサはぎくりとした。

振り向くと、ディアネイラに負けず劣らず美しい娘が、しとやかに微笑みながら小さな酒壺を差し出していた。

「どうぞ」

「あ、ああ……」

焦って杯を取り上げると、酒を注いだ女はそのまま傍らに腰を下ろした。

ジムサは酒杯に口をつけながら女の様子を横目で窺った。年はディアネイラより少し若いようだ。二十歳そこそこ、といったところだろうか。飴色の波うつ髪に深い青の瞳は、オアシス中部の民には珍しくない取り合わせだ。メイシャもそうだった。

顔だちに似かよったところは見いだせないが、彼女の表情には記

憶のなかのメイシャを思い起こさせるものがあつた。

わけでも出会つたばかりのメイシャに、彼女のしおらしく内気そうな容貌は驚くほど似て見えたのだった。

微妙な間をおいて微笑むときの、やわらかな頬の動き。

考え込むような、はにかんだような、優しい笑顔。

それは、ディアネイラが艶やかなくちびるに浮かべる華やかな微笑よりも、ずっとメイシャに近く思えた。彼女はジムサにすり寄るでもなく、慎ましげに酒壺を抱えて静かに座っていた。

ジムサはこの年若い娼婦に何となく好感のようなものを覚えた。

「ヘラスの系統ではないようだな」

ディオの声が耳に入り、ジムサはふと顔を上げた。問われたディアネイラは、ほんの少し首を傾げるようにして応えた。その表情はジムサからは見えない。

「ええ、違いますわ。私はオアシス生まれですの」

「……サイラム？」

ディオドトスが感情の読めない視線を投げる。ジムサは自分が声に出していたことによりやく気付き、思わず赤面した。

ゆつくりとディアネイラが振り向き、小馬鹿にしたように口の端で微笑つた。驕慢な声がジムサの耳を鞭打つ。

「サイラム、ですって？ ご冗談を。ずっと東の、ちつばけな城市まちじゃありませんか。私がそんな田舎者に見えまして？」

「いや……」

ばつの悪い思いで目を逸らし、ジムサは酒をあおつた。

「ではどこから来たのだ？」

面白がるような口調でディオが尋ねると、ディアネイラは小鳥のさえずりにも似た軽やかな笑い声を上げた。

「いやですわ、旦那さま。私たちのような女に出自など尋ねても仕方ないでしょう。私たちは不毛の沙漠にたまさか咲いただけの、儚い花ですもの……。そうよね、イオレー」

ジムサの傍らにいた娘が、にこりと微笑んだ。

「ええ、お姉さま」

「おや、よく似た妹分がいるのだな」

ディオはにやりとジムサに笑いかけ、酒を注ぐとするディアネイラの細い腰をぐいと引き寄せた。その光景にジムサはひどくうろたえた。

別人だとどれほど理性で言い聞かせても、あまりの相似に感情が納得しないのだ。

ジムサの狼狽を知ってか知らずか、ディオドトスは耳朶にくちづけるほど近くから彼女に囁きかけていた。

「ディアネイラ、あの男にも酌をしてくれないか。おまえの美しさにすっかり眼が眩んでしまったようだ。さっきからおまえのことばかり見てる」

くすぐったそうに肩をすくめたディアネイラは、気乗りのしない様子で振り向いた。

ジムサと目が合うと、彼女は大袈裟に眉をひそめて男の肩にもたれかかった。

「いやですわ。だってあの人、私のことひどく睨むんですもの。まるで親の仇みたいに」

ディオは呵々と笑い、膝を打った。

「だから言っただろ、ジムサ。おまえは目付きが悪すぎるって。何でもかんでもそう睨むもんじゃないよ」

「フィディアスほどじゃありません」

「何か言っただか」

別の女の酌でおとなしく呑んでいたフィディアスが、切れ長の瞳で鋭くジムサを睨む。ディアネイラは綺麗に巻いた前髪を直し、つんとした口調で尋ねた。

「あの人、いったい何なんですか？ 家来にしてはずいぶん態度が大きいですわねえ」

ディオは愉しげに笑い、片膝をたてて座り直した。

「ま、命の恩人だからな。少しくらいの無礼は許してやるさ」

「——命の恩人？」

「先だつてのファウニ戦でな」

「……旦那さまも戦争に？」

ディアネイラの口調がわずかにこわばる。ディオは頷き、酒を一口啜った。

「ああ、おかげで命拾いをしたんだ。代わりにこいつが死にかけたがね」

蒼い目を睜ったディアネイラが、弾かれたように振り向いた。

「あいつ、顔に派手な傷があるだろ？ 服で隠れているが、胸にはもつと大きな傷がある。長剣でばつさり斬り付けられてな。もう少し傷が深かったら死ぬところだった。そうだな？ ジムサ」

「おかげさまで助かりましたから」

ジムサはぶつきらぼうに応じた。

別に死ぬ気ではなかったわけじゃない。たまたま近くにいただけなのだ——。

第2章 赤い花の館（2）

猛然と騎馬で斬りかかってくるファウニの兵。

かろうじて受け止めたものの、火花を散らして剣は砕けた。刃の折れる残響さえ消えぬうち、返す刀でジムサは懷深く斬りつけられていた。

直前に受けた衝撃で鞍からずり落ちかけていなかったら、勢いで肋骨まで叩き折られていたことだろう。

ジムサの馬は均衡を失ってよろめき、隣にいた馬にぶつかった。
それが、どういうわけか王太子の乗馬だったのだ。

移動中に奇襲され、バークトリシュ軍は一時的な混乱状態にあった。

ひとときわ輝く王太子の銀色の兜は乱戦のなかでも目立つ。大将を討ち取るうと勇んだ敵兵は、たまたま標的の側にいた邪魔者を薙ぎ払っただけだったのだろうが、そのせいで勢いが殺がれ、兵士は剣先が届く前にその胸を王太子の持つ槍で貫かれていた。

鈍く輝く槍の穂先が、曇天に鮮血を撒き散らす。

それが、ジムサの最後に見た光景だった。

意識が戻ったとき、ジムサは陣地に設置された幕舎で手当てをされていた。そこが王太子の幕舎だと知らされ、ジムサは朦朧とする意識のなかでさえひどく驚いた。

退却にあたって王太子はわざわざ気絶したジムサを自分の馬上に引き移し、連れ帰ってくれたのだ。

彼もまた満身創痍であったというのに。

その後、ディオメデスは負傷を押してすぐに行動を起こし、油断していたファウニの大隊を巧みに追い詰め、ほとんど全滅させた。司令官クラスの王族を何人も人質にとられたファウニは、こうなつてようやく和平交渉に応じる気になったのだった。

怪我で身動きとれず、最後の攻防戦にジムサは従軍できなかった。傷がふさがり、何とか起き上がれるようになった頃には、ファウニとの交渉は最終段階を迎えていた。

王都に戻ったジムサは引き続き王太子の館で治療を受け、軍装を解いたディオメデスと時折顔を合わせるようになった。

やがて王太子は、折れた剣の代わりだと言ってエンギシャル鋼の見事な長剣を一振りジムサに与えた。

エンギシャル鋼の剣は、将校でもそうそう持てるものではない。ありがたく受け取りはしたが、変わったお人だとジムサは思った。

たかが属領出身の傭兵。楯のように使い捨てられたところで文句は言えないのだ。

遠い属領出身の兵がめずらしいのか、王太子は気さくにあれこれと尋ねた。それもまたジムサには戸惑いのもとだった。

何故だかわからないが王太子は彼を気に入ったようで、傷が癒えるとジムサは彼の側仕えをするようになった。試みに剣を交えたフイディアスが、腕はなかなかいいと仏頂面で保証すると、反対するものはいなかった。

待遇がぐんとよくなったのはともかくとして、同郷の仲間とひとり離れてしまい、さらに戦が終結した後も王太子は帰国の許可をなかなか出してくれなかった。

一刻も早く故郷に戻りたいジムサにとって、王太子のお気に入りになったことは光栄ではあったが、しごく迷惑でもあった。

今まであった諸々の出来事を思い出し、ジムサは軽く睨むように主君に視線を向けた。ディオは奇妙に鋭い微笑を口の端に浮かべ、鋼のような瞳で彼を見返した。

「こいつはな、故郷で可愛い許嫁が待ってるんだとさ。だから、何があっても生きて帰らなきゃならなかった。死ぬわけにはいかなか

つたんだ」

「……誰だつてそうでしょう、家族を残して出征していれば」
むっとした口調で言い返し、ジムサはぐいと酒をあおった。

——どうしてそんなことをわざわざここで喋るんだ。

これ以上俺に構わないで、放つといてくれ。俺はサイラムへ帰るんだ。愛しい女が待つ、懐かしい故郷へ。

「まあ、いいですわねえ」

フィディアスの酌をしていた女が夢見るような声を上げた。

丸顔のぽっちゃりとした人好きのする色白美人で、痩せぎすで苦虫を噛み潰したようなフィディアスとは対照的だ。

「ロマンスだわ。この辺の歌にもありましてよ。戦争で引き裂かれた恋人たちが、苦難を乗り越えて再会し、永遠の愛を誓う……」

「だったらこんなところで遊んでいないで、さっさと帰ったらいいが」

おもねるところかすげなくぴしやりと言い放ち、ディアネイラはこちらに背を向けてしまった。

——やっぱりメイシャじゃない！

酌をする彼女の背を睨みつけ、ジムサは心のなかで毒づいた。

メイシャならそんな厭味なんか絶対言わない。彼女は優しく、何よりも思いやりがあった。

いつも俺のことを気づかせてくれたんだ。人気の遊女だか何だか知らないが、こんな可愛げのない女なんか無視だ無視！

ジムサの不機嫌を見て取り、ディオが苦笑しながらディアネイラをいさめた。

「まあ、そう厳しいことを言いなさんな。本当のところこいつは堅物で有名でなあ。いやがるのを俺が無理やり引きずってきたのさ」

ジムサが言い返そうとすると急に部屋の扉が開き、顔いっぱい愛想笑いを浮かべた女将がふたたび姿を現した。

「お待たせしてしまって、大変申し訳ございません。あちこちのお部屋からかき集めてきたものですからねエ。さっ、当店自慢の美女

たちによる奏樂と舞を、どうぞ心ゆくまで御堪能くださいませ」

女将が手を叩くと、笛や琵琶を抱えた女や色鮮やかな薄絹をなびかせた踊り子たちが次々に部屋に入ってくる。

陽気に鳴り響く音楽のなか、ジムサはむっとりとしていた。無視を決め込んでみても、つい気になって彼女の方へ目が向いてしまう。親しげにディアネイラの肩を抱き、彼の主君は楽しそうに舞を眺めていた。時折何やら彼女に話しかけていたが、その声も彼女の返答も、賑やかな音楽に紛れてジムサの耳には届かなかった。

歌舞が一区切りすると、ディアネイラが立ち上がった。ディオに向かつて優雅に一礼し、彼女は側に控えていた少女をひとり伴って部屋から出て行ってしまった。

すかさず別の妓が男の傍らに侍る。ディアネイラが姿を消しても、音楽は続いた。

どうしたのかと思っていると、やがて衣装を替えたディアネイラが戻ってきた。

額に大粒の宝石の揺れる細い金環をつけ、手首と足首には細かい銀の鈴のついた環を嵌めている。彼女が歩を進めるたびに涼やかな音が響いた。

胸元を飾る、琥珀と真珠のネックレス。髪にきらめくビーズを編み込み、紅を挿した唇で艶麗にディアネイラは微笑んだ。

ディオが愉快そうに拍手をした。

「真打ち登場だな」

ジムサは思わず息を詰めた。ディアネイラが舞うのだ。

ひととき高く琵琶が鳴り、呼吸を合わせてふたつの笛がテンポの早い舞樂を吹き始めた。

ディアネイラの細い足首でしゃんしゃんと鈴が鳴る。きわどくしなやかに身体を反らし、彼女は袖を優雅に振りながら舞い始めた。ディアネイラの舞は、前座の踊り子たちをはるかに圧倒するものだった。

何より存在感がまるで違う。

指先や眼の動きのひとつひとつにいたるまで、すべてが妖艶な磁力に満ち、人の目を惹きつけて離さない。

婀娜に微笑む口許や、誘っていながら突き放すような不思議な瞳。艶美な曲線を描く腕や脚の微妙な動き。

体重がないかのように跳躍してはふわりと着地し、足音はたてず鈴だけが楽を圧して凜と響く。

ジムサは瞬きも忘れて彼女の動きを追っていた。

一度だけ、ジムサはメイシャが神殿で舞うのを見たことがある。

そのとき彼女は大勢のなかのひとりだったけれど、まるで彼女の周りだけ光が射しているかのようにジムサには見えたのだった。

なんと美しいのだろう。

湖に住まう女神の愛娘たちは、きつとこんなふうに舞うに違いない――。

だが、神殿の奉納舞とディアネイラの舞は、同じように美しく見えてもやはりまったく異なるものだった。

ディアネイラの微笑みは、つねにこの場の主たるディオに向けられていた。

美しい身体の線を効果的に見せつけ、誘うようなまなざしを透ける袖の陰に隠してはちらりと覗かせ、蠱惑の笑みを浮かべるのだ。

愛しいメイシャの顔が、見知らぬ表情で男を誘っている。

ジムサの胸はやりきれなさ苦痛で破裂しそうだった。

優艶な舞を披露するあいだ、ディアネイラの視線は一瞬たりともジムサの上に留まることはなかった。

大金で自分を贖^{あがな}った男のためだけに舞っているのだと、まるでそう宣言するかのように。

眼をそらしながら口にした葡萄酒が、ひどく苦く感じられた。いたたまれなさが限界に達し、ジムサは逃げるように席をたった。

「あの……っ」

追いつがるように声を上げたイオレーをわずかに振り向き、言い訳のようにジムサは呟いた。

「ちょっと外の空気を吸ってくる」

イオレーは寂しげな顔で頷いた。

「……お早くお戻りになって」

断りも入れず足早に出て行くジムサの姿を、ディオはただ黙って見送っていた。

第2章 赤い花の館（3）

人気のない中庭に降り立ち、ジムサはほっと息をついた。

上階の回廊越しに、あちこちから音楽や笑い声が響いてくる。

客の入りはいいようだ。

やんやの喝采が、後にした部屋の辺りから聞こえてきた。ディアネイラの舞が終わったのだろう。

彼女がふたたびディオの傍らに侍り、上気した顔で男に向かって微笑みかける光景が思い浮かび、ジムサは慌てて頭を振った。

長方形の中庭は、井戸を中心にこぢんまりとした庭園のようになっている。名も知らぬ花々が咲き乱れるなかにふと見覚えのある花を見つけ、ジムサは大腿に歩み寄った。

「カラー ज्याの花……？」

生まれ故郷のサイラムでよく見かけた花だ。真っ赤な花が咲いた後に甘酸っぱい実をつける。生け垣として民家だけでなく宮廷や神殿にもよく植えられていた。

湖のほとりにもたくさん咲いていた。その花を背景に微笑んだ少女の面影が、否応もなく脳裏に浮かび上がってくる。

上階から伸びやかな歌声が聞こえ、ジムサは反射的に振り仰いだ。

——メイシャ……！？

……いや違う。

あれはディアネイラの声だ。彼女が歌っているのだ。

ジムサには聞き覚えのない唄だった。少々きわどい俗謡のようだ。時折、掛け合いのように別の女の歌声も混じる。

また、ディアネイラが歌った。合わせて囃す他の女の声と手拍子の音。

彼女の声は、顔と同じくらい、いやむしろそれ以上に、メイシャによく似ていた。

ジムサは爪が掌に食い込むほど強く、拳を握りしめた。

どういふ悪ふざけなのだ？　これは。

メイシャにそっくりな顔、そっくりな声。それでいて見たこともない表情、見たこともないしぐさ。メイシャと同じ声が、知らない歌をうたう。

まるで悪夢を見ているようだ。

ジムサはなお強く拳を握りしめ、カラージャの花を睨み付けた。

あのときもこの花が咲いていた。

彼女に別れを告げたとき。

必ず帰ってくると誓い、生け垣からこの花をとって彼女に手渡したのだ。

最後に見た、花をくちびるに押しつけて立ち尽くす彼女の姿。

あふれそうな涙を必死に押し止め、嗚咽をこらえながら自分を見送るメイシャの姿は、幾度となく夢に立ち現れた。そのたびに夢の中で叫んだ。

待っていてくれ、メイシャ。

必ず生きて帰るから。

必ず――。

初めて出会った時、メイシャはひっそりと泣いていた。決して泣き虫というわけではないのに、ジムサは彼女が泣いている場面にはばかり出くわす。

そこはサイラム王宮でもほとんど人気のない、神殿の裏手だった。嗚咽を懸命に押し殺そうとしながら出来なくて、手で覆った口許からくぐもった泣き声が洩れている。

少し手前で彼女に気付き、ジムサは反射的に足を止めた。

何とも間の悪いところを通りがかってしまったものだ。気付かれ

ぬうちに忍び足で引き返そうとしたのだが、その途端、ジムサは小枝を踏みつけていた。

パキッ。

枝の折れる乾いた音が、午後の静寂に白々しく響く。

彼女は弾かれたように振り向いた。ぬれた頬が木洩れ日に光る。思ったよりもずっと若い、自分と同じ年頃のほっそりした少女だった。きつと見習いだろう。

彼女は涙の溜まった瞳を茫然と見開いて、ほうけたようにジムサを見ていたが、我に返ったように眼を瞬くと、くるりと背を向けた。「な、何か御用ですか……」

内気そうな小さな声で彼女は尋ねた。やや鼻にかかった声が、涙の余韻を偲ばせる。気まずさにこめかみを掻きながらジムサはぼそと答えた。

「あ……、定時の見回りで……」

「それはご苦労さま……」

「あの……、お腹でも痛いのか？」

何となく素知らぬふりで行き過ぎることができず、ジムサは尋ねた。少女はしばらく背を向けたまま黙っていたが、やがておずおずと肩越しに横顔を覗かせた。

「別に」

「あ、そう。それはよかった。俺、まだよく熟していないカラージャの実を食べて腹痛を起こすことがよくあるもんだから……」

「食べてないわよっ」

彼女はジムサの言葉にぴくりと肩を揺らし、怒ったような口調で言った。ジムサは慌てて手を振った。

「そっ、そうだね。巫女さんがそんなことするわけないよねっ」
少女は横を向いたまま黙っていた。そのうち視線を落としてぽつりと呟く。

「……食べたことは、あるわ。うんと子どもの頃だけだ」

「あっ、そう。やっぱり誰でも一度はやるんだ」

少女は微かに笑ったようだったが、泣き顔を見られるのが嫌なのかこちらを向こうとはしなかった。ジムサはもぞもぞと足踏みをした。

「あのー……。俺、そっちに行きたいんだけど」

「……え？」

「今日の巡回路なもんだから……」

少女は黙って神殿の壁際に寄った。警備用の槍を持ったジムサは、視線を逸らしながらぎくしゃくした足どりで傍らを素早く通り抜けた。

「こんな裏の方まで巡回してたのね。知らなかった」

少女の呟きにジムサは振り返った。

「いや、普通は通らないんだけど……。俺、新人だから、王城内の配置とか覚えなきゃならなくて。何日かずつ全部の通路を通らされてるんだ」

「そうなの」

少女は相変わらず半端に顔をそむけたまま曖昧に頷いた。

「あの……。私が泣いていたこと、黙っていてくれる……？」

「そんな、言わないよ、もちろん」

「ありがとう」

少女はようやく向き直り、はにかんだように微笑んだ。彼女がとても美しい少女であることに、今になってジムサは気付いた。実際彼女は、ジムサの知るどの女の子よりも綺麗で、そのうえに不思議な気品があった。

翌日も同じように神殿の裏を通ったジムサは、昨日の少女が同じ場所に佇んでいる姿を見て足を止めた。今日の彼女は泣いてはおらず、人待ち顔で手に小さな籠を持っていた。

少女はジムサに気付くとほんのりと頬を染めて微笑み、籠を差し出した。なかには干した無花果いちじくが入っていた。

「お供えの残りだけど、よかったらどうぞ」

「ありがとう……」

ジムサは懷に干し無花果を詰め込みながら、彼女の優しい美貌に見とれていた。

「あ、俺、ジムサって言うんだ」

「私はメイシャよ」

にこり、と彼女は笑った。

——きつといいところのお嬢さんなんだろうな。

彼女から漂うふんわりと閑雅な雰囲気、ジムサはそんなことを思った。

第2章 赤い花の館（4）

メイシャが断絶した名家の末裔であることをジムサが知ったのは、しばらく後、打ち解けて彼女と話すようになってからのことだった。サイラムの巫女はすべて貴族の娘たちだ。わずかな例外を除けば、選ばれるのはもっぱら由緒ある家柄の出身者ばかりである。

巫女として神殿に勤めることはサイラム貴族の子女にとって身分の証ともなるのだ。しかし正式な巫女にまでなる者は、ほんの一握りにすぎない。ほとんどが見習いのまま数年で還俗してゆく。

つまり神殿は良家の子女の行儀見習いの場所にもなっているのだ。メイシャもまたそうだったようにいる見習い巫女のひとりだった。

ただ、彼女の立場は少し異質ではあった。

両親はすでに亡く、彼女の叔父が奪い取るようにしてその後を継いでいた。叔父によって彼女は神殿に預けられたのだが、叔父には厄介者の姪をふたたび引き取る気などまったくないことは明らかだった。メイシャはたまの休日にも家に戻れず、いつも神殿に居残っていた。

要するに身ぐるみはがされ追い出されたようなものだ。メイシャが生まれ育った家は、現在では叔父夫婦とその家族が占領してしまっている。

吝嗇家の叔父は必要な御布施も最低限しか出さず、神殿におけるメイシャの待遇はそれに見合ったものとなった。

元の身分からすればメイシャよりずっと下の娘たちに上等の部屋や装束が与えられ、供物を運ぶなどの楽な仕事を優遇して割り当てられた。メイシャは床磨きのような目立たないわりに重労働の仕事ばかり押しつけられた。それでもメイシャは文句ひとつ言わず、黙々と働いた。

幼い頃は裕福に育ったようだから、さぞ気位も高く、おはした仕事には我慢ならないだろう。

そうジムサは思ったのだが、メイシャはむしろさっぱりとした顔でこともなげに笑うのだった。

「なかなか気分がいいものよ。自分で磨いたピカピカの塵ひとつ落ちていない祭殿で、誰も見ていないときに好きなように舞うというもの」

メイシャは幼い頃から舞や唄が好きだったという。神殿で頻繁に行なわれる奉納舞は、メイシャにとって巫女としての義務である以上にひそかな楽しみでもあったのだ。

「舞っているあいだは、厭なこともつらいことも、全部忘れていられるもの……。誰の眼にも留まらなくていいの。神々がご覧になって、喜んでくださればそれでいいわ」

俯きがちに呟いた彼女の睫毛に宿る淡い翳に、ジムサは心惹かれた。儚げなその風情に、守ってやりたいと思わずにはいられなかった。

メイシャはいつも目立たぬ場所にひっそりと控えていたが、その才は彼女を埋もれさせはしなかった。

当人が望むと望まざるとに関わらず、メイシャは人前に押し出された。

単に美しいだけでなく、彼女は舞も奏樂も、右に出るものはいないと言われるほど豊かな才能を示した。

これでメイシャが普通の貴族の娘だったら、真つ先に王族の花嫁候補になっていたことだろう。

だが、メイシャの亡父は王の不興をかって宮殿を追われ、力になつてくれるものもないまま病死していた。未だに王は彼に対し鬱屈したものを抱えているようで、正式な墓を建てる許可も降りないはまだ。

ひとり残された娘の美貌に惹かれる者は多かったが、あえて彼女に近づき、王の機嫌を損ねる危険を冒すものはいなかった。

「でも、その方が気が楽だわ。正式な巫女に志願しやすいもの」

メイシャの穏和な声音に、ジムサは無意識に眉を寄せた。

「巫女の任命権は神殿にあるの。王様には嫌われているけど、巫女長は私とその気なら力になると言ってくださったわ。どうせ帰る家もないのだし、このままずっと神殿で神々に舞や唄を捧げて暮らしたい……」

それでも彼女の美貌や才能をねたむ者は多く、メイシヤは何かとというといじめられていた。他人の仕事を押しつけられたり、ほんのささいなことで悪しざまに罵られたり。

舞を捧げる際に突き飛ばされて転んでしまい、群衆の前で恥をかかれたうえにひどく捻挫したことまでであるという。

最初に出会ったときに泣いていたのも、我慢が限界に達してのとだったようだ。

「ひどいな」

思わず憤慨すると、メイシヤは内気そうに笑った。

「仕方ないわ。みんな、何とかして王族がたの目に留まりたいのよ。自分がそうしたいというより、出世を望む親に厳しく命じられている娘も多いの。みんな必死なのよ」

「そっか……」

娘を王族に嫁がせて絆を作り、政治の中枢に食い込もうという腹なのだ。実際、見初められて嫁入りする例は多い。

メイシヤは涼しい陰を投げかける梢越しに蒼穹を見上げ、独りごちるように呟いた。

「みんな、神々のことなんて二の次みたい。裕福な貴族に嫁ぐことばかり考えている人が本当に多くて、びっくりするくらいだわ。仮にもサイラムを守り給う神々に仕える巫女なのに……。こんなありさまでは、いつか罰がくだるんじゃないかと心配」

「……だから君は巫女になるの？」

急に腹立たしくなつてジムサは語調を強めた。

「不真面目な奴らが多いからって、自分ひとり薄暗い神殿に閉じこもって、神々に供物を捧げて、神々のために舞って歌って、それで一生を終えるつもり？」

メイシャは不思議そうな顔でジムサを見た。

「どうしてそんな怒ったように言うの？」

「べ、別に怒ってなんか……」

へどもどして眼を逸らすと、メイシャはクスクス笑いだした。

「本当は、自分でもよくわからないの。いつか好きな人が出来て、その人も私を好きになってくれたら、神殿を出てもいいとは思うけど」

「えっ……」

慌てて振り向いたジムサをはぐらかすように、メイシャは寄りかかっていた壁を離れた。

「昨夜、夢を見たの」

「夢？」

メイシャは頷き、赤い花の咲き乱れる生け垣に手を伸ばした。

「サイラム湖の夢よ。カラージャの花がいっぱい咲いてたわ。お父様がいて、お母様がいて、私たちは馬に乗って湖のほとりを歩いているの」

懐かしむように呟いたメイシャは、愁うように眉を曇らせた。

「……昔、よく遊びに行ったのよ。お弁当を持ってね。大勢の人が一緒だった。馬の早駆けをしたり、弓矢を競ったり。歌ったり踊ったりしたわ。楽しかった……。もう何年も行っていないわ。今もカラージャの花は咲いているかしら？　今でも湖は空のように蒼いのかしら……」

「連れてってあげるよ！」

唐突にジムサが叫ぶと、メイシャは驚いた顔で振り向いた。赤らむ頬を意識しながら、ジムサは照れ隠しのように強い口調で続けた。「次の休みはいつ？　俺、合わせるよ。事前に届ければ、出かけてもいいんだよね？」

「え、ええ……」

「馬を借りてくる。一緒に行こう」

まじまじとジムサを見つめていたメイシャの顔が、次第にほころ

んでゆく。

「……嬉しいわ」

囁いたメイシャのやわらかな声音に、ジムサの胸はいつそう高鳴るのだった。

第3章 誓い（1）

休暇願いは許可されたものの、ジムサの連れが誰だか知ると同僚はいっせいに顔を見合わせた。

「大丈夫かなあ……」

「何がですかっ」

むっとして噛みつくように訊き返すと、年上の同僚たちは気まずそうに視線を交わし、頷きあった。

「……だつてさ。その娘って、例のほら、カルジャツハの娘なんだろう」

「メイシャは悪いことなんか何もしてませんよ！」

「そりゃそうだけどさ……。でも出世に響くぞ、きつと」

ジムサはふんと鼻息をついた。

「さいわい響くほど偉くありませんから、うちは」

「そうは言ってもなあ」

「ま、いいんじゃないの。その娘にしたって、上流貴族の側女になるよりか、生臭い政争に巻き込まれずにすむだろ」

「それはそうかもな」

「そうだな」

難しそうな顔で頷いたかと思うと、打って変わってニヤニヤしながらジムサの肩をぐいと引き寄せる。

「あんな、ジムサ。確かに見習いは正式な巫女と違って世俗身分も同様だ。花嫁修行みたいなもんだし、恋愛は御法度というわけじゃない。しかし、越えてはならん一線というのもちゃーんとあるんだぞ」

「はあ？」

いぶかしげにジムサは首を傾げた。いったい何を言い出すんだ今度。

「まず、太陽が地平線に沈むまでに彼女を神殿に送り届けたうえで

詰め所に戻ってこなかったら、鞭打ち三十回」

「知ってますよ、それくらい」

「それから、たとえ見習いでも還俗前の巫女さんに手エ出したら、鞭打ち五十回に加えて荒地に三日間追放だからな」

「水は一日分だけだぞー」

「かなりの確率で死んじやうぞー」

にやにやしている同僚たちに、ジムサは怒鳴った。

「わかってますよつ。馬で湖に連れてくだけなんですからっ」

「サイラム湖は一周すると二日はかかるぞ」

「誰が一周するなんて言った!？」

無責任にはやし立てる声から逃れるようにジムサはそそくさと詰め所を出た。

ジムサが休み時間などに見習い巫女のメイシャとお喋りをしていることは、いつのまにか衛兵仲間に知れ渡ってしまっていた。

別にやましいことをしているわけではなく、仕事をサボって会っているわけでもない。昼休みや仕事が終わってからちよつと立ち話をするだけだ。聞かれてまずい話でもなし、こそこそ隠れることもない。

それに、神々に一生を捧げる誓いをたてた巫女や神官でもなければ、サイラムはもともと恋愛にはおおらかな土地柄なのだ。

ただ今回は、メイシャが曰く付きの娘だったことで特別に好奇心の眼を惹いてしまったのだろう。口さがない噂にメイシャが傷つきはしないかと、ジムサとしてはそれだけが心配だった。

馬を借り出して待ち合わせの場所へ急ぐと、市場通りへ続く小さな門の脇にメイシャが佇んでいた。周りは王城へ出入りする商人や食料や物資を載せた馬や駱駝でこった返している。

どことなく不安そうに周囲を眺めていたメイシャは、ジムサに気

付くとほつとしたような笑顔で手を振った。

当然ながら裾を引く巫女装束ではなく、メイシャは動きやすい筒袖の膝丈ワンピースにゆるやかなズボンを着いていた。サイラムではごく普通の格好なのに、ジムサは妙に胸がドキドキした。

初夏の湖は、青空を映してキラキラと輝いていた。

湖畔には緑の草原が広がり、放牧されたサイラム特産の馬の群れがのんびりと草を食んでいる。彼方にそびえる北方山脈の雪の白さが、蒼穹に鮮やかだ。

サイラムは、この湖のおかげで荒れ地のさなかにあっても水に事欠くことがない。

湖から水を引いた灌漑農耕以外にも馬の放牧が特に盛んで、この辺りで育った馬は耐久力があり足の速い名馬として東西各国と取引されている。

湖の周囲ではカラージャが花盛りだった。馬から降りるとメイシヤは珍しく大きな歓声を上げ、湖岸へ走って行った。

馬を引いて歩み寄ると、しばらく黙っていたメイシヤが蒼い湖面をじっと見つめながら溜息のように囁いた。

「……昔のままだわ」

「きつと、ずっと変わらないよ。どれほど時間が経っても、サイラムから人が消えてしまっても、空を映して湖はずっとここにある」

ジムサの言葉に、メイシヤは静かに頷いた。

ふたりは足の向くまま湖岸を歩いた。群がり咲くカラージャを見つめ、メイシヤはふと眉を寄せた。

「知ってる？ カラージャの花には、悲しい伝説があるのよ……」
ジムサは頷き、メイシヤと並んで花を眺めた。

それは、サイラムの城市ができるよりもずっとずっと前のこと。この辺りではいくつもの部族が覇権を競って争いあっていた。なかでも特に憎み合っていた族長同士の息子と娘が、ふとしたきっかけ

で出会い、激しい恋に落ちた。

ふたりは争いの続く故郷に嫌気が差し、手に手を取って新天地を求めようとした。だが、激怒した父親たちが執拗に後を追ってきた。ふたりはついに追いつかれ、無数の矢を射込まれて息絶えたという。互いに固く抱きあったまま……。

彼らの流した血溜まりの中から芽をふき、美しく咲き出たのが、このカラー ज्याの花なのだ。

メイシャは手を伸ばし、花びらにそつと触れた。

「この花は、誓いの花なの。譬え死をもっても愛しあうふたりを引き離すことはできない。永遠に心はひとつだという……」

「うん、知ってる」

ジムサはメイシャの触れた花を摘み取ると、思い切って彼女に差し出した。

「俺も、誓うから」

メイシャは碧い瞳を瞞って花を見つめ、まじまじとジムサを見返した。ジムサは顔を赤くし、しどろもどろと言葉を続ける。

「お、俺さ、来月で見習い期間が終わるんだ。正式に採用されればちゃんと給料も出るし……、その……、かつつかかもしれないけど、ふたりで食べてくくらいだったら、きつと何とかなるんじゃないかと……」

黙っていたメイシャの双眸が、次第にやわらかく潤んでゆく。

「……私、これでもけっこうやりくり上手なの」

涙の粒を輝かせてにっこりと微笑み、メイシャは差し出された花を受け取って口許に押しつけたのだった。

第3章 誓い(2)

湖から戻ってしばらくすると、ふたりが結婚するつもりらしいという噂がどこからともなく広がった。

それは醜聞というより揶揄まじりの祝福であり、底意地の悪さを秘めた安堵でもあった。

身分を鼻にかける貴族の子女たちからすれば、箸にも棒にもかからない一兵卒の若者と交際するなど、あまりに愚昧な行為である。

メイシャがジムサとの噂を否定しないことで、王族や上流貴族に見初められる気がないのだと、彼女たちはようやく納得したのだった。

しかも相手が下つ端であることで、メイシャの元の身分に対する妬みや僻みもまた奇妙な具合に帳消しになっていた。

娘たちは、潜在的に最大のライバルが自ら舞台を降りることで、ややゆがんだかたちながら己の自負心を満足させたのだった。

メイシャは信頼する巫女長に結婚を考えていることを告げ、還俗の時期について相談を始めた。

還俗には叔父の許可もいるが、持参金なしの条件さえあれば、どこへ嫁に行こうが知ったことではないらしい。ともかく叔父は、王の心象よろしくない姪になるべく関わりたくないのだ。

ジムサは町中に新居を探し始めた。やがて手頃な場所が見つかり、一緒に見に行こうと考えたジムサは、勤務が終わるのを待ちかねて、いつも神殿の裏手へ飛んで行った。

急ぎ足で生け垣の間を歩いていると、どこからか悲鳴のような細い声が聞こえてきた。

——メイシャ！？

慌てて駆けだすと、神殿の壁に身体を押しつけられて暴れているメイシャの姿が見えた。のしかかるように彼女を押さえつけている男にジムサは怒声を張り上げた。

「おいつ、何してるんだ!？」

男の力がゆるんだ隙を突き、素早く束縛から逃れたメイシャは泣きそうな顔で走ってきてジムサの背後に隠れた。恐怖をにじませる彼女の乱れた息遣いを耳にするとますます怒りが増し、ジムサは手にした槍を荒々しく握り直した。

鋭く誰何の声を投げると、男は悪びれた様子もなく悠々と振り向いた。

衣服からして衛兵や兵士ではない。凝った柄の短剣を革ベルトに挿し、丈の長い薄手のマントを片方の肩に気取った様子に撥ね上げている。

一見して高位の貴族で、しかもジムサはその顔に見覚えがあった。気障ったらしい仕種で髪を掻き上げ、男は口の端を歪めた。皮肉っぽい笑みを浮かべたつもりらしいが、小狡そうにしか見えない。

「無礼だぞ、下っ端兵が」

横柄きわまりない口調にむっとしながら、ジムサは頭を下げた。

「……失礼しました。エルディク殿下」

それは現国王の甥、エルディク王子だった。王には嫡子がいないため、実質的な王位継承者とみなされている人物だ。

——とりあえず今のところは、だがな。

ジムサは心のなかでこっそり付け加えた。

口の達者な男で、王の自尊心を巧みにおおってお気に入り地位を得た。口だけでなく、武芸や乗馬、学問などもひととおりはそつなくこなし、臣下からの評価も悪くはないが、城の召使たちの評判だけはかんばしくなかった。

酒や女色を好む者は珍しくないが、彼はあまりに女癖が悪かった。それも、洗練された恋の駆け引きというよりも、無知で素朴な若い娘をたらし込むのが好きなのだ。王城へ奉公にあがった若い娘は軒並み彼の餌食にされる、というのがもっぱらの噂だった。

サイラムでは巫女以外は処女かどうかなど大して問題にされないが、純朴な娘たちのなかには本気でエルディクに惚れてしまい、い

いようにもてあそばれた挙げ句に大きなお腹を抱えて城から追い出された者も少なくないという。

加えて城の衛兵を私用に使うのも当然の権利と思っているようで、夜這いの見張りをさせられたと憤慨する衛兵も後をたたない。

ジムサも先輩からくどくど愚痴を聞かされたことがある。何でも無理強いされた娘の方から共謀者と見なされて、ひどく恨まれてしまったのだそうだ。

だが、奉公にあがる娘と一口に言っても、高位の婦人の侍女や小間使いとなるようなそれなりの家柄の娘には、エルデイクは決して手を出さなかった。ゆえに、怒り狂った父親が王に苦情を申し立てるようなこともなかったのだ。それに彼は未だに独身であり、浮気をとがめる夫人も存在しなかった。

そんな傍若無人なエルデイク殿下も、さすがに神殿の巫女には手を出さずにいたのだが、ついに神々への尊崇の念までなくしてしまつたのだろうか。不名誉極まりない現場を押さえられたというのに、エルデイクはあくまで尊大な態度を崩さなかった。

「失せろ。無礼は見逃してやる」

怒りを抑え、ジムサは声を低めた。

「おそれながら無礼はどちらでしょう。巫女に乱暴を働くのは、神殿に唾を吐くも同様の行為なのでは？」

エルデイクは鼻に皺を寄せ、せせら笑った。

「そいつはただの見習いだろう。しかも、まもなく還俗する。そうだな？」

メイシヤは青ざめたまま黙っている。代わりにジムサが押し殺すような声で問い返した。

「それが何ですか。あなたには無関係のはずだ」

「関係はある。何、そいつが還俗したら妻にしてやろうと思つてなあ」

傲慢に顎を反らすエルデイクを、ジムサばかりでなくメイシヤもまた& a m p ; # 2 1 8 5 4 ; 然として眺めた。

「――彼女を、ですか？」

あまりに唐突すぎる発言に、ジムサはぼかんと聞きかえした。

「そうさ。うまくすれば次期王妃だ。ありがたいことじゃないか」

「わ、私は……っ」

たまりかねたようにメイシャはジムサの背後から飛び出し、拳を握りしめて叫んだ。

「私はカルジャツハの娘です！ 王の不興をかって追放された男の娘。そのような者を娶るなど、陛下がお許しなるわけがありませんっ」

「お許しになるよ。どういう風の吹き回しか知らないが、伯父上は最近になって気を変えたんだ。カルジャツハの罪を許し、改めて墓を建ててよい、とな。疑うのなら叔父貴に訊いてみるといい」

エルデイクはメイシャに顎をしゃくった。メイシャは絶句して立ち尽くしている。

「そのついでに、残された娘の処遇も案じられてな。メイシャを妻として迎えてはどうかと俺におっしゃったんだ。俺は独身だし、元はと言えば彼女も王族に近い名家の出身だ。出世の見込みもない一兵卒なんぞより、よっぽど釣り合うだろう？」

メイシャは悲痛な声を振り絞った。

「お断りします……！ 私は、この人と結婚すると決めたんですから！」

「そりゃ無理だな」

エルデイクは怒りもせず、ニヤニヤしながらふたりを眺めた。ふだん穏和なメイシャがカツとしたように眉を逆立てる。

「女にも結婚相手を選ぶ権利はあります！」

「ああ、そうだな。だが、好きななら誰でも許されるというわけじゃない。わかるだろ？」

「……どういう意味ですか」

エルデイクの目付きに厭な予感を覚え、ジムサは低く呟いた。

「兄にでも訊いてみるといい」

嘲笑まじりに言い放ち、エルディクは気取った礼をしてさっさと行ってしまった。

「どうということ……？」

茫然と、メイシャが呟いた。

「わからない……。とにかく兄貴に訊いてみるよ」

「私も叔父上に、お父様のことが本当かどうか訊いてみる。許されて、ちゃんとお墓が建てられるのなら、それはもちろん嬉しいけど……」

語尾を濁し、メイシャは小さく身震いした。黒雲のような不安が、ふたりの胸に広がり始めていた。

第3章 誓い(3)

その夜、ジムサは許可を貰って軍の宿舎を訪ねた。

ジムサの長兄バルクルは軍の十人隊長だ。「長」がつく一番下の位である。次兄のパジルは妻と共にほそぼそと実家で農業を営んでいる。両親はすでに亡い。

ジムサから話を聞いたバルクルは、渋い顔で顎をさすった。

「まあ座れ」

促されたジムサは落ち着かない気分で粗末な椅子に腰を下ろした。向かいに座った兄は溜息まじりに告げた。

「残念だが、それはエルディク様のおっしゃるとおりだ」

「——何でだよ!？」

「身分が違う」

わけがわからず、ぽかんとジムサは兄の顔を眺めた。バルクルはすっぱいビールの杯をおり、顔をしかめた。

「そのメイシャって娘は貴族なんだろ」

「うちだつて一応そうじゃないか。そりゃ、メイシャの家ほど立派じゃないけど……。でもメイシャは早くに両親を亡くしてるし、今は叔父さんが仕切つててメイシャは爪はじきにされてるんだよ」

「それでも貴族だろ。うちは違う」

ジムサは啞然と目を睜った。

「え……？ でも、父さんは世襲の騎士だったんじゃない……」

「確かにそうだった。だが、その地位を失ったんだ」

「そんな……、どうして……」

「父さんの不名誉について詳しいことは言いたくない。ともかく、今ではうちは、ただの平民なんだよ」

「でも兄さんは十人隊長で……」

「十人隊長は平民でもなれる。何人かの上官の推薦があれば」

「じゃあ、俺が衛兵になれたのは!？ 王城警備は少なくとも騎士

階級じゃなければだめはずだ！」

むきになって食い下がる弟から、バルクルはつらそうに目をそむけた。

「俺の上官から衛兵隊長に特別に頼んでもらったんだ。父さんと隊長は昔なじみだったし、ちょうど欠員が出てな。まあ、言葉は悪いが誤魔化した。……そういえば隊長はこのところずっと病欠してたけな。知っていればたぶん、注意してくれただろうが」

「何で今まで黙ってたんだよ……！」

「おまえは父さんのことをすごく尊敬してたから、どうも言い出しづらくてな」

「だって、母さんは……」

お父さんはとても立派な人だった、というのが母の口癖だったではないか。ことあるごとに母はジムサにそう言ってきかせた。死の床に横たわっていてさえも。

「……父さんが死んだとき、おまえはまだ物心ついてなかったからな。母さんもせめておまえにだけは疑うことなく父さんを尊敬していてほしかったんだろう」

「ごっこん、と鈍い音をたて、バルクルは無骨な杯をテーブルに戻した。

「ま、とにかくそういうわけだ。どんなに惚れた相手でも、俺たちは貴族の娘とは一緒になれない。縁がなかったと思って諦めるんだな。——何、そうがっかりすることもない。他にも可愛い娘はいくらでもいるぞ。何なら俺が探してや……、おいどこ行くんだ」

答えもせず、ジムサは兄の家を飛び出した。目に見えない壁が、最初から自分とメイシャの間に存在していたことを、ようやくジムサは思い知ったのだった。

蒼白な顔でジムサの言葉を聞いていたメイシャは、かすれるよう

な小さな声で囁いた。

「私も、叔父上に訊いてみたの。……本当だったわ。お父様の名誉は回復したの。王が直々にそうおっしゃった、って……」

メイシャは蒼い眼を睜り、こくりと小さく喉を鳴らした。

「……夢を、ご覧になったそうよ」

「夢……？」

「王の夢に現れたお父様が、自分は陥れただけで本当は無実だと訴えたんですって。それを認めない限り王は子どもを授からず、やがて王家の血筋は絶えるだろう、と……。それは恐ろしい夢だったそうよ」

「そんなの、ただの夢だろ……」

「ええ、でも王はなかなか跡継ぎが出来ないことを悩んでいらしたから、すっかりそれを信じ込んでしまったようなの。それで急遽お父様の罪を許す布告をし、これまでの罪滅ぼしとして、残された娘の私を王族に迎え入れようとお考えになったのだそうよ」

「そんな勝手な……！ 君の叔父さんはどうなんだ、何て言ってるの？」

メイシャは悲しげに首を振った。

「名誉なことだとすごく喜んで。すっかり決めてしまったかのように、婚礼の日取りがどうか言い出して……。怖くなって私、隙を見て神殿に逃げ帰って来たの」

誰かに見張られてでもいるかのように、メイシャは辺りをこわごわ窺った。すぐに逃げ込めるようにということなのか、彼女は神殿の扉のすぐ脇から動こうとしない。

「どうしよう……」

メイシャは泣きだしそうな声で囁いた。

まったく八方塞がりの状況だ。平民のジムサには貴族のメイシャを妻とする権利がない。一方のメイシャは、打ち捨てられていた不遇な立場が一変したのはともかくとして、不良王族との結婚を強いられそうになっている。

「……いつそのこと駆け落ち、しようか」

呟いたジムサの顔をまじまじと見つめ、メイシャはふるえる声で囁いた。

「やつぱり、それしか、ない……？」

「そいつはやめといた方がいいな」

不意に後ろから傲慢な声が響き、ふたりは飛び上がりそうになった。振り向くと、いつからそこにいたのか、エルディク王子がニヤニヤしながら佇んでいた。その眼には、追い詰められた小動物をいたぶるような残虐な光がちらついていた。

「身分違いの駆け落ちなんぞ、不名誉の極みだぞ。せっかく名誉回復したというのに、また家名に泥を塗るつもりか？　いつまでたっても亡父は浮かばれんなあ」

メイシャはくちびるを噛み、瞳に悲憤を浮かべてエルディクを睨んだ。エルディクは笑みを深め、ちろりと舌を出した。

「怒った顔も美しい。なあ、ジムサとやら。こんなに美人でしかも身分の高い女は、どう考えてもおまえには釣り合わないよなあ？

もつとふさわしい相手がいるはずだ。そう、身分も地位も財産もある男……」

「——あなたのような？」

ジムサは皮肉のつもりで言ったのだが、エルディクには通じなかった。彼は大きく胸を張った。

「その通り！　俺なら彼女を身分と美貌にふさわしく扱ってやれる。セレス渡りの絹の衣装を着せて、金銀宝石で飾るのさ。遠い海の珊瑚や真珠だつて取り寄せてやる」

「そんなものほしくありません」

勇気を振り絞って言い放ち、メイシャは美しい眉を悲愴に逆立たた。

「忘れていらつしやるようですが、サイラムの女は結婚相手を自ら選びます。誰にも無理強いはさせない。それが、サイラムの伝統ですわ」

「それは昔の話だな。部族ごとにちつぽけな天幕に住んで、羊の群れを追い回していた時代だったらそうかもしれないが、サイラムは今や確立した都市国家。そんな勝手は通らない。王命には従わねばならぬ」

メイシャはあえぎ、目頭に浮かんだ涙で悔しげに瞳を光らせた。おつとりとしたメイシャには、こうやって言い返すだけで精一杯なのだ。口達者なエルディクをやり込めることなど出来るはずもない。ジムサは彼女を背にかばい、必死に考えを巡らせた。何か手だてがあるはずだ。少なくともこの男と一緒になつてメイシャが幸せになるとは思えない。今までメイシャと話していて、彼女が欲しているものが何なのかジムサには理解できた。

メイシャが望んでいるのは温かな家族だ。贅沢な暮らしや高い身分などではない。互いに思いやり支えあう家族こそが、彼女の渴望するものなのだ。

エルディクが言うように確かに自分には身分も財産もない。メイシャに楽な生活はさせてやれないだろう。それでも彼女を大切にしたい新しい家族になることだったらできるはずだ。

いや、彼女とともに、新たな家族を作っていきたいと、そう願ったのだ。そんな自分の想いを、メイシャは受け入れてくれたのだ。

エルディクの妻となれば、メイシャはまた捨ておかれる。きらびやかな衣装をまとい、美しい宮殿に住んだとしても、彼女は孤独のうちに取り残されるだろう。そんなことは、絶対にさせない――

不愉快そうにエルディクはジムサを睨んだ。

「不遜な目付きだな。気に入らん。貴様を牢に放り込むことくらいたやすいのだぞ。身分を詐称して王城へ潜り込むとは何か魂胆があったのだろう。王の暗殺でも企んだか？」

「馬鹿な！」

「知つてのとおり、反逆罪は死をもって償わねばならぬ。吊るされるのは貴様ひとりでは済まないぞ。貴様の兄、貴様を採用した衛兵

隊長、直属の上官、みな連座したとみなされることだろうな……」
言い返そうとするジムサを押し退けるように、メイシャが憤激の声を上げた。

「そんなことしたら、命をかけて王に訴え出ます！ 神聖な神々の裁きを要求するわ。そうなたらあなたは私と一緒に毒を飲まなければならぬ。そして嘘をついた方が死ぬ。あなたにはその覚悟があるのですか！」

「おお、怖い怖い。まさか俺がそんな酷いことをするわけないじゃないか。俺は優しい男なんだぞ」

冗談のつもりかエルディクは『優しい』を特に強調したが、メイシャは激怒に眉を撥ね上げたままこわばった表情をぴくりとも動かさなかった。

「なあ、ジムサとやら。おまえのささやかな罪は俺の胸にしまっていてやるよ。だが、衛兵としてどれほど勤勉に働いたところで騎士階級に返り咲くことは不可能だ。何ぞ華々しい功績でも上げない限りは」

エルディクはしたり顔でひとり頷きながらその辺を歩きつ戻りつしている。ジムサは眉をひそめ、その姿を疑わしげに睨んだ。

「幸か不幸か我が国はこのところ平穏安泰。バークトリシユの属領とはなったが、東のセレスとの関係も良好で交易も安定している。せいぜいケチな盗賊か何かを追いかけて回しているうちに、昇進の機会もなく白髪になってしまっただろう」

ジムサは醒めた目を眇めた。

——今度はいったい何なんだ？

もったいぶって何を言いたいのか、さっぱりわからない。

「それもあんまり気の毒だ、ひとついいことを教えてやろうと思つてな。実はあるんだよ、確実に身分を手に入れる方法が、な」

ジムサは黙っていた。身分がないことを理由に自分を追い払おうとしたエルディクが、何故そんなことを言い出すのか。

エルディクは足を止め、傲然と顎を逸らした。

「聞きたいだろ、ん？」

「……ジムサ。ねえ、もうやめましょう。また後で話しましょうよ」
雲行きの怪しさを感じたか、不安そうに背後でメイシャが訴える。
だが、ジムサは気を惹かれてしまった。

貴族の身分さえあれば、メイシャと結婚できる――。

表情からその思いを読み取ったか、エルディクは嘲るような笑みを口の端に浮かべた。

「よし、教えてやろう。さっきも言ったように、貴族の称号を手に入れるには軍功を上げるのが一番だ。サイラムの貴族のほとんどは、建国にあたって功績のあった軍人の出身だからな」

「……でもサイラムは平穏安泰だとおっしゃったのでは？」

「確かにサイラムはな。だが、バークトリシュはそうとも言えん。北の遊牧民ファウニはしょっちゅう国境を越えてくるし、西隣のパルサワとも互いに牽制しあっているような状態だ。特にファウニは手を焼いているようだ。我が国にも出兵要請が来ている」

その噂は、ジムサも衛兵仲間からちらりと聞いていた。エルディクはあながちホラを吹いているわけでもなさそうだ。

「我が国は良馬の産地で、当然ながら騎兵の質もいい。おまえも馬は得意なんだろ。副隊長に聞いたが、若いくせにかなり腕がたつそうじゃないか」

ジムサは黙って眼を光らせたまま答えなかった。

「王は派兵に乗り気ではないが、まさか本国の要請を無視するわけにもいかん。仮にもバークトリシュは宗主国だ。しかし、正式な国軍からはなるべく出したくない。相手は凶猛で知られるファウニ族だ。我が国が直接襲われたわけでもないのに、訓練した貴重な兵を無駄死にさせたくないからな。そもそもバークトリシュと結んでいる協定は経済上のものだ。派兵の義務なんぞないのさ」

腹立たしくなり、ジムサは眉を吊り上げた。勝手なことをほざくものだ。美味しいところだけつまみ食いして済むとも思っているのか？

しかしエルディク王子はそう思い込んで何ら疑いを抱いていないようだった。

「そこで兵を公募することにした。国軍から何人かは出さなければならぬだろうが、とにかく農民でも牧人でもいいからかき集めて、バークトリシュに義理立て出来る数だけ送り込もうというわけだ。ところが、あと少しというところで人数が足りなくてなあ」

無表情に黙っているジムサを横目で眺めたエルディクは、反応の少なさに眉をひそめると、深刻そうな顔をよそおって行ったり来たりを再開した。

「あまり言い逃れをして遅くなるとバークトリシュの機嫌を損ねる。交易や税制上の優遇が危うくなってはまずいだろ。そこで特別に有利な条件をつけることにした」

ニツとしてエルディクは指を上げた。

「出征に当たっては、前もって相当な報奨金が支払われ、帰還の後には功績に応じて騎士階級に叙する。——どうだ、いい話だろうか？」

「……ようするに傭兵としてバークトリシュへ行けということですか」

そう尋ねたのはメイシャだった。彼女はすっかり青ざめて、くちびるから血の色が消え失せていた。

「そういうこと。いい話じゃないか。金も身分も手に入るんだぞ」
「……断つたら？」

静かに尋ねると、エルディクの顔から笑いが消えた。鼻にかすかな皺が寄り、まるで牙を剥きだしたイタチのような表情でエルディクは囁いた。

「反逆罪で絞首台からぶら下がってもらうさ。貴様と、貴様の家族、ついでに上官もみんなひとまとめにな」

ジムサの背後で、メイシャが小さな悲鳴を洩らす。どちらにしても待ち受けるのは、逃れようのない死の影だ。どうしようもなく顔から血の気が引いていった。

嗜虐心が満たされたか、エルディクは茫然とするふたりをしばし眺めまわし、愉しげに眼を細めた。

「生憎そうゆつくり考えている時間はないぞ。この条件を知れば欠員なんぞすぐに埋まっちまうだろう。今すぐ志願するんだな。そうそう、俺の推薦ということを忘れず付け加えるんだぞ。さもないと、せつかく帰って来ても称号がつかないかもしれない……」

立ち去るエルディクの笑い声が、ひどくゆがんで聞こえる。ジムサは背後でふるえているメイシャに向き直った。彼女は瞳をいっばいに見開いてジムサを見つめた。

選択の余地など、最初からありはしなかったのだ。

ジムサはその足で軍の本部に赴き、バークトリシュへの援軍に志願した。

第3章 誓い（4）

結局、傭兵としてバークトリシュへ派遣されることになったのは、軍人と平民あわせて二百名ほどだった。

受け取った報奨金は、端金ではないにせよそれほどの額ではなく、戦支度を整えると手元にはいくらも残らなかった。ジムサはそれを実家の兄に預け、こもこも別れを告げると、最後にメイシャにひとめ会おうと神殿へ向かった。

何度となく待ち合わせた裏手の通路にメイシャが立っていた。植え込みで咲き匂うカラージャの花をぼんやりと眺めている。

ジムサに気付き、振り向いたメイシャは弱々しく微笑んだ。

「……出発ね」

ジムサは頷いた。

「手を、出して」

そう言うと、戸惑った顔でメイシャは両手の平を上向けた。ジムサは青い石の嵌まった指輪をひとつ、掌にそっと置いた。それは蒼いラピス・ラズリの指輪だった。

「……母さんの形見なんだ。昔から受け継いできたもので、娘が末の息子が受け継いで花嫁に渡すしきたりなんだって。だから君に」
メイシャはしばし黙ってラピス・ラズリを撫でていた。指輪をぎゅつと握りしめ、悲しげな、それでいて毅然とした微笑みを浮かべる。

「肌身離さず持っているわ。……ジムサ。昨日ね、私、正式な巫女になったの」

ジムサは眉根を寄せ、メイシャをじっと見つめた。

彼女はジムサが派兵に志願するのと同時に、巫女長に正式な巫女になりたいと強く申し出ていた。叔父やエルディクからの横やりはあったが、彼女の願いは叶えられた。

メイシャの優れた技芸はすでに神殿内で認められており、父の名

誓回復がなされた今では出自にも申し分がない。加えて本人の強い意志があつた。

王といえど神殿の人事に口出しは出来ない。メイシャをエルディクの妻にと勧めたのは王であつたが、エルディクにどれほど泣きつかれても、強制することは出来ないのだった。

メイシャは小さく微笑んだ。

「巫女になれば、ずっと神殿にいられる。自分の意志で還俗するまでは、ずっと。エルディク王子にも手出しは出来ない。そんなことしたら、王族でも極刑に処されるもの。それくらいのことは、あの人も知ってるはずよ」

「……でも、神殿からは出られなくなるね」

正式な巫女は、神殿の敷地から一切出ない決まりだ。譬え親が死にかけても、里帰りすら許されない。メイシャは悲しげに頷いた。

「そうね……。だから、なるべく早く私を迎えにきて、私をここから連れ出して。待っているから。あなたが帰ってくるのを、私ずっと待っているから——」

懸命に嗚咽をこらえる声に思わず抱きしめようとすると、メイシャは恐れたように後退った。苦しげに眉を寄せ、メイシャは首を振った。

「私に触れてはだめ。見習いと違って、正式な巫女に俗人が触れてはいけないの。私はもう巫女になったのよ、ジムサ。こうしてあなたに会うのも、巫女長に頼んで特別に許可していただいたの。これが今生の別れになるかもしれないから……」

「俺は、必ず帰ってくるよ」

「うん……。信じてる。待っているわ」

メイシャは涙をこらえて微笑み、ジムサに小さな髪束を差し出した。

「これは私よ。私はいつでもあなたのために祈ってる。その想いが、きつとあなたを守　るから……」

ジムサは受け取った髪にくちづけ、大切に懐深くしまった。

「さあ、もう行つて。あまり長くなると叱られてしまうわ……」

ジムサは絶句してメイシャを見つめた。これが最後かもしれないのに、手を握ることさえできないなんて。しかし、そういう状況に彼女を追い込んだのはほかならぬ自分なのだ。

自分を待つために、彼女は自ら檻に入り、鍵をかけたのだ。そうするしか、自分を守るすべはメイシャにはなかった。

——でも、このまま別れてしまうなんて厭だ……！

ジムサは急いで周囲を見回し、目に留まったカラー ज्याの花をひとつ生け垣からむしり取った。

その花をメイシャの口許に押し当て、驚く彼女に構わず花ごしにくちづける。冷たい花びらの感触と苦しいほどに甘い芳香が、くちびるに灼きつく。顔をそむけるようにして、ジムサはその場を離れた。

「……ジムサ！」

追いかけてくる、悲痛な声。胸を衝かれて振り向くと、メイシャは唇に花を両手で押し当て、慟哭を殺しながら蒼い瞳から涙をあふれさせていた。

——帰ってくる。必ず……！

だから待っていてくれ、メイシャ。

血が出るほど強く唇を噛み、ジムサは誓いを新たにした。

軍装に身を包んだジムサが生まれ育ったサイラムを離れたのは、その日の午後遅くのことだった。

第4章 面影（1）

薄暗い妓楼の中庭で、ジムサは群れ咲くカラージャの花を見つめた。

ひんやりとした夜気に、室内で焚かれる香料とは別の、甘い芳香が漂っていた。風がなく、その香りはむせるように濃密だ。

それはジムサの記憶にあるものよりも、ずっと秘密めいて感じられた。別れ際メイシャに差し出したときにはひたすらせつなかつただけなのに、いつのまにか別の花にすりかわってしまったみたいだ。自分だけが、気付かないまま……。

コトリ、と小さな物音がして顔を上げると、回廊の端に立つディアネイラの姿が見えた。朱塗りの欄干に軽く手を置き、凄艶な美貌を無表情にこちらへ向けている。

メイシャの顔。あどけない少女から大人の女に変わった、彼女の顔だ――。

だが、メイシャはこんな表情をするだろうか。まるで精緻な彫像のようにかけらも感情を浮かべず、無感動に自分を眺めたりするのだろうか。

あり得ない。そんな馬鹿なこと……。

きつと彼女はメイシャではないのだ。どれほど似通っていても、どれほど美しくても、あの優しく含羞んだようなやわらかな笑顔を、ディアネイラの冷たい表情に重ねることなど出来ない。

それに、彼女の指にはいくら探してもラピス・ラズリの指輪が見当たらなかった。肌身離さず身に着けていると約束した指輪が……。やはり別人なのだ。そうに決まっている。世間には、似かよった容貌の人間などいくらでもいるじゃないか。それなのに、どうしてこうも心が疼くのだろう――。

葛藤するジムサの内心など知らず、ディアネイラは冷やかな表情のまま優美に片足を下ろした。冷艶な声が涼しい夜気をぬって響く。

「ご主人様がお呼びですわ」

ジムサは答えず、ふたたびカラー ज्याの花を見た。

「……俺の故郷にも、この花がたくさん咲いていた」

ディアネイラは相槌も打たず、退屈そうな顔で手すりを指でたどっている。ジムサはほんの少し語調を強めた。

「元々は、サイラムの湖畔に咲いていた花なんだ。それを取ってきて王城や神殿の周りに植えて生け垣にした。神殿にはいつもこの花が飾られていた。花にまつわる古い伝説もあるんだ……」

相変わらずディアネイラは答えない。聞いていないかのように、横を向いて黙っている。

「……自由な新天地を求めようとした恋人たちが追手に捕まって惨殺され、その血溜まりから萌え出た花なんだ。だから永遠の愛を誓うしるしなのだ……」

「くだらないわ」

ディアネイラは馬鹿馬鹿しそうに肩をすくめた。

「何が永遠なの。結ばれることなく殺されてしまったんでしょ」

「天上でふたりは永遠に結ばれたのさ……」

「そんなの欺瞞よ。この地上で結ばれるのでなければ、何の意味もないじゃないの」

ディアネイラは怒ったように言い、苛立たしげな足取りで階段を下りた。

「寝言は寝てからおっしゃいな。さあ、早くいらして。ご主人様の機嫌を損ねてもいいの？」

ジムサはカラー ज्याの花を一輪摘み取り、くちびるにそっと押し当てた。

「……昔、別れ際にこの花を渡して約束したひとがいるんだ。必ず戻ってくると誓って、この花をそのひとに手渡した」

ほとんど無意識に花を差し出すと、ディアネイラは眉を吊り上げ、差し出された手を打ち払った。ぱしん、と乾いた音が響いた。彼女は敷石の上に落ちた花を腹立たしげにサンダルで踏みつけ、怒りに

輝きを増した瞳でジムサを睨んだ。

「いい加減にして！ 勘違いしないでよ。あなたは私の客じゃない、ただの従者なのよ。ご主人様が言うから仕方なく呼びに来ただけ。従者風情が、遊女の私に言い寄れるとも思っているの？」

踏みにじられた無残な花を黙って見下ろしていたジムサが、顔を上げて静かに尋ねた。

「金を持っていれば、俺の相手もしてくれるのか？」

ディアネイラは一瞬虚を衝かれたような顔で彼を見返したかと思うと、眉を吊り上げぴしゃりと言いつつ放った。

「誰があなたのような野暮天なんかと。おあいにくさま、私のような遊女は客を選べるの。そこいらの娼婦と一緒にしないでちょうだい……」

不意に彼女の言葉から勢いが失せる。視線をたどると、回廊の反対側に妓楼には似つかわしくない、ごく幼い女の子が立っていた。ディアネイラは慌ててジムサの脇をすり抜け、幼女のもとに駆け寄った。

「どうしたの、ミアザ。まだ寝てなかったの？」

女の子は黙って首を振り、ぎゅっとディアネイラに抱きついた。ぱたぱたと奥から慌ただしい足音がして、戸口に人影が現れる。

「ごめんなさい、お姐さん。てつきり寝ついたと思って……」

少しかすれた少女の声だ。粗末な服装からして裏方の下働きだろう。やや長すぎる前髪が半分近く顔を覆っていて、顔だちがよくわからない。

少女はジムサの姿に気付き、慌ててぺこりとお辞儀をする。恐縮したように俯いたまま、少女はディアネイラの背後に隠れようとした。

泣きそうな顔でしがみついてくる幼女をあやしていたディアネイラは、女の子を抱き上げて振り向いた。親密そうに頬を寄せ、ディアネイラはどこか高慢な笑みを口の端に浮かべた。

「可愛いでしょう。私の娘なのよ」

娘……！？

打たれたような衝撃に、声を失う。ディアネイラは幼女のやわらかな頬に音をたてて口づけ、囁いた。

「ミアザ。お母さん、もうちょっとお仕事なの。いい子でおねんねしててくれる？　後で側に行くからね」

「おうたをうたってくれる？」

「いいわよ、ミアザがまだ寝てなかったらね。眠くなるまで唄ってあげるわ」

幼女はようやく頷き、下働きの少女の腕に移った。少女はミアザを抱え、ペこりとお辞儀をして建物の奥へ走り込んだ。

昂然と顎を上げ、優雅な足取りでディアネイラが戻って来る。茫然と立ち尽くすジムサを無視して階段を登る彼女に、慌てて訊きすかった。

「……父親は？」

ディアネイラは足を止め、呆れたようにジムサを見やった。

「遊女にそんなこと訊くなんて、本当に野暮なひとね。救いがたいわ」

冷たく言い捨て、彼女は腹立たしげな足取りで二階へ上がって行った。

ジムサはしばし茫然と立ち尽くしていた。やがて打ちのめされたように歩きだしたものの、鉛の靴でも履かされたかのようにひどく足が重かった。

第4章 面影(2)

部屋に戻ると、ディオドトスがひとり窓辺に座って夜気に当たりながら杯を傾けていた。先に戻ったはずのディアネイラの姿はない。王太子はジムサに曇りのない目を向け、にやりとした。

「うまく口説けたか？」

「——は？」

ディオドトスは溜息をついた。

「そんな調子じゃ成果なんぞ聞くまでもないな。あの女が気に入ったみたいだからおまえに譲ってやろうと思ったんだが」

「余計なお世話です……！」

こめかみに青筋をたて、ジムサはかろうじて怒声を抑えた。

—— いったい何を考えているんだ、この人は！？

「そうか。それじゃ、遠慮なく俺がいただくことにしようかな」

思わずジムサが眼を剥くと、王太子は挑発するような笑みを浮かべた。

「評判の遊女ヘタイラだけあって佳い女だ。美しいだけでなく声も艶があつていいし、舞も一流だ。おまえがいない間にいろいろと話したが、受け答えは実に気がきいていたぞ。ヘラスの詩や演劇にも詳しい。どこへ同伴しても恥ずかしくない。あれこそ詩人が言うところの、神が造りたもうた最高の女。いわゆる 蜜蜂の女 ってやつだ」

「俺には雀蜂に思えますがね」

ぶっきらぼうに呟くと、ディオドトスは痛快な笑い声を上げた。

「ほ。手ひどくふられたと見える。……彼女ならバクトラでも充分通用するだろう。いっそのこと連れ帰って俺の連れにしようかな。気が変わったんならさつさと言えよ」

うそぶいたディオオは玻璃の杯を灯火に透かし、横目でにやりとした。ジムサは意地でも平気な顔を装った。

「どうぞお好きなように。あなたが贖った女ですから」

—— あれは俺のメイシャじゃない。

ただ似ているだけの、別人だ。別人なんだ……。

ディオドトスはつまらなそうに肩をすくめた。

「素直じゃないねえ。—— それじゃ、閨の用意も整ったようだし、後はそれぞれ楽しむとするか」

彼は杯を投げ出し、すつと立ち上がった。あれだけ飲んだというのに、まったく足取りに危なげがない。

今この瞬間、敵に踏み込まれたとしても、 エンギシャルの青い剣 は普段と変わらず閃くことだろう。いとも優雅に、冷酷に……。

気がつけば、ジムサは広い部屋にただひとり取り残されていた。

先ほどまで控えていたはずのフィディアスもいつのまにやら姿を消している。

彼は王太子の護衛だ。主人がお楽しみの中も、閨の入り口で剣を抱えて油断なく眼を光らせていることだろう。

放っておいてもらえれば、かえってありがたいというものだ。その方が気楽に休める。

夜が明けたらすぐ、キャラバン・サライ 隊商宿に戻ろう。そう決めて敷物の上に横になろうとした途端、部屋の入り口に女の影が現れ、ジムサは飛び起きた。

宴席でジムサの傍らに侍っていた女だ。内気そうな若い妓おんな。確かに名はイオレーとか何とか……。娼婦というより初々しい少女のように、彼女は微笑んだ。

「どうぞこちらへ」

「い、いや、俺はここで休むからいい」

「でも、ここは今から片づけますので……。こちらへどうぞ」

そう言われてはやむを得ない。ジムサはイオレーに従って別の部屋へ入った。

ごんまりと整えられた閨には薄暗いランプが灯り、香料がたきしめられていた。派手な寝具のかかった床を見て、今さらながらジムサは青ざめた。

続いて入ってきたイオレーが衣装を留めるピンを外し始め、ジムサは慌てて彼女を押し止めた。

「あつ、あのさ。俺、ちよつと疲れてて、眠いから……。その、何だ、今夜はどうもご苦労さん。金はちゃんと払うから、もう下がっていいよ」

「お代金なら、もういただいています」

イオレーは面食らった顔で、つぶらな瞳を瞬かせた。

「あ、そう……。それはよかった。それじゃ、おやすみ」

とにかく閨から追い出そうと躍起になっていると、イオレーはさすがのようにジムサを見つめた。

「あの、旦那さま。お休みになるのは結構ですが、朝までここにいさせてもらえませんか。何でもします」

「だ、だから何もしなくていいからっ」

イオレーは肩をすぼめるようにしてジムサを見上げた。

「では、ただ隅に置いていただけませんか。追い出されると女将さんに叱られてしまいます……」

「いや、俺が頼んだってちゃんと説明するからさ」

「そうすると、きつと他のお客さんの席に回されてしまいます。私も遊女ヘタイラを名乗ってはいますが、まだまだ新米で。それに、一晚貸し切りのお代をもらったからと言って遊ばせておいてくれるようなひとではありませんから、女将さんは」

「それはまあ、そうかもな。あの様子じゃあ……」

「今日も、たまたまディアネイラ姉様の予定が空いたら、ぷらぷらしていないで街へ出て店の宣伝をして来いなんて言つて……。断られたのはお客さまの都合で、お姉様のせいじゃないのに」

「大変だな、いろいろと……」

いくら贅沢な衣装に身を包み、最高の教養を身に着けていたとし

ても、所詮は金で買われる身の上。妓楼の主の持物なのだ。

「でも、あれで面倒見のいいところもあるんですよ、女将さん」

ふっと小さくイオレーは笑った。そうやって、さりげない思いやりを示す物言いがかつてのメイシャを彷彿とさせ、ジムサの胸はちくりと痛んだ。

イオレーの持つ清楚な風情は、見習いの巫女であった時分のメイシャとよく似た雰囲気があった。この娘に小さな休暇をやるのも悪くないかもしれないと、ジムサは思い始めた。

「いるだけだったら、まあ……」

「ありがとうございます」

イオレーはゆるゆると微笑んだ。

「どうぞお休みになってくださいませ。私はそちらへは参りませんから。……あの、もしよろしければ、何かお聞かせしましょう」

イオレーは部屋の隅にたてかけられた琵琶^{ウード}を目で示した。

「……そうだな。それじゃ、頼もうかな」

につこりと頷き、イオレーは琵琶^{ウード}を抱いて床に座り直した。

ジムサは衣服を緩め、剣をすぐ傍らに置いて横になった。いつでも手の届くところに武器がないと落ち着いて眠れない。野営地での仮眠が習慣づいてしまったのだろうか。

しばらく弦を爪弾いて調律していたイオレーは、やがて細い声で唄い始めた。

透きとおるようなたおやかな声が、甘く囁くように口ずさむ。

花よ花

愛でられる間に咲けよ花

嵐が枝を折る前に

花盗人が来ぬうちに

心のままに咲けよ花

鳥よ鳥

遙か高みで歌えよ鳥
狩人の矢がその胸を
金の鏃やじりでつらぬく前に
自由な羽をむしられて
銀の籠に入れられぬうち
心のままに歌えよ鳥

.....

慰撫するように優しく、それでいて哀調をおびた不思議なイオレ
ーの歌声に、とろりと眠気がさしてくる。

ジムサは刀の柄をしっかりと掴んだまま、ゆっくりと眠りの淵へ
下りて行った。

眼裏に浮かんだ美しい面影は、メイシヤなのか、それともディア
ネイラだったのか。

ただその指で、ひっそりと青いラピス・ラズリが輝いていた。

第4章 面影(3)

開いた窓辺から流れ込んでくるかすかな歌声に、ディアネイラは耳をそばだてた。

イオレーが唄っている。やわらかく優しく、そこはかとなない哀惜が漂う声。ともすればディアネイラでさえ聞き入り、知らず知らずに涙ぐんでしまうことがある。

しかし今夜は、そんな気分にはなれなかった。わけもなくイライラして、ディアネイラは無意識に爪を噛んだ。

「気になるようだな」

皮肉っぽいのか面白がっているのか、よくわからない口調で男が声をかけた。彼はすっかりくつろいだ様子で床に半身寝そべっていた。片肘について半身を起こし、窓辺に佇むディアネイラを眺める双眸は怜悧で、どこにも酔いの気配は感じられない。

無意識に目をそむけ、ディアネイラは呟いた。

「別に。あの娘の唄が気になっただけですわ」

「どこか変か？ 俺にはなかなか巧く聞こえるが」

ディアネイラは首を振り、窓辺を離れた。男の傍らに跪き、酒壺を持ち上げて眉をひそめる。

「あら、お酒が切れていますね。——誰か」

室外に向けて声を張ると、戸口の向こうで応える声がした。

「葡萄酒をお願い。いちばん上等のよ」

「はい、ただいま」

小さな声と、足音が続く。ディアネイラは愛想よく微笑んだ。

「少々お待ちを」

男は答えず、彼女の手をとってくちづけた。ひやりとするような感覚が背中を走り、ディアネイラは身をおののかせた。じっと見上げる瞳は鋼のように底光りしている。

怖い、とディアネイラは思った。

軽薄そうに見せているけど、この人はきっと本当は怖い人だ……。深い碧色の瞳には、こんな場面ではあって当然の欲情の色がまるで窺えなかった。冷やかなまなざしで、正体を押し量るかのように眺めているだけだ。

軍人だというこの男は、きっと捕虜をもこんな目で見るに違いな。何の役にも立たないクズが、生かしておいて利用する価値があるか。

彼のまなざしは、今まさにそれを判断しているかのように冷徹そのものだった。

コツコツと扉をたく音にディアネイラはびくりと背をそらした。手を振り払うようにして立ち上がり戸口へ急ぐと、扉の外に細身の少女が酒壺の載った盆を持って立っていた。先ほどミアザを探しに来た少女だ。

半年ほど前、少女は物乞い同然の身形で妓楼の前に倒れていたのだった。拾ったのはディアネイラだ。女将は最初いい顔をしながら、どんなことでもしますからと拝み倒され、下女として使うことにした。

少女はノゼアンと名乗った。年は十七だという。ノゼアンはカティガラキャラバンの生まれではなく、幼い頃から隊商にくっついてあちこちの城市を移動しては下働きや日雇い仕事に従事して糊口をしのいで来たようだった。

女将はノゼアンに使い古しのすり切れた古着を与え、何かと仕事を言いつけては一日中こき使った。寝る場所は台所の片隅だ。

しかしノゼアンは文句を言うどころか、食べものが美味しいと言っておずおずと笑うのだった。妓楼の客に出す料理の残りだから、確かに上等なものではあるのだ。

うるさいくらい前髪を長くして、いつも俯きがちになっているのはどうしてだろうと不思議に思っていたら、少女は顔の右側にくつきりした火傷の跡があるのだった。それを知った女将は、首を振りながらいかにも残念そうに言ったものだ。

『あの娘、顔の左側だけ見ればすごい美少女だよ。そっちは肌もきれいだし。惜しいねえ。あの傷さえなければ、よく仕込んで客の相手をさせたいよ』

ノゼアンは無口でいつも人の目を気にするようにびくびくしていた。きつと、これまでひどくいじめられて来たのだろう。

ディアネイラはノゼアンにできるだけ優しく接するようにした。そのうち、ミアザがノゼアンにたいそう懐いたので、子守を頼むことにしたのだ。

ミアザの様子を小声で尋ねると、ノゼアンは頷いた。

「大丈夫です、今度はよく眠っていますから」

そう囁くと、好奇心からか珍しくノゼアンはちらつと室内に目をやった。客と視線が会いでもしたのか、少女はびくつと肩をすくめ、長い前髪の陰に顔を隠すようにしてそそくさと去って行った。

扉を閉めて振り向くと、男は眉をひそめるような表情で気むずかしげに何やら考え込んでいた。

「御酒をどうぞ、旦那さま」

ディアネイラは意識的に愛想のよい微笑みを浮かべて酒を注いだ。「いい酒を置いているな」

顔を上げた男はたいして感心した様子でもなく呟いた。酒杯を灯火にかざし、目を細める。

「杯も上等なカットグラス。店は流行っているようだな」

「ええ、お蔭さまで」

上の空でディアネイラは答えた。

いつのまにか、イオレーの歌声が聞こえなくなっていた。考えまいとすればするほど、露骨な想像が脳裏に浮かぶ。

「よほど気になるんだな」

「えっ……」

見透かしたように男はにやりとした。ディアネイラは懸命に平静を装い、酒を注いだ。つい手がふるえて杯がカチカチ鳴った。

「……イオレーが気になるだけですわ。あの娘ときたら未だに慣れ

なくて、よくヘマをしでかしますの」

男は含み笑いをした。

「それではせっかくのお楽しみもうまく行かないかもしれないな。あいつは腕はたつが堅物で不器用な男でなあ。やっぱりおまえに相手してもらった」

ディアネイラは険をふくんだ微笑を男に向けた。

「言っておきますけれど、私は厭なら拒否できますのよ……。それにしても、大枚はたいて最高位の遊女^{ヘタイラ}を贖っておきながらあっさり他人に譲ろうなんて、ずいぶん気前がよろしいんですね」

「あいつは特別さ。そう、少なくとも俺の気の済むまでは特別扱いしてやるつもりだ」

ふざけたようできて思いつめた響きの感じられる男の口調に、ディアネイラは眉をひそめた。

「そういえば先ほど、命の恩人とか何とかおっしゃってましたわね……」

「ああ、あのときはちよつとばかり混乱していてな。俺は側近と離れ、孤立してしまっただ。敵兵に襲撃され、たまたま側にいたあいつが俺の代わりに斬られた」

男は酒杯を盆に戻し、頭の後ろで手を組んで寝転がった。いちめに華やかな饗宴の場面を描いた板張りの天上を見上げ、彼は独りごちるように呟いた。

「……ジムサが斬られたとき、俺はあいつの背中を見ていた。何だか見覚えがあるような気がしたんだ。敵兵に囲まれ、命が危うかったというのに暢気なものだよ……。でも、そのときは時間が引き延ばされたように感じていたんだ。思い出せずにいたら、そのまま落馬していたかもしれん。だが、ふつと閃いて、かろうじて体勢を立て直した」

「あのひとのこと、以前からご存じでしたの？」

男は笑った。

「いや、全然。閲兵したことはあったかもしれないが、覚えてな

い。……ただ昔、似たような状況で同じように俺をかばって死んだ奴がいたのさ。乳兄弟でもあり、奴のことを俺は誰より信頼していた」

「お気の毒に」

ディアネイラの低い呟きに、男はふつと息を洩らした。

「本当に気の毒だったのさ……。そいつには許嫁がいて、まもなく結婚の予定だった。それが俺をかばったばかりにおじゃんになってしまった。悲嘆にくれた彼女は食事をとらなくなって、やがて後を追うように儚くなった。それを思い出すと今でもやりきれない。だからかな、どうしてもジムサを死なせたくなかった」

ディアネイラは黙って耳を傾けている。

「聞けばあいつにも故郷に残した許嫁があるというじゃないか。それなら何としても生きて帰郷し、待たせた女と幸せになってほしいと思ったんだ」

「お優しいんですね」

同調したつもりだったが、ディアネイラの声には無意識のうちに皮肉な響きが入り込んでいたのかもしれない。鋭い声音で彼は否定した。

「違う。ただの自己満足さ。あいつは以前死んだ奴の身代わりなんだ。目をかけてやったのも俺にとっては罪滅ぼしのようなもので、ジムサの意思なんか意に介さなかった」

男は顔を手で覆い、投げ出すような溜息を深々とついた。ぼんやりと天上を見上げる彼の顔を、ディアネイラは困惑気味に眺めた。

どうもよくわからない人だ。裕福でお気楽な放蕩貴族かと思っていたら、冷酷極まりない側面を窺わせ、それでいて心の奥底に葛藤を抱え込んでいるようでもある。

少なくとも冷徹一辺の人物ではなさそうだ。バークトリシュの上流貴族から見れば、ジムサのような人間は小さな属領から来た平民出身の一傭兵にすぎない。身をもって上官をかばったところで、普通は気にかけるもしないだろうに。

彼を慕う者は、彼を煙たがる者と同じくらい多いだろう、とディ
アネイラは思った。彼女は見ることもなしに眼を閉じた男の顔を眺め
た。

ざっくりと後ろで編んだ、亜麻色の髪。なめらかな象牙色の肌。
すらりと通った高い鼻梁。瞼の下は、確かな深みのある濃緑だっ
た。

バークトリシュの民は遠い遠い西の多島海からこの地へ至ったヘ
ラス人の末裔だ。征服の過程で現地の王族と婚姻し、血は少しずつ
入り交じった。遙かに遠い広がりをおぼせる男の顔は、祖先のたど
ってきた長い道程を如実に現すかのようにも思えるのだった。

バークトリシュには俗に 一千都市 と言われるほど多くの城市^{まち}
がある。なかでもカティガラのような大規模な交易都市には、あら
ゆる方角から人々がつかのま寄り集まり、風に吹かれるようにいず
こともなく去ってゆく。

無数に存在する娼家は、そんなふうになされてきた女たちの吹き
溜まりのような場所だった。ここからはもう、どこへも行けやしな
い。ただ、ひととき過ぎた男たちが遠く旅立つのを黙って見送る
だけ……。

寝物語に聞かされる、遠い国のおとぎ話。夢だけが、時とともに
虚しく朽ち果て、沙漠に迷った獣のように白い残骸を苛烈な陽光に
晒す。

いつか。いつか。いつか。

また会える日が来ることを、信じてはいないのに諦めることも出
来なくて。ただ、足止めされたこの地で虚しく待ち続けるばかり…
…。

ディアネイラは首を傾げ、男の顔をそっと覗き込んだ。

—— 眠ってしまったのかしら……。

そうであれば正直ありがたい。今夜はひどくけだるい気分だった。
できることなら自分をつくろうことなく膝を抱えて暗闇のなかぼん
やりと放心していたい。

衾を掛けておこうかと身を乗り出し、ディアネイラはぎくりとした。いつのまにか男が眼を開き、冷やかに自分を見ていたのだ。

次の瞬間には腕を取られ、床に背を押し付けられていた。のしかかる身体の重みに本能的な恐怖が沸く。薄く鳥肌のたったうなじに男の唇が触れた途端、ディアネイラの目の前が血をぶちまけたように真っ赤になった。

咲き誇るカラージャの花。ありったけの想いをこめて花を差し出した少年の、決意を秘めた悲壮な瞳。その姿が、舞い散る花びらにかき消され、視界から消えてゆく。

必死に伸ばした自分の手が、ふと気付けば真っ赤に染まっていた。愕然と両手を見つめたディアネイラは、足元に突っ伏した見知らぬ人間に気付いた。ぴくりとも動かないその身体の下から、赤い血溜まりがみるみるうちに広がっていった。

恐怖と焦燥にかられ、ディアネイラは声にならない悲鳴を上げた。気がつくのと、真上から男が見下ろしていた。驚いた様子もなく、石のような碧い瞳でじっと自分を見つめている。そのまなざしに感情を読み取ることは出来なかった。

ディアネイラは声を失い、大きく胸を上下させた。何が起きたのか自分でもわからない。ここで生きていくことを決めた日から、あの恐ろしい光景を夢にも見ることはなかったのに。すべて割り切れたのだと、そう思っていたのに……。

男はしばし無言でディアネイラを凝視していたが、不意に興味を失ったようにごろりと横になった。

「もう休む。後は好きにしろ」

ぶっくらぼうではあったが、その口調に怒りは感じられなかった。起き上がったディアネイラは、激しい動悸を押さえつつ、ただ茫然と傍らに座り込んでいた。背を向けた男から、やがて規則的な息づかいの音が聞こえ始めた。

本当に眠ってしまったのだろうか。迷いながら、先ほど掛けそびれた衾をかけてみたが、男はぴくりとも動かなかった。

それからもしばらくのあいだディアネイラは寢床の片隅に座り込んでいたが、本当に男が寝入ったのだと確信すると、やおら立ち上がった。

足音を忍ばせて閨を出、扉を静かに閉めると同時にディアネイラはすくみ上がった。戸口のすぐ脇に、男がひとり剣を抱えてうずくまっていたのだ。薄闇のなか、吊りランプが投げかける灯に男の目がきらりと光った。

宴席にいたもうひとりの男だ。名は確かフィディアスと言ったか。名前はバークトリシュ風だが、その鋭い容貌は北東辺の遊牧民に特徴的なものだった。おそらくファウニ族だろう。

あまたの多民族が行き交うカティガラでも、国と敵対関係にあるファウニ族を見かける機会は少ない。ディアネイラのわずかな知識も、客や出入りの商人から伝え聞いた噂話によるものだ。

だが、今後は増えてゆくだろう。王は長年の宿敵とついに和議を結び、バークトリシュの北辺は次第に安定し始めたと聞く。

剣を抱えた異貌の男は、ディアネイラの姿に気付いても一言も発しなかった。この男にも誰か女がついたはずだが、閨に置き去りにして来たのだろうか。

引き締まった彼の顔には眠気の陰もない。いつもこうして主人を守っているのだろう。まるで抜き身の刃のように剣呑でさえあった。気を取り直し、ディアネイラは懸命に高慢な表情をとりつくろって、男の傍らを通り抜けた。

館は静まり返っていた。夜も深更を過ぎ、さすがに宵っ張りの客たちも帰るか眠るかしたのだろう。ディアネイラはゆっくりと階段を下りていった。

中庭へ続く階段の下に、踏みつぶされたカラージャの花がそのまま捨ておかれていた。黙って見下ろしていたディアネイラの頬を、ふいに涙がひとすじ伝わった。

「まるで私みたい……」

吐息だけでディアネイラは呟いた。

無残に踏みにじられた花には、陽光の下で誇らかに咲いていたときの面影など微塵もない。涙はさらにあふれ、ゆくりなくも頤を伝って花の残骸の上に落ちた。ディアネイラはふるえる口許を押さえた。

——今さら名乗れるわけないじゃない。

会いたくて、会いたくて。

ただ一目、あのひとの無事な姿を確かめたくて。きっといつかは彼が通るだろうこの城市^{まち}で、ひたすらずっと待っていた。

必ず生きて帰るといふ、その約束だけをよすがに……。

だが、待ちわびた再会が奇跡のように訪れたまさにその瞬間、落雷のように思い知らされたのだ。

自分はもう、あの人にはふさわしくない——。

こんなふうに再会するくらいなら、あのと死んでしまった方がよかった。

サイラムを後にして初めて、痛烈にそうメイシャは感じたのだった。

第5章 崩壊（1）

花越しのくちづけを残してジムサが去った後、メイシャはその場に立ち尽くし、懸命に嗚咽をこらえていた。

ふいに背後から冷やかすような口笛が響く。弾かれたように振り向くと、いつからそこにいたのか、エルディク王子が腕を組んで神殿の壁に寄り掛かっていた。彼は薄笑いを浮かべながら身を起こした。

「馬鹿な男だよなあ。いや、聞き分けがいいと言っべきかな」

「あなたが追い詰めたものではありませんか……！」

悲痛な叫びを受け流し、涼しい顔でエルディクは言い捨てた。

「なに、少し頭を使えばわかったはずだ。ただ単に身を引いておまえを俺に譲ればよかったのさ。そうすればあのまま衛兵勤めが出来たんだ。俺だって何も死人の山を築きたいわけじゃない。ちよつとした身分詐称くらい、黙っていてもよかったんだ。おまえが奴と別れて俺と結婚さえすれば、四方八方丸く収まったんだよ。奴も死出の旅路につかずにすんだ。そうじゃないか？」

「近寄らないでください！ 私に触れたら巫女長に訴えます。私は正式な巫女になったのですから……！」

馴れ馴れしく手を取ろうとするエルディクから、メイシャは慌てて飛びすさった。

ますます嘲笑に口許をゆがめ、エルディクはわざとらしく肩をすくめた。それでも一応足を止め、腰をかがめて親切ごかしの猫なで声で囁きかける。

「現実的になった方がいいぞ。奴はもう帰って来やしない。きつとファウニに頭の皮を剥がれて杯にされちまうさ。それがわかってて志願したんだ。そんな無謀な奴のことなんか忘れて、ありがたい俺の申し出を受けるべきだ」

「私は、巫女になったのですよ！」

「とつとと辞めりやあいい。なつたばかりで辞めるのは体裁が悪いって言うなら、仕方ない、待っててやるよ。そうだな、三月か、せいぜい半年も勤めりや充分だろう」

「ジムサが戻ってくるまでは、何があろうと絶対に辞めません！」

メイシヤは語気鋭く撥ねつけた。その剣幕にエルデイクは驚いた顔をした。素直な優しい顔だから、おとなしく、なやかな性格で、強引に迫れば何ともなると思っていたのだろう。メイシヤは自分でも驚くほど強く言い放った。

「ジムサは必ず生きて帰って来ます。戦功をたて、かつての身分を取り戻して帰ってくるわ。そうしたら私たち、誰に妨げられることもなく一緒になるんだから……！」

「下手すりゃ白髪になっちまうかもしれんのだぞ」

「構うものですか。ジムサだって同じように年をとるのだから」

フンと小馬鹿にしたようにエルデイクは嗤った。

「今はまだ若くて美しいからそんなことが言えるのさ。月日が経ち、ある日突然悟るんだ。自分がただ虚しく年老いてしまったということに。そうなってからでは遅すぎるんだぞ」

「ジムサが帰って来ないのなら、生涯神殿に勤めて神々に祈り続けます。こんな戦争がなくなるように、誰も愛する人を失って悲しむことのないように——」

メイシヤはジムサから渡されたラピス・ラズリの指輪をぎゅっと握りしめた。

どうして戦争なんかするのだろう。国境がどうの、交易がどうのといつて、人は絶えず争いを繰り返す。

その陰でどれほどの男が傷つき、どれほどの女が泣いても、地上から戦争がなくなることはない。意に沿わぬことを力で解決しようと、誰かが考えてしまう限りは。

毅然と踵を返したメイシヤの背後で、呆氣にとられていたエルデイクが脅すように声を荒らげた。

「思い上がるのもいい加減にしろ！俺は好意でおまえを嫁にして

やろつと言ってるんだからな。いくら父親が名誉回復したって、おまえはもはや主流を外れてるんだぞ」

「ではどうぞ、富も地位も申し分のない家からお妃をお選びになつて」

振り向きもせず言い放つと、メイシャは自らを奮い立たせるように昂然と顎を上げた。

隙を見せてはだめだ。自分の身は自分で守らなければ。もう何があつてもジムサに頼るわけにはいかないのだから。

強く、ならなければ。何よりも、彼の言葉を信じて待ち続けていられるように――。

薄暗くひんやりとした神殿を奥へ進みながらメイシャは指輪を嵌めた。石を掌側に回しておけば、誰に気付かれることもなく、いつでもラピス・ラズリに触れることが出来るだろう。くじけそうになったときにはいつ何時も。

メイシャは供物の捧げられた女神の祭壇の前に跪いた。香料入りの灯火が甘美な香りを漂わせながら静かに揺れている。時間が半端なせいか、祭殿には誰もいなかった。

ジムサから受け取ったカラージャの花をくちびるに押し当て、祭壇にそつと置いてメイシャは心を込めて祈った。

典雅な顔だちの女神像が優しくメイシャを見下ろしていた。世をしろしめすあまたの神々のなかでも、大きな湖を擁するサイラムでは特に水の女神の信仰が盛んだ。サイラム湖は女神の娘たちの住処だと信じられている。

メイシャは一心に祈りを捧げた。

どうかジムサの旅路をお守りください。飢えや乾きに苛まれることがないように、どうぞその身をお守りください――。

灯火のゆらめきを映して、女神はかすかに微笑んだように思えた。

メイシャは一日の大半を祈りと奉納舞や奏楽に費やした。休み時間にも他の巫女たちとお喋りに興じることもなく、暇さえあれば祭壇の前で祈りを捧げていた。

国が安定し栄えるにつれ、信仰心からではなく王侯貴族に見初められることを期待して巫女になる娘が増えた。ほとんどの娘が見習いで辞めてしまったため、正式な巫女の数はこのところ減る一方だ。メイシャは久しぶりに誕生した巫女で、正式な巫女のなかでは最年少であった。

巫女長はメイシャの事情を知ってはいたものの、神殿行事に注ぐ熱意を見て彼女に将来の期待を寄せているようだった。何かとよくしてもらって申し訳ないが、メイシャには神殿で一生を終えるつもりはなかった。

ジムサと出会う前、誰からも顧みられず孤独だった頃にはそうしてもいいかもしれないと思ったこともある。だが、今は違った。帰還したジムサと手を取り合って晴々と神殿を出て行くことが、彼女の唯一無二の願いとなっていた。

正式な巫女に志願したのは、神殿がどこよりも安全な避難所だったからだ。自分の意志も最大限尊重され、譬え王であろうとも手出しされることはない。

庇護を得るかわりに行動の自由は大幅に制限されるが、エルディクのような男から身を守るには神殿にこもる以外に方法はなかった。それに、派兵期間はどんなに長くても五年で終わると聞いた。エルディクはあんなことを言っただけで、五年経てばジムサがきつと迎えにきてくれるとメイシャは信じた。

そう信じることだけが、今のメイシャを支えていた。

あれほど拒絶したにも関わらず、エルディクは隙を見てはメイシャに言い寄ってきた。

神殿行事には王家のための祈祷や儀式がたくさんある。エルディクは以前はろくに姿を見せることもなかったのに、メイシャが正巫女になってからは必ず現れるようになった。エルディクはいつも儀式などそっこのけで、獲物を狙う蛇のような目付きで執拗にメイシヤの姿を追うのだった。

エルディクにすれば、メイシヤは自分の意のままにならない唯一の女だったのだ。左遷したカルジャツハに対する強硬な態度を一夜の夢で一変させた王に示唆され、エルディクは初めて興味を持って彼女の姿をかいま見た。

いかにも深窓の令嬢といった雰囲気で、たおやかでおとなしく内気そうに思えた。触れなば落ちん風情の儂げな美貌に嗜虐心をそそられもした。自ら手折り、もてあそんでみたいと思ったのだ。

それがどうだ。強引に迫ればすぐに落ちるとばかり思っていたのに、痛烈にこの手をはじき返してきたのだ。それは痛みよりも驚き、さらには憤怒と憎悪までも、エルディクの心に引き起こした。

王の甥として何もかも思い通りにことを進めてきたエルディクの自尊心は、いつしか病的なまでに肥大していた。メイシヤはそのふくれあがった自尊心をあらうことが踏みつけにしたのだ。

鼻持ちならないあの女を何としてでも手に入れなければ、この憤激は収まらない。泣いて詫びを入れさせる、滅茶苦茶にして、思い知らせてやるのだ。

彼女が拒絶すればするほど、エルディクの執着は強くなった。その妄執は、愛でなく憎しみから生じたゆえに、思いやりのかけらもないものだった。

巫女であるメイシヤの立場にも、彼は一片の敬意すら払わなかった。人目も憚らず、まるで言い交わした仲であるかのように馴れ馴れしく話しかけた。

そうやってじわじわと追い込んでいくつもりだったのだろう。何も知らない同僚からふしだらだの不品行だのと陰口をたたかれるようになり、メイシヤは憤激のあまり目の前が暗くなることがよくあ

った。

残念ながら、巫女に話しかけてはならないという規則は存在しない。それとなく自粛を願う他はなく、行為自体を禁じることとはできなかった。

巫女は人々の相談に乗ったり、求めに応じて御祓いや占いもする。エルディクはもっともらしい理由をつけては、メイシャに祈禱を願い出た。誰かに代わってもらいたくても、そういうときは何故か必ず他の巫女は全員ふさがっているのだった。

祈禱をし、奉納の舞を舞うメイシャの姿を、いつもエルディクは不埒な目付きで眺めていた。メイシャは必死に嫌悪感を押し隠し、平静な表情を顔に張り付けてひたすら彼の存在を無視することにした。

第5章 崩壊（2）

ジムサが旅立って一年近く経った頃だろうか。にわかに王城が慌ただしくなった。

王に待望の実子が誕生したのである。

国王夫妻は仲はよいものの、なかなか子宝に恵まれなかった。それが王の悩みのたねで、何年も前に追放した臣下の夢を見たのも、何とか原因を探り当てたいという王の願望がなせるわざだったのかもしれない。

だが、カルジャツハの墓を建ててまもなく王妃は懐妊し、あれほど切望した王子が生まれた。やはりあれは正夢だったと王は躍り上がり、自らカルジャツハの墓に詣でた。

直系の王子がいけないことは、サイラムの民にとっても気がかりではあった。懐妊がわかったただけでお祭騒ぎで、王子が生まれるとサイラムの城市は祝福一色となった。

だが、喜ぶ者があれば面白くない者もいる。当然ながら今まで実質的に王位継承者と見なされてきたエルディク王子は、後者の代表格だった。

王妃の無事出産を感謝する儀式が盛大に執り行われ、奉納の舞を終えたメイシャが奥へ下がろうと柱廊を歩いていると、突然エルディクが柱の陰から飛び出してきた。

反射的に悲鳴を上げかけたメイシャを押し止め、慌ててエルディクは人差し指を自分のくちびるに当てた。

「しーっ、叫ぶなよ。ちょっと話がしたいだけなんだ」

「……ここには一般人が入ってはなりません！」

やむなくメイシャは声押し殺した。

「なに、すぐ済むさ。……いいか、よく聞けよ。これが最後の機会だ。今すぐ還俗して俺の妻になれ」

一瞬啞然としたメイシャは、歯を食いしばり、キリキリと眉を吊

り上げた。エルデイクの態度があんまりなので、腹を据えかねたメイシヤは彼に対してならどんなにきつい態度でもとれるようになっていた。

「お断りします！ 何度言ったらわかるんですか！？」

「おまえのためなんだぞ！」

勝手な言いぐさに怒鳴りつけてやりたいのをこらえ、メイシヤは息を切らせた。

「……それどころではないのでは？ お世継ぎが誕生したのですよ。あなたはもう単なる一王族にすぎない。女を追いかけて回っている暇があつたら、ご自分の立場を固める算段でもなさつたらいいが」

思わぬ反撃に急所を突かれ、エルデイクのこめかみに醜い青筋が走った。周知の事実ではあるが、彼は王位継承者として正式に指名されているわけではない。そう見なされてきたところで、何の保証もないのだ。

どれほど甥に懇願されようと、王はのりくらりと言を左右するばかりだった。自らの子に後を継がせることを、王は決して諦めたわけではなかったのだ。そして、神々は王の願いを聞き入れられた。

あるいは、恨みを晴らした亡きカルジャツハの霊が。

妃が懐妊して以来すっかり気をよくした王は、メイシヤを無理に王族に加えるよりも彼女の意志を尊重すべきかもしれないと考え始め、甥に強引な求婚は慎むよう示唆していた。

しかしその頃には、エルデイクはすっかりメイシヤに執着してしまっていた。愛を得るのではなく、彼女を足元に跪かせ額付かせることで、不当に傷つけられた己の自尊心を元通り修復したいがために。

エルデイクは握りしめた拳をふるわせ、低く声を軋ませた。それは脅迫するようできて懇願するような、妙に混乱した口調だった。

「わかつてるのか、これで最後だぞ。後で後悔しても遅いんだからな」

「あなたと結婚するくらいなら、死んだ方がましですわ」

きつぱりと言い捨て、メイシャは足早に柱廊を歩き始めた。背後からエルデイクの眩きが呪詛のように響いた。

「その言葉、よく覚えておくんだな。いずれ思い知ることになる。

……そう、近いうちにな……」

ぞつとするような不吉な響きに、メイシャは思わず振り向いた。エルデイクは幽鬼のように笑っていた。くちびるを醜くねじまげ、見開いた瞳を狂ったようにギラギラさせて。

その眼は、底知れぬ悪意と憎悪で煮えたぎるようだった。

第5章 崩壊（3）

それから三月と経たず、エルディクの不吉な捨て台詞は現実のものとなった。

サイラムは突如としてセレス軍の侵攻を受けたのだ。

国王夫妻の間に生まれた男児はターイルと名付けられ、順調に生育していた。王は遅くに授かった愛児に、できうる限り早く定まった地位を与えようとした。大臣たちに諮り、世継ぎとして正式に冊立されることが決定した矢先、主要街道を外れて秘密裏に侵攻してきたセレス軍が王城になだれ込んだのである。

夜明け前、ほとんどの者が眠っている時間だったとはいえ、あつけない陥落にはむろん手引きした者がいた。王位継承者の筆頭候補から一夜にして転落した王の甥、エルディク王子である。

彼はひそかにセレス軍の西域司令官と通じ、城市を守る外壁と王城の門を次々に開け放った。歩哨はすべてエルディクに与する者たちによって始末されており、急を告げる者はいなかった。

セレス軍は労せずして王城の奥にまで達し、王は何が起こったのか理解する暇もなく、首を取られたのだった。

以前からセレスは、交易路の要所にあり良馬の産地でもあるサイラムを支配圏に組み入れたがっていた。エルディクはバークトリシユからセレスへと宗主国を鞍替えすることで、自ら王位に就こうと企んだのである。

彼にとってはどちらでも構わなかったのだ。自分が王位に就けるのなら、バークトリシユだろうとセレスだろうと。あるいは両者を秤にかけ、セレスに朝貢した方が見返りがいいと踏んだのかもしれない。

メイシャはいつものように神殿で祈っていた。

巫女たちの一日は夜明け前に始まる。神殿を掃き清め、薄暗い灯火の下で供物の準備をしている時、異変は起こった。

関の声を上げ、セレス軍の一隊が神殿になだれ込んできた。何が起こったのか、誰にもすぐには理解できなかった。

燃える松明を手に神殿に押し入った数十人の兵は、寝ぼけまなこの衛兵を血祭りに上げると、逃げまどう神官たちを次々に虐殺していった。

神殿の床は流れだした血でみるみる真っ赤に染まった。

セレス兵は奇声を発しながら神々の彫像をなぎ倒し、祭壇に祀られていた翡翠の香入れや黄金の小像、貴石を嵌め込んだ玻璃の大杯などを手当たり次第に略奪し始めた。

セレスにとって、サイラムで崇拜されている神々など蛮族の迷信にすぎない。彼らは恐れることなくすべてを打ち壊した。異境の神々への畏敬の念など微塵もなく、破壊することに何のためらいもなかった。

神殿の奥にいた巫女たちもまた、略奪の対象となった。街道を外れて不毛な沙漠を何日も行軍してきた兵たちにとって、怯える美しい巫女たちは羽をふるわせる小鳥のように弱々しくも欲情をかきたてるものに見えたことだろう。しかも蛮族の女、どう扱おうと咎められることはない。

神殿は阿鼻叫喚の巷と化した。悲鳴を上げて逃げまどう巫女たちを、セレス兵たちは嗤いながら追いかけ、引きずり倒してはのしかかった。

メイシャもまた、逃げようとしたところを髪を掴まれて引き倒され、荒々しく押さえ込まれた。それから後の出来事は、悪夢としか思えない。

したたかに平手をくらい、なかば気絶しているあいだに凌辱された。下卑た笑い声と、わけのわからない言葉が頭の上を行き交っていた。ようやく解放されたかと思うと、すぐに別な男が押し入って

来る。男は性急に腰を打ちつけながら盛んにわめきたてていたが、何を言っているのかメイシャにはひとつも理解できなかった。

セレスの言葉を知らなくてよかったと、苦痛のなかでぼんやりとメイシャは思った。きつと耳が腐るようなおぞましいことを叫んでいるのだろう。

身体がバラバラに引き裂かれるかのような激痛にメイシャは何度も気を失った。そして同じ痛みで意識を取り戻しては、いつ果てるともない責め苦に耐えなければならなかった。

劣情を満たすと、兵士たちはさらに神殿のなかを物色し始めた。巫女たちが儀式で身に着ける美しい衣装や装飾品を櫃から掴み出し、では大声で品定めをし、自らの懷や袖に投げ込んでゆく。

倒れ伏して動かない巫女の身体から黄金の腕輪や足首の鈴飾りをむしり取っている者もいる。氣絶したのか、それとも死んでしまったのか、身じろぎひとつする者もない。

力なく仰臥したまま、メイシャは顔にかかる乱れた髪の毛のあいだから強欲な兵士たちの略奪行為を眺めていた。

右手の指先に、何かが触れた。目を動かして見ると、それは途中で折れて投げ捨てられた剣だった。

メイシャがはつきりした考えもなくその柄を握った途端、左手が誰かにぐいと掴まれる。強欲に舌なめずりしながらセレス兵はメイシャの指輪を引き抜こうとした。

ジムサからもらった指輪——！！

考える前に右手が動いていた。折れた剣は何たる偶然か、セレス兵の首を薙ぎ払っていた。一言も発しないまま、男はメイシャの身体の上に倒れかかった。泡を噴くようなゴボゴボと濁った音が耳元で響いた。

メイシャは目を見開いたまま硬直していた。あふれる血が下敷きになったメイシャの身体を生ぬるくぬらしてゆく。絶命した男の身体は、岩のように重かった。

こんなにも簡単に人は死んでしまうのだ。そう思うと、むしろあ

つけにとられたような気分だった。

メイシャは男の身体の下から少しずつ這い出した。さいわい、混乱が続く室内では男が死んだことに気付いた者は誰もいない。

明かり取りの窓から弱く外光は射し込んでいたが、室内は松明の煙や蹴散らされた灰でけづっていた。何より彼らは神殿を完全に征圧したと確信し、安心して己の欲望を満たすことに夢中になっていたのだ。

そろそろと床を這い、メイシャは祭壇の陰に潜り込んだ。祭壇の上にあった供物は薙ぎ払われ、彫像はすべて打ち砕かれている。めばしいものはもうないと思ったのだろう。兵士たちは部屋の反対側で、並べられた櫃のなかをかき回すのに余念がない。

祭壇の陰には非常用の隠し通路がある。知っているのは神官と正巫女だけだ。もう少し早く襲撃に気付いていれば、ここから城外に非難できただろうに。

メイシャは祭壇の後ろからそつと顔を覗かせ、室内の様子を窺った。巫女たちは全員倒れ伏したまま動かない。気絶しているのか、ショックのあまり心神喪失状態になっているのかもしれない。明らかに絶命している者もいた。

自分がこうして行動できていることが不思議だった。何も考えていないのに、誰かに導かれているかのように身体が動く。メイシャはただ、無意識に指輪のラピス・ラズリを握りしめていた。

自分だけ逃げるなんて気が咎めたが、兵士たちに気付かれずに助け出せそうな仲間は一とりも見当たらなかった。しばらく逡巡していたメイシャは、兵士の一群が戻ってきそうになったのに気付いて慌てて祭壇のなかへ入り込んだ。

ふいに訪れた暗闇のなかで、メイシャはしばらくの間がつくりとうずくまっていた。

身体中が悲鳴を上げていた。わけでも容赦なく突き入れられた脚のあいだは絶え間なくずきずきと痛み、流れ出る血とおぞましい体液の名残で不快極まりない。

だが、いつまでもこうしてはいられない。もし隠し通路に気付かれたら、すぐさま捕まって殺されてしまうだろう。メイシャは力を振り絞って立ち上がり、壁を伝いながらゆっくりと歩き始めた。

真つ暗闇を足を引きずるようにして一歩一歩進みながら、時折メイシャは指輪のラピス・ラズリを握りしめた。

「……ジムサ……」

消え入りそうな吐息で呟くと、涙とともに勇気もわいた。血が出るほどくちびるを噛みしめ、足を引きずりながらメイシャは暗闇を歩き続けた。

やがて、伸ばした手が壁に突き当たった。いや、壁ではない。板で出来た……扉だ！

夢中になって押し開けると、格子縞を描くオレンジ色の光が目飛び込んできた。メイシャはとっさに手を上げて目を庇った。

その光は暗闇に慣れた目には突き刺さるように感じられたが、実際はそれほど強いものではなかった。

どうやらここは小さな祠のなからしい。扉の隙間から窺うと、周囲には荒涼とした風景が広がっている。おそろおそろ外へ出てみてようやく気付いた。そこは打ち捨てられた祭祀場の跡だった。

涸れてしまった小さな泉と楊柳の太木。もう何年も人が詣でた形跡はない。街道から大きく外れているため、泉が涸れてからは参拝が途絶えてしまったのだろう。

奇妙にどろりと赤い太陽が地平線の上に浮かんでいた。昇るところさえ見なかった太陽が、すでに沈み始めている。

反対側に眼をやると、城市の城壁から上がった煙が薄くたなびいているのが見えた。

——燃えている。サイラムが……。

無残な光景を、メイシャは放心した顔でしばし眺めていた。その

あいだにも少しずつ太陽は沈み、荒れ地に宵闇が降り始める。消えゆく太陽を追うように、メイシャはふらりと歩きだした。

——西。西へ、行かないや。ジムサがいる西へ……。

ジムサ——。

繰り返し繰り返し、その名を呟きながらメイシャは歩いた。指輪のラピス・ラズリを握りしめ、太陽がすっかり沈んでしまっても、メイシャは憑かれたように荒れ地を歩き続けた。頬にこびりついていた返り血が乾き、冷たい夜風に散っていった。

第5章 崩壊（4）

ぱちぱちと弾ける乾いた音に、メイシャはふつと眼を覚ました。すぐ側に大きな焚き火がある。いつ眠ったのか、全然覚えがない。立ち止まった記憶さえ。身体の上には駱駝の毛で織った暖かな毛布がかけられていた。

「気がついたかい？」

聞き覚えのない声がした。反射的に身を起こそうとして、メイシヤは身体中を走る激痛に呻いた。

「休んでいなさい。無理に起きない方がいい」

なだめる声の方へ目を向けると、顎ひげを生やした男が焚き火に向かつて座っていた。一瞬きくりとしたが、それは敵意のない穏やかな顔だった。同じオアシス地方の民だ。

見れば焚き火の周りには同じような格好の男たちが、思い思いの格好で休んでいた。周囲には駱駝やロバの影も見える。

交易路をゆく隊商だ。キャラバンメイシヤはようやくほっとして身体の力を抜いた。

「酷い目にあつたようだね」

メイシヤに話しかけたのは、どうやら隊商長のようだ。思慮深く冷静な顔だちで、目には厳しさと思いやりが入り交じっている。

「あんたはサイラムの人だね？」

メイシヤは頷き、かすれ声で尋ねた。

「……サイラムは……どうなつたんですか……？」

「セレス軍に占領されているよ」

隊商長は苦々しげな顔で手近にあつた粗朶を折り、焚き火に放り込んだ。

「おかげで我々も野宿するはめになった。今夜はサイラムの隊商宿キャラバン・サライで休む予定だったが、手前で異変に気付いて街道を迂回したんだ。そうしたら荒地ダシユトにあんたが倒れていた。全身血まみれだったから、

てつきり死んでいるのかと思ったよ」

衣服や身体に飛び散った血のほとんどは、自分のものではない。この手で殺した名も知らぬセス兵の血だ。だが、隊商長も誰も、深く問い質しはしなかった。

左手を握りしめると固い石の感触が返ってきた。メイシヤは安堵の吐息を洩らし、沸き上がってくる嗚咽を何とかこらえようと、握った拳をくちびるに押し当てた。

自分ひとりが逃げ延びた後ろめたさよりも、今はただこうして生きていられることが嬉しかった。

キャラバン

隊商の最終目的地が首都バクトラだと聞き、一緒に連れていってほしいとメイシヤは懸命に頼み込んだ。だが、商売をするでもなく金もないメイシヤは、はつきり言ってお荷物以下だ。

隊商の移動は多くの危険も伴う。甘いことは言っていられない。カティガラまでは同行させてくれたが、彼らはメイシヤを残したまま旅立って行った。

サイラムの貴族で巫女だったとしても、カティガラで同じ待遇は望むべくもない。着の身着のままカティガラへやってきたメイシヤは生きるために働かなければならなかった。

隊商長もメイシヤのことを気の毒には思ったらしく、馴染みの妓楼に紹介してくれた。引き受けてくれた女主人は、名をギルジラと言った。

店には誰が植えたのか、なつかしいカラージャの花が咲き乱れていた。その花は、ささくれだったメイシヤの心を、ほんの少しだけ和ませてくれた。

メイシヤはここで下働きをしながらジムサの帰りを待つと決めた。帰路、ジムサは必ずカティガラを通る。だからここで待ってしよう。西へ行く商人に頼んで、ジムサに自分の居所を知らせてもらうこと

だつて出来るはずだ。きつと何かしら方法はあるに違いない。

だが、わずかな希望が芽生え始めた矢先、メイシャは酷く体調を崩し、予想だになかったことを女将のギルジラから告げられた。

メイシャは身ごもっていたのだ。

絶望で目の前が真っ暗になった。いわれのない暴虐を受けたうえ、そんな忌まわしい置き土産まで残されるなんて……。

いったい自分が何をしたというのだ。それともこれは罰なのだろうか。仲間を捨て、国を捨てて逃げたことに対して神々が下した、残酷な罰——。

月満ちてメイシャは女の子を産んだ。気がつけばメイシャには、父親の誰だかわからぬ娘と莫大な借金ができていた。

それまで知らされずにいたが、メイシャを引き取るにあたつて女将は隊商長にけっこうな額の礼金を支払ったという。自分はいつのまにか商品となつて売られていたのだ。

加えて働けない間の食費や出産費用など次々に上乗せされ、下働きの稼ぎでは到底返せない額にまで借金は膨らんでいた。

そもその最初から、女将はメイシャがサイラムの良家の出らしいと隊商長から聞き、いずれ妓楼の女にするつもりで買い受けたのだ。

「あんたほどの美貌なら、すぐに御贖身さんがつく。売れっ子になればいい暮らしができるんだよ。あんたは元々教養があるみたいだから、頑張つて勉強すればきつと遊女ヘタイラにだつてなれる。そうすれば身分の高いお客さんの同伴者つれとして劇場や遊技場、政治集会にだつてお伴出来るんだよ」

口をきわめてそのかすギルジラの言葉を真に受けたわけでは決していない。選択の余地などなかったのだ。

また、心のどこかで投げやりになつていたのも否めない。阿鼻叫

喚の神殿から脱出して荒れ地をさまよって、そうしてメイシャは死んだのだ。ジムサが愛してくれたメイシャは、もういない。交わした約束が果たされる日は、永遠に来やしないのだ――。

メイシャは名前を捨て、バークトリシユ人に好まれるようディアンイラというヘラス風の名をもらった。だが、娘には故郷でよく使われるミアザという名を付けた。

『水の娘』という意味で、サイラム湖に棲むという美しい妖精たちのことだ。彼女らは女神の娘たちとも言われていた。

不思議なことに、自分でそう名付けた途端、それまで見るのもしやだった娘に愛情を感じ始めた。この子は、自らが奪った命の代わりに生まれてきたのだ。自分が殺したセレス兵だけでなく、きっと神殿で殺された巫女たちの命もまた引き換えにして。

この娘を立派に育てることが、自分にできる唯一の償い。どんな汚辱にまみれようと、この娘だけはいつかこんな掃き溜めから解き放つのだ。そう、なるべく早く。

そう心に決めたメイシャ――ディアンイラは、短期間のうちにその美貌と技芸で名を知られるようになり、いつしか貴族や大商人を顧客とする遊女^{ヘタイラ}となったのだった。

第5章 崩壊（5）

ディアネイラは跪き、踏みつけられたカラージャの花を手にとった。

あの時と同じようにジムサはこの花を差し出してくれたのに、自分には受け取ることができなかった。精一杯の虚勢で払いのけ、この花を踏みにじったとき、まるで自分の心臓を自分で踏みつけたような気がした。

ディアネイラはつぶれた花にくちづけ、眉を寄せた。

あれから六年。一日たりともジムサのことを忘れたことはない。

どれほど思い切ろうと決意しても、街に出るたび無意識のうちにその面影を人ごみに探していた。

今さら会えるはずもないのに……。

自分が約束を果たせなかったように、ジムサだって誓いも虚しく戦場に命を散らしてしまったかもしれない。譬え生きて帰って来たところで、カティガラのような大きな城市まちで何のあてもなく出会えるわけもない。

サイラムへ戻り、ジムサは自分がいないことを知る。いつそ死んでしまったのだと思われた方がいい。そうすれば、無垢な自分のことだけを覚えていてもらえる。

それなのに……。

神々よ。これもまた罰なのですか？ 神殿を守るべき義務を放棄して、卑怯にも逃げ出した自分への――。

あんなふうに、ジムサと出会うなんて。ジムサが私に気付くなんて。こんなにも変わってしまった私に、彼が気付くなんて……。

あの声を聞かなければよかった。私を呼ぶジムサの声。懐かしい、戸惑ったような優しい彼の声。

振り向かなければよかった。ずっと会いたかったのに、目と目が会った瞬間に感じたのは喜びではなく、消えてなくなりたいくらい

の恥ずかしさで……。

どれほど着飾ろうと、こんな姿を見られなくなかった。自分が娼婦だということは、彼にもすぐにわかったはず。せめて気付いたのが自分だけならよかった。そうしたら、綺麗な嘘がつけたかもしれないのに。

こんな不意打ちは、あんまりだ……。

彼女は重い足取りで自分の部屋に戻った。稼ぎ頭の遊女であるデ
ィアネイラは、私室としてかなり上等な部屋を与えられている。二
間続きの部屋の一方では、ミアザがすやすやと眠っていた。娘の額
に軽くくちづけ、ディアネイラは居間のランプを少し明るくした。
つぶれたカラー ज्याの花の側にラピス・ラズリの指輪をそつと置
く。

呼ばれた宴席でジムサに気付いたとき、とつさに指から抜き取っ
て衣装の間に隠しておいたのだ。

ジムサの視線を意識しながら、ディアネイラは指輪を見られなか
ったことに安堵していた。あれを見られたら、どこまで言い逃れら
れたか自信がない。

椅子に座り、花と指輪を眺めていると、どうしようもなく涙が出
てきた。こらえきれず、声を殺して泣いていると、続き部屋との境
目で物音がした。

ミアザがいつのまにか起きてきて、心配げにじつと母親を見てい
る。ディアネイラは急いで涙をぬぐい、ことさら陽気に笑って見せ
た。

「あ、あら、ごめんね。起こしちゃった？」

おいで、と手を広げ、駆け寄ってきたミアザを膝に抱き上げる。

ミアザはつぶれた花を眺め、戸惑ったようにディアネイラを見上げ
た。

「……おかあさん」

「ん、なあに？」

「お花はまだたくさんあるから、泣かないで。ミアザ、とつてきて

あげる」

膝から滑り降りようとする娘を、ディアネイラは慌てて抱き留めた。

「ありがとう。でも、あとでいいわ。この花はね、お母さんがucciかり踏んでしまったのよ。お花さんに悪いことしたなあと思って、持ってきたの」

頷いたミアザは指輪に気付き、眼を輝かせて手にとった。小さな指に指輪を嵌めたり外したりする娘の様子を覗き込み、ディアネイラは頬を寄せて微笑んだ。

「綺麗でしょう？ 大事な人からもらったのよ。ミアザが大きくなったらあげるわね」

「だいじなひとつて、おとうさん？」

思わぬ問いに目を瞠り、ディアネイラは無心に遊んでいる娘をぎゅつと抱きしめた。

「……そうよ。お父さんがくれたの。お母さんのことをずっと愛してるって言うてね、お別れの形見にこの指輪をくれたのよ……」

「おとうさんは、ミアザのこともあいしてるかな？」

「ええ、もちろんよ」

「いつか、おとうさんにあえる？」

「……わからないわ。ミアザはお父さんに会いたい？」

「うん、あいたい」

「お母さんも、会いたいわ……」

……夢だ。それは荒れ地に浮かぶ蜃気楼よりも虚しい夢。

ジムサがミアザの父親になってくれたらいいのに。そして三人で暮らすの。どこか知らない場所で、誰も私たちを知らない場所で。幸せに、三人は暮らすの——。

ディアネイラは嗚咽をこらえた。

馬鹿な空想はおやめ。悲しくなるだけなのだから。

カラージャの花が何度咲いても、私に花を差し出してくれる人はいない。どれほど願おうと、時はもう二度と戻らない。

記憶だけが痛いほどに鮮やかで。繰り返し繰り返し、胸を突く――。

そのたびにカラージャの花はいつそう赤くなるのかもしれない。
結ばれなかった恋人たちの血溜まりから咲いた花。たえまなく移
ろつ地上で永遠を誓っても、かなうはずもないのだと。

まるでそう囁くように、花は薄明になお血の色を深めるのだった。

第6章 秘密と嘘（1）

目覚めたとき、ジムサは自分がどこにいるのかわからなかった。窓の隙間から射し込む光の縞が彫刻の施された黒い柱や梁から垂れる薄絹を浮き立たせている。甘く秘めやかな香の名残が、やるせなく辺りをただよっていた。ジムサは顔を覆い、小さく呻いた。

—— そうだ。昨夜はあの気まぐれ殿下に無理やり付き合わされた妓楼に泊まったんだった……。

ジムサは無然と溜息をつきながら立ち上がり、窓を開けた。なだれ込むまばゆい陽光に眼を眇める。太陽はすでにかなり高くまで昇っていた。抜けるような青空を見上げ、ジムサは明け方の夢を思い出した。メイシャを連れてサイラム湖へ行く夢だ。

天空を映す湖面の青。のびやかにどこまでも広がる草原の緑。赤いカラー ज्याの花を手に微笑むメイシャの瞳が、湖の色を吸収したように青みを増して……。

うつとりと見つめるうち、彼女の少女らしいおつとりと無邪気な顔が、冷やかで凄艶な女の顔に変わっていった。気がつけばそれはディアネイラになっていた。彼女は愁わしげに眉を寄せ、ジムサから顔をそむけるとカラー ज्याの花を湖に向かって投げた。花は空中でばらばらになり、赤い血潮のような花びらが無数に風に舞った。

湖を見つめたまま凝然と立ち尽くすディアネイラの姿が、舞い散る花びらのなかに見失われてゆく。ジムサは声を嚔らして叫んだ。

メイシャ、と——。

ジムサは中空を睨みながら関節が白くなるほど窓枠を掴んだ。脳裏にこびりついた夢の残像は、どんなに振り払っても亡霊のように頭をもたげてくるのだった。

ジムサは力なく窓辺に背を預けた。朝の涼しさを残した微風が、窓覆いの薄絹を音もなくそよがせた。

—— ともかく、早く隊商宿に帰ろう。
キャラバン・サライ

こんなところで足止めを食っている暇などない。すぐにでも北回りキャラバンで東へ行く隊商を見つけないければ。そしてサイラムへ帰るのだ。こうしている間にも、メイシャは首を長くして俺の帰りを待ちわびていることだろう。一刻も早く彼女を薄暗い神殿から連れ出したい。ジムサは素早く身支度を整えた。ディオドトスに見つかれば、また何やかやと理由をつけて引き止められてしまうに違いない。何かと目をかけてもらったことには感謝しているが、今はお遊びに付き合ってなどいられない。

足音を忍ばせて階下へ降りると、無人の待合が虚ろな気配を漂わせていた。奥の方から人声や物音が聞こえてくる。朝の支度でもしているのだろう。見咎められることもなく外へ出てホッと息をついたとたん背後から素っ頓狂な声がして、ジムサは飛び上がった。

「旦那！ 旦那じゃないですか」

振り向くと、そこにはブカブカした白い服を着た浅黒い顔の男が立っていた。

「タシユカガ……。こんなところで何してるんだ？」

「そりゃあこっちの台詞ですよ。ずるいじゃないですか、旦那。あたしが誘ったときには厭だと言ったくせに、ちゃっかり来てるんだから」

「……あ？」

「何もあたしひとり除け者にしなくたっていいじゃあないですかア。こんな冷たいお人だとは思わなかった。悲しいねエ、泣けて来ますよ」

「ち、違う！ 俺だって来たくて来たわけじゃない。無理やり連れて来られたんだっ。ほら、昨夜会っただろ、俺の元上官……」

「ああ、あの途轍もないうわばみの」

ジムサがガクガク頷くと、タシユカガは自分の頭をさすりながら不景気な溜息をついた。

「酒ディオニコソスの神様と飲み比べなんぞしたあたしが馬鹿でしたよ。二日酔いで、もう頭が割れるようです……」

「じゃあ休んでればいいのに。何でまた朝っぱらからこんなところ」
タシユカガは切なげに叫んだ。

「旦那を探しに来たんですよ！ いや、昨夜はどうやって帰ったのかもよく覚えていませんでねエ。旦那はご無事かと部屋へ見に行ったら、いらっしやらない。宿の小僧に聞いてみると、昨夜から帰ってないと言っじゃありませんか。昨夜は旦那、妙に暗い顔をなさってたんで、気になりましたね。ちよいと探しに出たんですよ」

「そ、それは心配かけてすまなかった」

「何、酔い醒ましに水浴びでもしようかと思ひまして、そのついでです。しかし、まさか妓楼の真ん前で出つくわすとは思わなかったなあ。しかもここ、例の赤い花の館 じゃないですか。さぞかしい思いをなさったんでしょうなあ」

ジムサは慌てて両手を振った。

「してない、してないっ。俺は無理やり付き合わされただけなんだからっ」

「そんな、今さら言い訳しなくたっていいですよ」

「言い訳じゃなくて……」

「—— 何だか楽しそうだなあ」

がしつと肩を掴まれ、ジムサは硬直した。どこから現れたのか、ディオドトスがニヤニヤしながらジムサの顔を覗き込んだ。

「おはようさん。昨夜はゆっくり眠れたかな？」

「お、おはようございます……」

「これは旦那。昨夜はすっかりお世話になりました」

タシユカガが揉み手をしながらペコペコする。ディオドトスは鷹揚に頷いた。

「おう。タシユカガとか言ったな。何だ、顔色がよくないぞ」

「いや、旦那にはかありませんわア」

ディオドトスはからからと笑った。

「酔いつぶれたことのないのが自慢でなあ。なんせ俺の守護神は葡萄酒の神様だから」

「本当にねえ、たいした飲みっぷりで。いやいや感心いたしましたですよ。あつ、そうそう。ちょうどよかった、こちらの旦那にお渡ししたいものがあつたんです」

タシユカガはごそごそと懷を探り、小さな包みを取り出した。

「昨夜おつしやつてたでしょう。どんな氣位の高い美姫もなびくような素敵な薬はないかと……。思い出して荷物を探つたら、あつたんですよ。最後の一個！」

タシユカガは締まりのない笑みを浮かべ、思わせぶりに声を低めた。

「これは パンカステの美酒 と言いましてね。その昔、シンドの王様が西の大王に贈った媚薬を復元したもののなんです。この粉をほんのちよつと葡萄酒に混ぜて飲ませれば、どんなお固い女も喜んでお膝に乗って来まさあ。こいつをひとつ旦那に差し上げましょう」

受け取ったディオドトスは眉をしかめ、斜に包みを眺めた。

「パンカステの美酒 ね。聞いたことはあるが、えらく高価なものだそうじゃないか。もらつていいのか？」

「なに、お近づきのほんのしるしですよ。お気に召しましたら、どうぞ追加のご注文を。あたしはまだしばらくカティガラにありますのでね。いつでもご用命をお待ちしております」

「それじゃ今夜にでも試してみるか。ありがとよ」

「はいイ、ぜひどうぞ」

ジムサは背を向けた男からこつそり遠ざかるうとしたが、逃げる暇もなく肩を掴まれた。

「どこ行くんだ」

「俺もタシユカガと一緒に宿に帰りますっ」

「おまえはこつち」

「旦那、居続けですか。まあ、うらやましいねえ。あつ、あたしも今夜は絶対行きますから。ご相伴にあずかせてくださいよオ。そちのえらい旦那も、ねっ」

ディオドトスは答えず、背を向けたまま受け取った薬の包みをヒ

ラヒラさせた。じたばた暴れながら、ジムサはふたたび妓楼に引きずり込まれた。

「わかりましたっ、逃げませんから離してくださいっ」

辟易して叫ぶと、王太子はようやく掴んだ腕を解放してくれた。

「まったくもう、馬鹿力なんだから……」

「何か言ったか？」

「いーえ別に。——こんな朝からどこへ行かれたんです。フィディアスは？」

「さあな。そこらを探し回ってるんじゃないか」

王太子は人をお食った笑みを浮かべる。ジムサは溜息まじりに首を振った。彼は往々にして部下より遅く寝て早く起きるという、厭な上官なのだ。しかもひとりでぶらつくのが好きで、困ったことに部下を起こさず大抵勝手に出て行ってしまう。

護衛の責任者であるフィディアスが口を酸っぱくして苦情を申し立てていたが、王太子は馬耳東風で、さっぱりこたえた様子がない。今朝もきつとフィディアスが必死に探し回っているうちに、主人の方が先に戻って来てしまったのだろう。

王太子ともあるう者が近侍にガミガミ叱られるのを見物するのはなかなか小気味よいものだったが、今は面白がってもいられない。

「まったく……、なんでそんな無闇に早起きなんですか」

「おまえが寝過ぎしたんだろうが。さては昨夜は張り切りすぎたか」
ジムサは赤面して怒鳴った。

「即、休ませていただきましたっ。あなたこそ……」

つい厭味を言いかけ、ジムサはハツと口を噤んだ。先をゆくフィオドトスが無言で振り返る。

彼はタシユカガからもらった紙包みを指に挟み、ニツと笑ってみせた。

「こいつを昨夜持ってたら、よかったんだがな」

ぽかんとするジムサを置いて、飄々と彼は行ってしまった。

……と、言うことは。

ジムサは慌ててぶるぶるとかぶりを振り、ディオドトスの後を追った。

——馬鹿。何をホツとしているんだ。ディアネイラはメイシヤじゃない。誰と寝ようが俺の知ったことか。

だが、そう自分に言い聞かせたとたん、当のディアネイラが現れた。彼女は無表情にジムサを一瞥すると、ディオドトスに顔を向け、とろけるような微笑を浮かべた。

「よかった。お帰りになってしまったかと思いましたわ」

そう言いながらさりげなく男の腕を取る。ディオドトスにはやりとして、剥き出しの彼女の肩にくちびるを落とした。

「あれだけ焦らされて、おめおめ帰れるわけないだろう」

「まあ、厭な方ね。酔いつぶれてしまったんでしよう、本当は」

——酔いつぶれた？ 彼が？

まさか、あり得ない。だがディオドトスは否定もせず、何やらディアネイラの耳元で囁きかけている。クスクスと軽やかに笑うディアネイラの声に、何故か鼓膜を刺されるような苦痛を感じた。

「だめですね。朝食を取られたらお引き取りになって、後でまたいらしてくださいな。何処へなりとも喜んでお伴しますわよ。一緒に劇場でも参りませんか？」

艶麗に微笑み、ディアネイラは男の腕を引いた。

「さあ、今はこちらへ。——そちら様も一緒にどうぞ」

ディアネイラはジムサにも愛想よく微笑み、先へ立って歩きだした。慥然とするジムサを眺め、ディオドトスは小さく肩をすくめた。

第6章 秘密と嘘（2）

案内されたのは昨夜宴席が設けられていた部屋だった。開け放たれた窓から射し込む光で室内は明るく、調度品も凝ったものが選ばれていることが改めてよくわかった。特別に上等な部屋なのだろうが、ここだけ見ればとても娼家の一室とは思えない。貴族の邸宅と言っても通るだろう。

ジムサは、王太子の傍らに侍ったディアネイラの姿を視界の隅で眺めた。彼女は昨夜とは異なるゆつたりとした衣装を身にまとい、外出前の薄化粧を施し、ほとんど素顔のようであり、それでもほれぼれするほど上品で美しい。念入りに化粧を施していたときよりも、さらにメイシャと面影が重なって見えた。

そんな彼女が自分の主君である男に寄り添っていると、胸を締めつけられるようだった。似ているだけの別人と何度言い聞かせても、どうしても割り切ることができない。

あまりにも似すぎていて、平静ではいられないのだ。ジムサは顔をそむけ、ディアネイラの姿を視界から追いやった。彼の側にはイオレーが侍り、静かに給仕をしていた。迂闊にもジムサは昨夜彼女が最後まで部屋にいたことをすっかり忘れ去っていた。

「……少しは休めた？」

小声で尋ねると、イオレーは気恥ずかしげな笑みを浮かべて頷いた。

ディオドトスは傍らのディアネイラが上の空でジムサの背を見つめていることに気付いた。ジムサは額を付き合わせるようにして何やらイオレーと囁きあっている。ディオドトスは手にした桃の果肉を黙って齧り取った。

ふいにディアネイラが向き直り、慌てたように水差しを取り上げる。ほぼ同時にジムサがこちらを向き、しかつめらしく咳払いをして切り出した。

「……あのですね。朝食が済んだら失礼させていただきたいのですが、構いませんよね」

ディオドトスはまた一口桃をかじり、しごくのんびりと訊き返した。

「そんなに急いでどこへ行くんだ？」

キャラバン・サライ
「隊商宿へ戻るんですよ！」

暢気な口調に頭にきて、ジムサはつい声を荒らげた。

「何もそう急ぐことはなかるう。まあ、ゆっくり桃でも食べ。美味いぞ」

こめかみに青筋がたちそうだったが、ジムサはどうか平静を維持した。

「預けてある馬が心配ですのぞ」

「ああ、俺が褒美にやった馬だな。いい馬だろ？」

ぐつと詰まるジムサを見て、ディオドトスはニヤニヤした。事実、二頭とも大層立派な軍馬で、それだけでもかなりの財産だ。

「……大変、良い馬です。どうも。盗まれてもしたら心配でたまりませんので、早く帰らないと」

「あそこは確か、カティガラ太守に運営委託されている王立の隊商宿だったよな。そこで盗みなんぞあつたら、えらいことだよなあ。」

太守が国から管理責任を問われるし、ものによっては引責問題だ」

余計な心配をするなど言っているのだろうが、ジムサとしてはここで引つ込むわけにはいかない。

「この先同行させてもらう隊商キャラバンも急いで探さなければなりませんから」

「まあそう焦らず、二、三日ゆっくりして疲れを取ったらどうだ？」

「そんな悠長なことは言ってられません！ 俺は一刻も早くサイラムに帰りたいんです」

水差しを持ったまま固まっていたディアネイラの手が、びくりとふるえた。彼女は何気なく男の杯を満たしたが、その表情にはどこか焦燥のようなものがあつた。

「……どうしても帰るのか」

玻璃の杯から水を一口飲み、ディオドトスは独りごちるように呟いた。

「当たり前です。帰ってはいけない理由でもあるんですか？」

本国の騎士身分を貰ったとしても、サイラムの民であることに変わりはない。それに、傭兵としての契約期間はとくに切れている。いつでも帰国してかまわないはずだ。

わざと反抗的な口調で言い返したが、ディオドトスはむっとした様子もなく、側に控えるディアネイラに頷いてみせた。

「外してくれ」

ディアネイラは黙礼すると、水差しを置いてしずしずと部屋を出て行った。イオレーもジムサに会釈をして彼女の後に従う。女たちがいなくなると、室内には急にしらけたような空気が漂った。

「……何なんですか、いったい」

わけがわからず、ジムサは呟いた。王太子は食べ終えた桃の芯を皿に投げ捨て、背後の壁に寄り掛かった。片膝を立て、どこか投げやりな口調で彼は言った。

「そんなに帰りたいなら餞別にひとついいことを教えてやろう。サイラムは滅びたぞ」

「——は？」

ジムサは頬をひきつらせた。痙攣のような笑いが無意識に口から洩れる。

「な、何を言ってるんですか。そんな話は聞いたこともありませんよ。隊商にいたときだって、サイラムが滅びたなんて誰も……」

「うん、滅びたというのは言い過ぎかもな。つまり、おまえが知っているサイラムと今のサイラムは違う、ということだ」

「どういう意味です！？」

ディオは顎を反らし、大きな溜め息をついた。

「……今からもう五年ほど前になる。サイラムはセレスの侵攻を受け、あっけなく陥落したんだ。予想外の不意打ちではあったがね」

ジムサは茫然とした。

「そんな……。どうしてセレスが？ サイラムはバークトリシュの属領だけど、セレスとだつてうまくやってたはずだ……」

「宗主国をセレスに乗り換えようとしたのさ」

「……王が変心したと？」

「いや、王の甥だ。確か、エルデイクと言ったか」

久しぶりにその名を聞いた。忘れもしない、自分たちを引き裂いた男。嫌がるメイシャにしつこく迫り、あまりにも分の悪い賭けへと巧妙に自分を追い込んだ男だ。どんな卑劣なことでもやりかねない男ではあったが、セレスに征服されるなんて、いったい何をやらかしたのだ。

「サイラム王やジンはずっと世継ぎに恵まれなかったが、神々に願いが通じたのかようやく子どもを授かった。エルデイクにしてみれば、いずれ自分のものになると思い込んでいた王位が無力な赤ん坊の手でかつさらわれたんだ。まあ、頭にも来るだろうな」

——ということは、王が見たという夢は正夢だったのか？

メイシャの亡くなった父の無念が、世継ぎの誕生を阻んでいるという……。

夢のことなど知らないディオドトスは、しかめ面で亜麻色の巻き毛を無意味にもてあそび、慎重に言葉を選びながら続けた。

「エルデイクは自分が王にさえなれば、上に立つのはバークトリシュだろうとセレスだろうとかまわなかったんだろう。セレスはこのところ、朝貢の見返りを増やすことで属領を拡大している。セレスについた方が条件がいいと踏んだのかもな。エルデイクはセレスの西域軍と通じ、自国を攻めさせた」

「でも、仮にも王族なんですよ。そんな背信行為……」

「一王族としての待遇では満足出来なかったんだらうよ。明け方の奇襲で王は討たれ、城門に首を晒された。まあ、ここまでは奴の思惑どおりだったらう。だが、セレス軍は続いてエルデイクをも捕らえ、あつさり首を刎ねてしまった。王と並んで城門に奴の首を掲げ

たそうだよ。そして、まだ乳離れもしない幼い王子を王位に就け、後ろで実権を握ることにしたんだ」

ジムサは絶句した。

「……結局エルデイクは利用されただけだったのさ。セレスは最初からサイラムを直接支配するつもりでいた。あの位置に直轄地ができれば、交易路から上がる利益をもっと効率的に取り込める」

ジムサは思わず身を乗り出した。

「それじゃ、サイラムはそのままセレス軍に支配されているんですか……！？」

「いや、我が軍が奪い返した。こちらとしても、あんなところにセレスの足掛かりを作られてはたまらないからな。すぐに東部諸州の兵をかき集め、奪還したよ」

ディオドトスは不本意そうに肩をすくめた。

「まあ、俺はその頃ファウニ戦で北にいたんで、奪還の総大将は異母兄になったがね。本来だったら、東部諸州長官である俺の役目だったんだが」

「じゃあ今はどうなっているんです！？」

「カティガラ太守の名代がまつりごとを行っている。あくまで一時的な処置だ」

ディオドトスは強調し、困ったように顔をしかめた。

「実は世継ぎのタール王子が行方不明になっちまってな。セレスに殺されたか、連れ去られたか、探してはいるが今のところ手がかりなしだ。主要な王族はほとんど殺されてしまつて、二歳だか三歳だかの傍系の王女がひとり残っただけなんだ。タール王子が見つからなければ、その王女がいずれ女王として即位することになるだろう」

ジムサはたまらず話を遮った。

「それでメイシャは？　メイシャはどうなつたんです！？　神殿は無事だつたんですか」

「報告によれば、神殿は現在も再建中だ。セレス軍にひどく破壊さ

れてしまつてな。一番被害が大きかったのが、実は神殿なんだ。神官や巫女の大部分が殺された。……おまえのメイシャも、たぶん」

ディオドトスの低い呟きに、ジムサはがくりと腰を落とした。

——メイシャが死んだ？ そんな……、嘘だ……！！

王太子は苦々しい顔で溜息をついた。

「その頃ちようど、ファウニとの戦が激化していてな。俺に報告が届いたのもかなり後になってからのことだったんだよ。サイラムを一時セレスに奪われたものの首尾よく奪還したという、完全な事後報告で。異母兄が自慢たらしく使者をよこした」

「……黙つてたんですね、あなたも！」

なじるようなジムサの叫びに、ディオドトスは鋭い瞳を閃かせた。「あたりまえだ。サイラム出身の兵がたくさん混じつて最前線で士気が下がるようなことを口に出せるか」

殴りかけたい衝動を、ジムサは必死にこらえた。それでも握りしめた拳が激しくふるえる。ディオドトスは冷徹な眼でジムサを見据え、言葉を続けた。

「言つておくが、あのおまえが事情を知つて帰ろうとでもしたら、敵前逃亡と見なして処刑したからな。必要に迫られればそれくらいのこと、俺は平気でやれる」

底光りする瞳で睨まれ、ジムサは慄然とした。宝玉で飾られた鞘に収まっていたとしても彼の本質は研ぎ澄まされた刃なのだ。うろたえながら、それでもジムサは懸命に抗った。

「でも、そういうことは、やっぱ一言くらい……」

「ファウニは上の空で戦つて勝てるような生易しい相手じゃないさ」「だったら先に帰った仲間はどうなんです。やっぱ何も知らされなかつたんですか」

ディオドトスは肩をすくめた。

「そりゃ、帰るときには教えたさ。知らずに帰つたらびっくりするだろう」

「じゃあ、何で俺には教えてくれなかつたんですか！」

ディオドトスは眉を吊り上げジムサを睨んだ。

「あのな！ 俺は確かに狡猾で計算高い、いやあな奴だが、大怪我して生死の境をさまよってる人間に余計な心配事を増やしてやるほど底意地悪くはないんだよ」

「でも俺、快復してからもだいぶんあなたのところで養生させてもらったじゃないですか。そのあいだにいくらだって時間は……」

ディオドトスは一瞬間を置き、おどけたように眉を上げた。

「びつくりさせてやろうと思ってなあ」

眼を瞬いたジムサは、一転、眦を吊り上げて怒鳴った。

「底意地悪いじゃないですか、思いつきり！ 他の奴らにはびつくりさせないように教えてやったのに、何で俺だけ！」

辟易した顔で王太子は手を振った。

「違う違う。許嫁をバクトラに呼び寄せて、おまえを驚かせてやろうと思ったんだよ」

ジムサは声をなくし、ぽかんとディオドトスを眺めた。

「快復したらふたりでバクトラに残ってもいいし、帰りたければ帰ってもいい。彼女の名前や神殿の巫女だということは聞いていたから、秘かに迎えを出したんだ」

ディオドトスはがりがり頭を掻き、溜息をついた。

「……そいつが帰ってくるまでは、俺もサイラムの神殿がそれほどの被害にあっていたとは知らなかったんだ。使いは懸命にメイシャを探し回ったんだが、どうしても見つからなくてな。わずかに生き延びた巫女たちも、誰も彼女がどうなったか知らなかった」

「そんな……」

「略奪後、神殿には火が放たれた。逃げ後れて焼け死んだり瓦礫の下敷きになった巫女も多い。ほとんどは身元がわからないままだ。

おそらく彼女も犠牲になったひとりだろう」

「俺は信じませんっ、彼女の死体が出たわけじゃないんだ！」

「それはそうなんだが……。しかしまあ、どうやってことの次第を告げたもんかと俺がひとり悩んでいる間に、おまえは人の目を盗ん

でさっさと帰国しちゃって……。だいたい、ちゃんと挨拶もせずに失礼じゃないか？」

口を尖らせる王太子に呆れてジムサは怒鳴った。

「挨拶しようとするたびに雲隠れしてたのはあなたでしょうがっ」

「うん、それはまあそうだな。で、わざわざ追いかけてきてやったというわけだよ」

「俺を、ですか」

「そうさ。思いやりのある主君だろう？ ……何だその目は。さては信じてないな」

ジムサはフンとそっぽを向いた。

「信じられませんか。仮にも王太子のあなたが、そんな暇人とは到底思えません」

「ひねくれた奴だなあ。素直にありがたがれ」

「ありがた迷惑ですっ」

ジムサはすつくと立ち上がり、戸口へ急いだ。

「どこ行くんだ？」

「サイラムへ帰るんですよ。メイシャが死んだなんて、自分で確かめない限り信じられません！」

ディオドトスは呆れたように肩をすくめた。

「それほど言うなら止めないよ。だがその前に、ちょっとこれを見てくださいか？」

しぶしぶ引き返したジムサは、ディオドトスが指先に摘んで示したものに目を瞠った。それは、青い石の嵌まった黄金の指輪だった。ラピス・ラズリの指輪だ。

ただそれだけなら似たようなものはいくらでもある。しかし、台座の意匠を見れば一目瞭然。母親の形見の指輪に間違いない。メイシャに渡した、あの指輪だ……！

しかしジムサの鼻先をかすめ、ディオドトスは指輪を手のなかに隠してしまった。

「……どこでそれを!？」

わめくジムサに彼はニヤニヤした。

「見覚えがありそうだな」

「それは俺がメイシャに渡した指輪です！ 何であなたが持つてるんですか！？」

「とある女から拝借したのさ」

「……まさか、ディアネイラ？」

につ、と王太子は皓齒を見せる。

—— そんな。それじゃ、やっぱりディアネイラがメイシャなのか……？

でも、どうしてメイシャがカティガラに？ それに、遊女^{ヘタイラ}だなんて……。

わけがわからず、頭がぐるぐる回り始める。

いったいどういうことなんだ……！？

突然、階下で悲鳴のような鋭い声が上がった。聞き覚えのある声で、女が何か叫んでいる。はっと顔を上げ、ジムサは慌てて窓辺に駆け寄った。

覗き込むと、中庭に誰か引き出されてきたところだった。ディアネイラだ。彼女は後ろ手に縛られて両脇を兵士に拘束されながら、激しく身をもがかせていた。

「離してくださいッ」

「おかあさぁん……」

幼女が後ろから泣きながら追いかけてきたが、兵の持つ槍の柄で乱暴に押しやられ、石畳の上に転んでしまった。ディアネイラは血相を変えて叫んだ。

「ミアザ！」

女将が慌てて飛んできて、なおも追いかけようと暴れる娘を腕のなかにしっかりと抱え込んだ。

「離して！ あんなもの、私は知らないって言ってるでしょ！」

「いいから来い」

乱暴に腕を掴んで引っ立てられたディアネイラが躓きそうになる。

ジムサは思わず窓から身を乗り出し、叫んだ。

「メイシャ！」

女の顔が弾かれたように仰向く。見開かれた瞳は、天空の青を映すサイラム湖の色。やっぱりディアネイラなんかじゃない。メイシャだ。俺の、メイシャだ……！

だが、彼女はひとことも答えることなく建物の陰に消えた。ジムサが急いで身をひるがえすと、ディオドトスの鋭い声が飛んだ。

「今出ていったら、おまえも共犯として牢にぶち込むぞ」

ジムサは思わず足を止めた。振り向くと彼は壁にもたれたまま指輪をもてあそんでいた。

「……何の共犯ですか」

王太子は指輪をこれみよがしに掲げて見せた。

「決まってる。ラピス・ラズリ密輸の、さ」

「密輸！？ 何言ってるんですか、その指輪は亡くなった母の形見なんですよ。密輸とは何の関係もありますんつ」

「知ってるよ」

落ち着きはらった返答に、ジムサはあぐりと口を開けた。ディオドトスは突っ立っているジムサを差し招いた。

「まあ、座れ。心配しなくてもディアネイラ——じゃなくておまえのメイシャに命の危険はない。丁重に扱うよう厳しく命じておいたからな」

「……どこが丁重なんですかつ、あれじゃまるつきり罪人扱いです！」

「仕方ないだろ、こっちにだっていろいろと事情があるんだよ。いいから座れって。説明してやるから」

しぶしぶながら腰を下ろすと、扉を叩く音がしてフィディアスが顔を覗かせた。

「あっちも押さえたな？」

主君の問いかけに、彼は黙って頷いた。

「よし、それじゃそこで見張っててくれ。こいつに話をする間、邪

魔が入らんようにな」

扉が閉ざされるのを待ちかね、ジムサは噛みつくように尋ねた。

「どういうことですか！ あなたはいったい何しにここに来たんです！？」

「ラピス・ラズリが我が国の重要な特産品であることは、おまえも知ってるよな？」

問いかけにジムサはイライラと頷いた。バークトリシユのラピス・ラズリはゴスターナの翡翠やコラズミアのターコイズと並び、大陸諸国で珍重される美しい石だ。

光沢のある独特の深い青に星のような金色が散りばめられ、神秘的な輝きを放つことから魔除けや災難避けとしても広く用いられている。

「我が国の貴重な財源のひとつだ。海を越えたムドラーヤの王たちもラピス・ラズリがことのほかお気に入りだな。大枚はたいて海路はるばる輸入してくれているよ。当然ながら流通経路は国家の管理下にあるわけだが、このところ帳尻が合わないことが多くてなあ」

「……どういうことです」

「要するに、途中でちよろまかして横流ししてる奴がいるのさ。シンドやセレスの王侯貴族相手に、正規の手続きを経たものよりずっと安価に売りさばく。そういう闇の交易路が東部諸州を通っているんだ。長官として放っておけないだろ？」

「でも、何も自分でカティガラまで来なくたって……」

「なあに、査察も兼ねてるんだよ。それに、異母兄がサイラム奪還以来妙に調子に乗っててな。東部諸州を自分に任せてほしいと言い出した。冗談じゃない、東部諸州の長官は王太子の職務、俺の仕事だ」

ディオドトスは憤激したように鼻筋に小さく皺を寄せた。

「大体な、あの情弱者めはファウニ掃討戦の大將を父王から命じられたとき、恥知らずにも仮病を使って辞退したんだぞ。それで俺が指揮をとることになったんだ。まあ、俺でなければあれほど短期間

に終戦に持ち込めなかったとは思うが。なあ？」

「……はあ」

「何だよ、おべっかのひとつも言えんのか」

「口下手なもので」

「まあいいか。おまえのおかげで命拾いしたんだからな。――

それはともかく、だ。以前から秘密裏に調査を進めていたわけだが、最近になって密輸ルートが一本絞り込めた。それがこの妓楼、赤い花の館　というわけだ」

「でも、メイシャは絶対関係ありませんよ！　店が関わってるんならとつと女将を捕まえりゃいいでしょうが」

「それが、女将のギルジラは噛んでないらしいんだよな。ごうつくばりの遣り手婆だとしても、な。……店の誰かが受け渡しの仲介をしていることは間違いないが、なかなか尻尾が掴めん。しかも内偵に気付かれたらしくて、このところずっと取引がない。どうしたものかと思っていたら、数日前、太守の元に密告があった。遊女のデイアネイラがひそかにラピス・ラズリの原石を隠し持っているという……。これでかえって彼女は容疑者から外していいことになった」

「なぜですか」

「そりゃ、密告で隠し場所だと示された場所が、こつちの手で調査済みだったからさ。そこには何もなかったのに、密告後に確かめてみると、まるで見つけてくださいとばかりにラピス・ラズリが転がってた。つまりは別の誰かがわざと置いたってことだろう？」

「じゃあ何で彼女を捕まえたんです！」

「そりゃ、彼女を派手に捕まえておけば、安心した犯人が取引を再開するんじゃないかと思ったのさ。あんまり取引を自粛していると、金が入って来なくて困るだろ。メイシャに罪を着せたのも、きつと焦っているからだ。犯人は、手持ちのラピス・ラズリを早いところ処分したがつてる」

ジムサはたまりかねて叫んだ。

「密輸の捜査なんて、俺の知ったことじゃない！　俺はメイシャに

会いに行きます。どうしても今すぐ会わなければならないんだ」

「そう焦るなよ。しばらくすればちゃんと戻ってくることになるんだから」

「彼女がメイシャだってわかったのに、じっとしてなどいられませんっ」

「——わかったよ。好きにしろ」

諦めたようにディオドトスは手を振った。すぐさま踵を返すと背後から声が飛んだ。

「おい、忘れ物」

振り向くと何かが宙を切って飛んでくる。反射的に受け止めたそれは、例の指輪だった。

「実は無断で借りたんだ。謝っといってくれ」

ジムサは指輪を握りしめ、一礼するなり部屋を飛び出して行った。外にいたフィディアスが無言のまま彼を見送っていた。

第7章 彷徨の果て（1）

「いったい何なんですか!？」

激昂してディアネイラは叫んだが、答える者はひとりもいなかった。部屋の主を完全に無視して、衣装櫃を底までさらったり寝具を剥いだり、したい放題だ。ディアネイラは怯えているミアザの手を、しっかりと握りしめた。

客から席を外すよう言われ、ディアネイラはいったん私室へ戻ることにしたのだった。ミアザが起きる頃合いだから、着替えさせてやろうと思ったのだ。遊女として昼夜問わず客とともに出歩くことが多い、娘と触れ合う時間がなかなかとれない。ノゼアンに任せてもよいのだが、出来る限り自分で娘の世話をしたいとディアネイラは考えていた。

寝ばけまなこの娘の髪を丁寧に梳いていると、部屋の扉が突然ぱたんと開き、武装した兵士たちがどやどやと押し入ってきた。彼らは啞然とする母娘には目もくれず、勝手に部屋を物色し始めたのだった。

物々しい雰囲気泣きだすミアザをなだめ、ディアネイラは指示を出している司令官らしき男につかつかと歩み寄った。

「ちよつと、今すぐやめさせてください! 何なんですか本当に。いったい何を探しているの。説明してくださいっ」

ディアネイラは猛然と抗議したが、壮年の男はうるさそうに眉をひそめ、ハエでも追っ払うように手を振っただけだった。大声が聞こえて振り向くと、兵士がひとり、床に寝そべるようにして寝台の下を覗き込んでいる。

兵士は奥の方から何かを取り出し、勇んで隊長の元へ飛んできた。兵士が持っているのは、片手でどうにか持てるくらいの大きさの、青い石の塊だった。受け取った隊長は石を左見右見、横目でじろりとディアネイラを睨んだ。

「これは、何だ？」

一瞥し、ディアネイラは皮肉な笑みを浮かべた。

「あら、ご存じありませんの。これはラピス・ラズリですね。バークトリシュの特産品ではありませんか」

「そのくらいのことは知っておる！ 加えて言うとな、未加工の原石は許可を受けた商人が加工する職人以外は所持禁止だ。宝飾品ならともかく、どうして原石を遊女のおまえが持っているのだ」

「私のものではありません！」

ディアネイラは昂然と胸を張り、言い返した。知らないものは知らないのだ。非難される謂われはない。しかし隊長は釈明など最初から聞く気もなかったようだ。意気揚々と、彼は宣言した。

「窃盗および密輸の容疑で貴様を逮捕する！」

いきなり後ろ手に掴まれ、ディアネイラは身をもがかせた。有無を言わさず中庭を引き立てられていくと、誰かが二階から名前を呼んだ。

メイシャ、と。

反射的に見上げたたん、飛び込んできたジムサの顔。どうしていいかわからず、動揺で抵抗心まで急激に萎えた。茫然としている間に外で待ち受けていた護送用の馬車に乗せられ、気がつけば牢獄に到着していた。

警備隊長から牢獄の管理人に引き渡され、てっきりぶち込まれるのかと思いきや、何故かそのまま建物を素通りして裏口へ直行。わけがわからないまま今度は豪華な輿に乗せられ、連れて来られた先はカティガラ太守の館だった。

太守のことは以前から知っている。というより、はっきり言えば上得意客のひとりだ。遊女として何度も宴席に侍り、観劇や競技会の見物に同伴したこともある。本当は、昨夜は太守とともに出かける予定だったのだ。それが突然中止になり、ディアネイラは妓楼に居残った。そしてジムサと顔を合わせるはめになったのだ。

それを思い出すと八つ当たりのように腹が立ってきて、太守の顔

を見るなりディアネイラは柳眉を逆立てた。

「だから私は密輸のことなど知らないと何度も言ったでしょう！

何故私がこのようないがかりをつけられねばならないのです！？」

「もちろんおまえさんが何も悪いことをしてないということは、よくわかっておるぞ」

冷や汗をぬぐい、少々太り気味の太守は懸命にディアネイラをなだめようとした。取り繕うようなひきつった笑み浮かべる太守を見て、彼女はますますいきり立った。

「だったら今すぐ私を妓楼へ戻してください。これでは営業妨害ですわ」

「そうしてやりたいのはやまやまなのだが、それがそうもいかんだ。御用の向きでなあ、しばらくおとなしくしていてくれんかの」

太守は妙に下手に出て、しきりに機嫌をとろうとする。ディアネイラは眼に怒りを浮かべて太守を睨んだ。

「ここにいろ、と？」

「そうそう。何、休暇とでも思ってくればよいのだ。まあ、ゆつくりくつろいで。のんびりと肌や髪の手入れでもしてはどうかな。

ハーブに蜂蜜、化粧水、何でも取り寄せてやろう。今、召使を呼んでくるからな、遠慮なく何でも申しつけておくれ……」

太守は逃げ腰で言い、そそくさと部屋を出てしまった。ディアネイラは閉まった扉を激しく睨み付けた。じつとしていられず、いらいらした足どりで室内を歩き回る。いくら贅を凝らした快適な部屋でも、のんびりくつろいでなどいられるものか。

転んで泣いていたミアザが心配だし、しまい込んだ指輪も気になる。まさかあの指輪まで没収されることもあるまいが、手癖の悪い兵士がこっそり自分の懷にでも入れてしまったら？ そうなることも探しようがない。

——ジムサ。

二階の窓から身を乗り出し、名を呼んだ彼の顔を思い浮かべると涙が出そうになった。あのときは動転していて、考えもせず彼のこ

とを見上げてしまった。きつと気付かれたに違いない。自分がメイ
シヤの成れの果てだということに……。

泣きたいほどみじめな気分だった。気付かれない気持ちと気
付いてほしい気持ち。両方に心は揺れて定まらない。

ディアネイラは神経質に指をこすった。あの指輪がないと、いて
もたつてもいられない気分だ。預かってからずっと、肌身離さず身
に着けていた。一度も外したことはない。ジムサと思わぬ再会をす
るまでは。

ともかく、店に戻ろう。心を決め、ディアネイラはそつと扉を開
け、顔を突き出して廊下を覗いた。使用人や見張りらしき姿はない。
太守が言っていたとおり、自分は監禁されているというわけではな
いようだ。

ディアネイラは用心深く左右を窺うと、忍び足で部屋を抜け出し
た。

第7章 彷徨の果て（2）

昼近くのギルジラの店はひっそりと静かだった。泊まった客もこの時分になればすべて引き上げ、女たちはようやくつかのまの休息を得る。午後になれば歌や楽器の練習をしたり、営業の準備がまた始まる。ディアネイラは人気のない裏口から店内に滑り込み、ほっと息をついた。

太守の城館を抜け出すのは意外と簡単だった。一族の女性たちが集団で外出する場面に行き当たり、侍女の群れに紛れ込んで外に出たのだ。派手な衣装でなくてさいわいだった。

裏から待合室を覗いてみたが、誰もいない。ジムサも彼の主人とともに引き上げたのだろう。ホッとしたような寂しいような、奇妙な心持ちだった。

女将に見咎められて怒鳴られるのではないかと心配だったが、女将の姿もまた見えなかった。私室で昼寝が売り上げの勘定でもしているのだろう。この店は女将のギルジラにとって命同様のものだ。下手に役人に目をつけられれば店の営業にかかわる。公認の娼家であっても理由をつけて潰すことなどたやすい。

そんなことになるくらいなら、どんな売れっ妓だろうと迷わず女将はディアネイラを叩き出すに違いない。そうなったら幼子を抱えて路頭に迷うことになる。

——指輪を見つけたら、ミアザを連れて太守館に戻ろうかしら……。

ディアネイラは、ふと考えた。確か、御用の向きとか何とか太守は言っていた。この騒ぎには何か理由があるのだ。しばらくここにいてほしいと言っていたくらいだから、娘を連れて帰ったところで文句は言わないだろう。いつそほとぼりが冷めるまで居すわってしまおうか。

考え込んでいるとどこからか小さな足音が聞こえてきて、ディア

ネイラはぎくりと顔を上げた。中庭から誰かが入ってくる。

それはミアザだった。小さな両手で石の塊を重そうに抱え、ぽかんと母親を見上げたその顔は、涙の跡と土埃ですっかり汚れていた。静かにするよう身振りで示しながら歩み寄り、ディアネイラは小声で囁いた。

「何してるの、ミアザ」

「……これ」

はい、と持っていた石を差し出す。受け取ったディアネイラは面喰らって目を瞬いた。

「な、何？ この石がどうかしたの？」

「兵隊さんたち、これを探してるんでしょう？ だから、これを持っていけば、おかあさんを返してくれると思って……」

ディアネイラは慌てて石の表面をこすった。乾いてこびりついていた土がぱらぱらと床に落ちる。現れた蒼い色に、ディアネイラは絶句した。汚れの下から現れたのは、まぎれもないラピス・ラズリの原石だった。

「……これ、どこにあったの？」

ミアザが指さしたのは妓楼の中庭だった。

「おねえちゃんが埋めてるのを見て、何かなあと思ったの」

ミアザは店で働く女たちのことを、誰でも『お姉ちゃん』と呼ぶ。気になって、後でこっそり見てみたら、とっても綺麗な石だったの。きつと大切なもので、誰かに取られないようにここに隠しておくんだと思ったんだ。おねえちゃん、すごく真剣な、こわい顔してたから、何か聞いたら叱られると思って、黙ってたの」

ミアザは急にベそをかき出した。

「でも、おかあさんが連れていかれちゃったから……。兵隊さんが、この石を見せておかあさんに怒鳴ってたでしょ。だからきつとこの石を持っていけば、ゆるしてくれると思ったの。まだ他にもあるんだよ。ミアザ、持ってくるね」

「ま、待って、ミアザ！ これ、誰が埋めたの？ どのお姉さん？」

振り向いたミアザが、ふっと視線を上げる。屈み込んでいたディアネイラは、背後に誰かが立っていることによりやく気付いた。肩越しに振り返ると、そこにはイオレーが彫像のように佇んでいた。その美しい顔に、表情らしい表情は何ひとつ浮かんでいない。

ディアネイラはゆるゆると目を見開いた。

「イオレー……。まさか、あなたが……？」

見たこともないような冷たい笑みが、静謐な美貌に浮かんだ。イオレーは凍ったような青い瞳でディアネイラを見下し、すっと片手を差し出した。

「……返して。それは、私のものよ」

反射的にディアネイラの眼が石へ向いた瞬間、イオレーは少女の肩を強引に引き寄せた。鋭い短剣が、か細い首に素早く押し当てられる。ディアネイラは口許を押さえ、かろうじて悲鳴を飲み込んだ。

「そう、騒がないことね。この子の命が大事ならば。——さあ、

おまえの部屋に行くのよ。早く！」

言われるまま、ディアネイラは先に立って小走りに自分の私室へ入った。扉を閉ざしてもイオレーはミアザを離そうとせず、短剣を突きつけたままだ。ディアネイラは両手を握り合わせ、必死に懇願した。

「お願い、その子を傷つけないで」

イオレーは残忍に微笑んだ。まるで別人に変貌してしまったかのようだった。

「おまえ次第よ。……それにしても、いったいどうやって抜け出してきたの？　せつかく捕まってくれたと思ったのに」

ディアネイラは愕然と目を見開いた。

「……あなたなの？　ここにラピス・ラズリを置いたのは」

イオレーは冷酷な微笑を浮かべた。

「そのまま縛り首にでもなってくればよかったのにね。まさかこんなに早く釈放されるなんて、すっかり予定が狂ってしまったわ。本当に目障りな女なこと」

憎々しげな口調に、ディアネイラは混乱した。そんなふうに罵られるなんて、自分が何をしたというのだ。つらく当たった覚えもないのに。

「何を言っているの。それより、ねえ、どうしてこんなこと……。寶石の密輸は重罪なのよ。あなただって知っているでしょう」

「お金が必要な。たくさんのお金。国を取り戻すためには」

戸惑うディアネイラに向かい、イオレーは高い矜持を示すかのごとく顎を上げた。

「私はおまえと違って、本来こんなところで春をひさぐような下賤の女ではない。あの裏切り者さえいなければ……。私はかつて一国の王女だった。いいえ、今でもそうよ」

「……王女？ あなたが？」

「私の名はアリシエル。カーシャ国の王サナヴァルのひとり娘。私こそが、カーシャ国の正統な王位継承者なのよ」

カーシャ国といえば、カティガラの東南方向にあるオアシス城市のひとつだ。シンドとバークトリシュを結ぶ交易路の中間に位置している。規模としてはサイラムよりもずっと大きな城市で、どこかの属領ではなく小さいながらもれっきとした独立国である。

ふと思いついたり、ディアネイラは眉をひそめた。

「……ちよつと待って。確か、カーシャ国は何年か前に政変があったのでは……？」

「よく覚えていたわね。そう、サナヴァル王の異母弟ファルークが謀叛を起こした。私の叔父にあたる男よ。今ではあの弑逆者が王座を穢しているのだわ。私は、それをこの手に取り戻すのよ」

「で、でも……」

「国を追われた亡命貴族たちも、私を認め、支持してくれているわ。私たちは兵を集め、薄汚い裏切り者ファルークを討つ。でも、そのためには資金がいるの。軍資金が、ね」

「それで、こんなことを……？」

イオレー——アリシエル元王女は嘲笑った。

「ラピス・ラズリは王侯貴族にとても好まれていて、各地で需要がある。特に海を越えたムドラーヤの王たちはバークトリシュのラピス・ラズリがお気に入りなのよ。だから惜しげなく大枚をはいたくれる。市場に出回る数は規制で限られるから、闇の方がかえって高値がつくことだってあるのよ」

アリシエルはミアザに短剣を突きつけたまま、窓際に置かれた椅子に悠然と腰掛けた。まるで玉座に座る女王のような荘厳さで。ミアザは硬直して彼女の膝に乗っている。

「おまえには死んでもらうわ。邪魔されてはかなわないもの。おまえが潔く死んでくれればこの子は助けてあげてもいい。……そうね、今ここで首を吊りなさい」

ディアネイラは言葉を失った。顔色ひとつ変えることもなく、死ねと言うのか。

それは、人にかしずかれ、命じること慣れきった人間の口ぶりだった。逆らうことを許さない、冷たく傲慢な声。清楚な風情が人氣だったイオレーが、その優艶な美貌の下にこんな残酷な素顔を隠していたなんて……。

「さあ、早く。でないとこの子が先に死ぬことになるわよ」

ぐつと切っ先を突きつけられ、ミアザの顔が恐怖にひきつる。必死に泣き声をこらえているのがディアネイラにも見て取れた。

「やめて！ 何でも言う通りにするから……！」

ディアネイラが叫んだ途端、アリシエルの後ろの窓が突然音をたてて開き、人影が飛び込んできた。

腰を浮かせて振り向いた彼女の手から短剣が素早く叩き落とされる。膝から転がり下りたミアザが泣きながら母親の元へ駆け寄ってきた。しっかりと抱きしめながら見上げると、両腕を後ろにねじ上げられたアリシエルが苦悶の声を上げていた。彼女を捕まえていたのは、前髪で顔の半分を隠した粗末な服の少女だった。

「……ノゼアン！？」

下働きの少女は、鋼のような光沢を宿した瞳でメイシヤを見た。

——どうしてノゼアンがここに……？

それに、急に立ち居振る舞いからおどした様子が消え、まるで別人のようだ。ディアネイラはすっかり混乱してしまった。イオレーだけでなく、ノゼアンもまた別の顔を隠していたと言うのか。娘を抱きしめたまま茫然としてみると、今度は外から部屋の扉が叩かれた。ディアネイラがびくりとすると、ノゼアンは平静な顔で頷きかけた。

「開けてくれる？」

落ち着きはらった声音だ。言われるままにおそるおそる扉を開けると、立っていたのはファウニ族の男、フィディアスだった。彼もまた驚いた様子もなく、すたすた歩み寄ると手際よくアリシエルを後ろ手に縛り上げた。先ほどの椅子に強制的に座らされ、アリシエルは屈辱に顔を赤くして肩を怒らせた。

入り口から聞こえた足音に振り向くと、そこには悠然とディオニユスが佇んでいた。彼はゆっくりとアリシエルに歩み寄った。

「なるほどな。カーシャ国のアリシエル王女か……。死んだと思っていたが」

アリシエルは昂然と顎を上げた。

「そういうあなたは誰？ ただの放蕩貴族ではないようね」

後ろに立っていたフィディアスが、椅子の背を掴んで軽く引いた。アリシエルは座ったままよろめいた。

「無礼な口をきくな」

「そう乱暴にするものではないよ、フィディアス。これでも元は一国の王女だ。それなりの礼儀は払え。……できれば違つかたちでお会いたかったな、アリシエル王女。私は、バークトリシユの王太子ディオドスだ」

ディアネイラは息をのんだ。ディオニユスなんてふざけた偽名だと思っていたが、まさか王太子だったとは。アリシエルもまた同様に目を剥いたが、こちらはすぐに高慢な顔に戻った。

「別に恐れ入ることもないわね。カーシャはれっきとした独立国。」

バークトリシュの属領ではない！」

「いかにも。そして、現在のカーシャ国と我が国は非常に友好的にやっている。廃された先王の王女となると、母国に庇護は期待できないな」

アリシエルは甲高く嘲笑した。

「期待などするものですか！ 父を殺した男に庇護してもらおうとは思わない。それくらいなら死んだ方がましよ」

「……王城へ連行しろ。取り調べは後ほど太守とともに行う」

フィディアスは頷き、なるべく穏やかにアリシエルを引き立てた。部屋を出て行きながら彼女は横目でディアネイラを睨んだが、呟いた声は眼光ほど鋭いものではなかった。

「おまえのように過去を振り捨てられたら、よかったのかもしれないわ……」

ディアネイラはミアザの手を握ったまま、茫然とアリシエルの後ろ姿を見送った。廊下から、呟くようなアリシエルの歌声が聞こえてきた。

花よ花

愛でられる間に咲けよ花

嵐が枝を折る前に

花盗人が来ぬうちに

心のままに咲けよ花

……………

やがて歌声は遠く小さくなり、狂ったような哄笑がかすかに階下から響いた。ディアネイラはミアザと手を繋いだまま、ぶるりと身をふるわせた。

「……あの人、これからどうなるのですか？」

ディオドトスは腕を組み、吐息まじりに呟いた。

「密輸は重罪だ。それに、現在のカーシャ王に対する謀議も加算せ

ざるを得ない。まず極刑はまぬがれないだろうな」

「……死刑、ということ？」

「元王女だ。王族にふさわしい名誉ある死を賜るだろう」

ディアネイラはカッとなって叫んだ。

「名誉、ですって？ 結局は殺すんでしょう。あの人だってきつと、好きで密輸なんかに手を染めたわけじゃないはず。生まれ育った国に帰れなくて、どうしても帰りたくて、それで……それで……」

「誰にだって事情はある。可哀相だと言って見逃すわけにはいかないよ」

「でも……！」

ディオドトスは感心したのか呆れたのか、皮肉っぱいまなざしでディアネイラを見た。

「優しいのだな。無力な子どもを人質に取り、罪を被って自殺しろとまで言った女だぞ」

「それでも、帰る場所をなくした気持ちにはわかるから……」

ディアネイラは俯き、低く呟いた。そんな母親を、心配そうにミアザが見上げる。

「……ここはただの吹き溜まりだもの。家でも何でもない。いつか、そういつか、本来いるべき場所へ帰ることを夢見て、あてどなく世過ぎをしているだけ。そんな日が来るはずもないのに、あきらめられなくて……。ただ、夢を見ている。いつか心が干上がって、沙漠のようになってしまいうまで……」

「迎えが来たのに、か？」

無然とした声に顔を上げると、ディオドトスは芝居がかって眉をしかめた。

「ジムサはとつくに気付いてるぞ。連行されるおまえを追いかけte行った。無駄足になるのがわかっていたから引き止めたんだが、聞く耳持たなくてな。今頃、牢獄の外で待ちぼうけた。呼びにやるか」
「やめてください！」

語気鋭くディアネイラは遮った。

「会いたくないのか？」

静かに問われ、デアネイラは絶句して力なく項垂れた。

「……会いたいわ。でも、会いたくない」

「どっちなんだ」

ディオドトスは呆れたように肩をすくめたが、デアネイラは俯いたまま答えなかった。溜息をつき、彼はそれまで黙って控えていたノゼアンに振り向いた。

「アダライト。すまんがジムサを呼んできてくれないか」

「かしこまりました」

優雅に一礼し、少女は飛ぶような足どりで部屋を出ていった。放心したようにその背を見送っていたデアネイラが呟いた。

「あの子は、あなたの間諜^{スパイ}だったのですね」

「ずっと俺のために働いてくれている。……あれは以前反乱を起こした貴族の娘だな。失敗して追い詰められた父親は、自らの館に火を放った。生き残ったのはあの娘だけ……。髪で隠してる顔の傷は、そのときの火傷の跡だ」

デアネイラは微かに目許をゆるめた。

「それでもあの子は、自分の居場所を見つけたのでしょっね」

「……だといんだが」

呟いたディオドトスは、廊下をあたふたと走ってくる足音に眉をひそめた。狼狽した様子で部屋に入ってきたのはカティガラ太守だった。

「殿下、申し訳ございません！ 眼を離した際にデアネイラめに逃げられました……」

「ここにいますようだが？」

飛び出しそうに目を見開いた太守は、顔を真っ赤にして頭を掻きむしった。

「何故じつとしてくれなんだ！？ 直々のご命令でお預かりしたというのに、おまえさんにもしものことがあったら儂の首が飛んでしまうではないかっ」

「娘が心配だったんです!」

負けじとディアネイラが言い返すと、後ろでディオドトスが苦笑した。

「まあ、よいではないか。とりあえず泳がせておいた実行犯は捕えたんだ、追々密輸ルートも解明できるだろう」

「しかし、当初の計画では……」

「何事も臨機応変が肝心さ。かえって早く片がついたじゃないか。彼女が騒ぎを起こしてくれたおかげでラピス・ラズリの在り処が知れたんだ。まさかあんなところに無造作に転がしておいたとは思ひもしなかったよ。雨がほとんど降らないからバレないと踏んだのだろうが、目の前すぎてアダライトも気付かなかった」

「……イオレーが怪しいと、最初から睨んでいたのですか」

「そういうわけでもないが、彼女がカーシャ国のアリシエル王女だとしたら、ルートの性格は納得いくな。今回の件には、最初からあの国の亡命貴族が絡んでたんだよ」

「カーシャ国の?」

「政変後のカーシャ国から逃亡した貴族は名を変えてバクトラにも入り込んでいる。そいつらが中心になって、ラピス・ラズリを横流ししていたんだ」

「王権を取り戻すために……」

ディアネイラの呟きに、ディオドトスは苦い溜息をついた。

「奴らは政権を奪還する気なんぞさらさないぞ。アリシエル王女には気の毒なことだが……。逃げ延びた先で以前と同じような贅沢な暮らしをするために金が必要だったただけなんだ。そのための資金づくりに彼女を利用していたのさ。本来主たるべき女性をね」

「そんな……っ」

「もし本当に彼女を担いで国を取り戻すつもりなら、仮にも王女を妓楼になど置いて働かせたりはしないさ。……本当のところ、サナヴアル王の治世は汚職が横行し、取り巻きの一部貴族が民を虐げて財をなしていたんだ。それを正そうと王弟のファルークが反旗を翻

した。アリシエル王女にはそういう事情がまったくわかっていない」
確かに彼女の口ぶりからすると、悪辣な叔父の陰謀で王位を奪われたと思い込んでいるようだ。

「彼女にとってサナヴァル王は良い父親ではあったのだろう。自分を溺愛し、甘やかして、贅沢三昧させてくれたのだから。しかしそれを教えたところで彼女は信じまい。彼女にとって正義は絶対的に自分の側にある。王女としての矜持、自分こそが正統な世継ぎであるという信念だけが、今の彼女を支えているんだ」

ディアネイラは、すれちがいざまの彼女の呟きを思い出した。

『おまえのように過去を振り捨てられたら、よかったのかもしれないわ……』

しがみつくよりも振り捨てたかったのだろうか。王女としての誇りや過去の栄光を。案外、彼女は気付いていたのかもしれない。国を乗っ取られたのではなく、自分たちが民から見捨てられたということに。

それでも、過ぎ去った華やかな日々が忘れられなくて。大勢の召使にかしずかれ、何もかも思いのままになったことや、畏敬の目で見上げられること。それが当然であった日々が、どうしても忘れられなくて……

遊女^{ヘタイラ}をめざしたのも、ねじれたプライドの現れだったかもしれない。遊女は、ただ一時の快楽を売るだけの娼婦ではない。美貌と教養、才気。蜜蜂の女と讃えられ、娼婦であっても周囲から一目置かれる存在なのだ。

自分はやはり人とは違うのだと、そう思い込むことで自分を慰めていたのだろうか。

ディアネイラは、高級な遊女であることに自負はあっても、その立場に誇りを抱くことがどうしても出来なかった。ただ、客を選び好みできる権利があるだけ下位の娼婦よりましだと思ったただけだ。それに、自分だってきつぱりと過去を振り捨てられたわけではない。振り捨てたつもりで、なお強くしがみついていた。だからどう

してもあの指輪を手放せなかったのだ。

沈む夕陽を見る時はいつも、西の彼方にいるはずのジムサの顔を思い浮かべた。心のなかで血を吐くように叫んでいた。きっとあの人は帰ってくる、と。

『必ず帰ってくるよ』

『ずっと待っているわ』

交わした約束を思い出すたび、切り裂かれるように胸が痛くて。忘れようと思うほどに、かえってその約束を信じたくなって。

こんなにも自分は変わってしまったというのに。今さら会えるはずもないのに。それでも会いたい。こんなふうに身を墮とした自分を、見てほしくなどないのに……。

第7章 彷徨の果て（3）

迷いに迷った挙げ句ようやくジムサが牢獄に辿り着いたとき、すでにデアネイラは輿に乗せられ、とつくに連れ出されていた。それを知らないジムサは何とか彼女と面会させてほしいと牢獄の役人に訴えたのだが、許可できないの一点張り。業を煮やした門番の手で外に放り出されてしまった。

実際にはここにいないのだから役人としても許可しようがなかったのだが、口止めされている以上、行き先を教えてやるわけにもいかない。

すぐすこ帰る気にもなれず、ジムサはあてもなく牢獄の周囲を歩き回った。彼女が釈放されたら真っ先に会いたい。できることならそのままさらってサイラムへ飛んで帰りたいくらいだ。ジムサはラピス・ラズリの指輪を強く握りしめた。

「メイシャ……」

いったい何があったんだ？ セレスの侵攻を生き延びたのなら、どうしてサイラムで俺を待っていてくれなかったんだ。

『一番被害が大きかったのが実は神殿なんだ。神官や巫女の大部分が殺された』

王太子の言葉が脳裏によみがえり、ジムサは唇を噛んだ。想像は、つく。最初からすべてを征服支配するつもりで襲いかかったのなら、兵士たちに歯止めなどありはしない。美しくも無力な巫女たちを、セレス兵は嬉々として蹂躪したことだろう。

どこよりも安全だと思ったからこそメイシャは神殿の巫女になったのに、そこが真っ先に略奪の対象になってしまふとはあまりにも皮肉だ。

きつとメイシャは占領されたサイラムを命からがら抜け出し、どうにかしてカティガラに辿り着いたのだ。娼婦になったのも、生きるためのやむない選択だったのだろう。カティガラには親類はおろ

か知り合いも頼れる人間も誰一人いない。

そんな状況で、女性がたったひとりで生きていくために選べる道は多くはない。自由身分を奪われ、奴隷に転落する者も大勢いるのだ。

——メイシャ。俺は何があっても君を愛している。それを信じてはくれないのか？

メイシャ……。

奥歯を噛みしめて獄舎の出入り口を睨むジムサを、背後から呼ぶ声がした。振り向くと、灰色の頭巾つき外套に身を包んだ小柄な人影があつた。頭巾の陰から彼を見上げ微笑んだ少女は、埃っぽい髪で顔を半分隠していた。ギルジラの妓楼で下働きをしていた少女だ。確か、中庭で一度会つた……。

明るい光の下でよく見てみると、ジムサはそれ以上に少女の顔に見覚えがあつた。はつと思ひ当たり、ジムサは思わず指を突きつけた。

「……アダライトじゃないか！」

「久しぶり」

朗らかに彼女は笑つた。内偵とは彼女のことだつたのか！

アダライトとは、バクトラの王太子の居城で何度も顔を合わせたことがある。そのときの彼女は、名目上ディオドトスの侍女のひとりだつたが、実際にはフィディアスと同様彼の手足となつて働く腹心であつた。城にいるときのアダライトは、すっきりとした衣装を身にまとい、半透明のヴェールで顔の傷をさりげなく覆っているのがつねだつた。

ジムサは驚きと感心でかぶりを振つた。

「全然わからなかつたよ。髪もなんだか違うし……」

アダライトは前髪をつまんで笑つた。彼女の髪は艶のある栗色だつたはず。

「ああ、これ？ 灰をまぶしたの。ぼさぼさに見えるようにね。洗えば落ちるわ。それよりジムサ、ここでいくら待ってもメイシャは

出て来ないわよ」

「なんで？」

不審そうに訊き返したジムサに、アダライトはクスクス笑いながら肩をすくめた。

「ここにはいないもの」

「じゃあ、どこに!？」

「もう妓楼に戻ってるわよ。本当は太守の城館にいるはずなんだけどね。あの人、いざとなるとけっこう行動力があるのね。予想外だったわ」

楽しげな彼女の言葉に、ジムサはその場にへたり込みたくなった。

「彼女のことは殿下が引き止めているから大丈夫よ。どこへも消えたりはしないわ」

「本当かな……」

「あら。だって殿下は、彼女がいることがわかっていて 赤い花の館 にあなたを連れてきたんだもの」

目を剥くジムサを見やり、アダライトは涼しげな微笑を浮かべた。「密輸の捜査だけだったら、わざわざ部外者のあなたを連れてくるわけないでしょう。ディアネイラがメイシャだということは、ちゃんとわかってたの。サイラムへ彼女を探しに行った使者だって、手ぶらで戻ったわけじゃないのよ」

ジムサはがっくりと溜め息をついた。

「……また大嘘つかれた。素直に感謝する気にはなれそうにないよ。妙にしてやられたような気がする」

アダライトが小さく嘖き出した。

「別にいいんじゃないの。殿下は自分のお気の済むようになさっただけなのだから。でも、あの方がいなかったら彼女とは再会できなかったかもしれないわよ。まさか彼女が娼館にいるなんて、あなたは考えもしなかったでしょ」

——どうだろうか。

妓楼にひっぱって来られる前、ジムサはすでに路上でディアネイ

ラを見かけていた。サイラムに戻ってメイシャがいないことを知ったら、それを思い出し、もしかしたらとカティガラへ引き返したとだろう。そして彼女を探し回り、必ず見つけ出して再会を果たしたはず。

だが、少なくとも何か月かを無駄にせず済んだことには、感謝していいかもしれない。おそらくその数か月は、焦燥に満ち、これまでに以上に苦しいものになっただろうから……。

第8章 永遠（とわ）のほとり（1）

扉を叩く音が聞こえてきても、ディアネイラは俯いたままだった。王太子は何か言いたげに彼女を見たが、結局は黙ったまま出て行った。

扉の外からノゼアン——アダライトに呼ばれたミアザが、心配そうに母親を見上げる。ディアネイラはうつすらとにじんだ涙を押さえ、微笑んで見せた。

「……お外で遊んでらっしゃい。あとで迎えに行くわ」

ミアザは頷き、おとなしく部屋を出て行った。扉の閉まる静かな音を最後に、部屋は急にしんと静まり返った。

戸口に誰か立っていることは気配でわかったが、どうしても振り向けなかった。ディアネイラは戸口に背を向けたまま、かたくなに立ち尽くしていた。

やがて、ためらいがちな声が彼女を呼んだ。懐かしい、ジムサの声が。

「メイシャ……」

その声を聞いた途端、どっと涙があふれそうになる。くちびるを噛みしめて涙をこらえると、ディアネイラはピンと背筋を伸ばした。「……メイシャは死んだわ。荒れ地をさまよい、そこで死んだのよ」間を置いてふたたび聞こえた彼の囁きには、万感の想いがこもっていた。

「君は、生きているよ」

弾かれたようにディアネイラは激しくかぶりを振った。

「いいえ、死んだの！ 私はメイシャじゃない、私は、もう……！」

両手で顔を覆い、ディアネイラは声にならない慟哭を噛み殺した。静かな足音が近づき、背後からディアネイラの手をそっと包んだ。背中に感じた温もりに茫然としていると、まるで魔法のように自

分の指にラピス・ラズリの指輪が戻ってきていた。

言葉をなくしたディアネイラを、ジムサは背中からぎゅっと抱きしめた。許しを請うような囁きが、耳元を優しく撫でる。

「帰って来たよ、メイシャ。長いあいだ待たせてごめん……」
息が止まりそうだった。

驚きではなく、あふれだすような喜びで――。

それでもディアネイラは棒を呑んだように立ち尽くしていた。

「……わ、私……、私……は……」

「サイラムがセレスに攻められたことは、殿下から聞いたよ。君が生きていてくれて、本当によかった……」

がくがくと首を振り、彼女は萎えそうになる声を必死に絞り出した。

「わ、私……、セレスの兵に……お、襲われて……、それで……」

ジムサは彼女を抱く腕にいつそう力をこめた。

「君は悪くない。君のせいじゃないんだ」

「でも……、殺したの……。指輪、取られそうになって……、セレス兵を……殺したの。この手で殺した……」

「殺すつもりじゃなかったんだろう？　ただ指輪を守ろうとしただけだ。俺が預けた指輪を……」

彼女は悲鳴を上げ、青ざめた顔を両手で覆った。

「それだけじゃない！　私、ひとりで逃げたの。傷ついた仲間を見捨て、ひとりだけ逃げたのよ……！　もしかしたら、助けられたかもしれないのに……！！」

「もし助けられるのなら、君は絶対そうしていただろう。無理だったんだよ」

「でも……」

ジムサは彼女を振り向かせ、正面から顔を覗き込んだ。

「聞いてくれ、メイシャ。俺だって、大勢の人を殺した。それこそ数えきれないくらい。最初は怖くてたまらなかったけど、戦が続くうちに何も感じなくなってしまった」

少年だったジムサにはなかったはずの、その声の暗い響き。今さらながらその違いに気付き、彼女はまじまじとジムサを見つめた。ファウニの刃で刻まれた大きな傷。それだけではない。彼はこんなに鋭い眼をしていただろうか。彼の頬は、これほど薄く削がていただろうか。彼の指は、こんなにもこつこつと節くれだっていただろうか――。

ジムサは苦痛をこらえるように眉根を寄せた。

「殺さなければ自分が殺される。敵に追撃され、負傷した仲間を仕方なく置いて逃げたことだってあるんだ。俺は両手どころか全身血まみれだよ」

彼は肩を落とし、力なく囁いた。

「段々と俺は考えるようになった。こんな血まみれの手でふたたび君の手を取ることができるのだろうか、と……」

悲愴な呟きにたまらなくなり、メイシャはジムサの顔を両手で包み込んだ。

「……そんなふうに迷ったとき、俺は死にかけた。生死の境をさまよって、それでもやっぱり君に会いたいと思って踏みとどまった。あの日約束したとおり、君の元へ帰りたい。君にもう一度会うまでは、何があっても死ぬものか、と……」

メイシャは言葉にならないまま何度も何度も頷いた。

「だから、俺は戻ってきた。君も待っていてくれたんだね、メイシャ。約束したとおり、忘れずに、ずっと待っていてくれたんだ。本当に、嬉しいよ……」

メイシャはこらえきれず飛びつくようにジムサを抱きしめた。

「会いたかった……！　ずっと待っていたの。ずっと、ずっと……」

ジムサは泣きじゃくるメイシャの髪を撫で、何度もくちづけした。彼女の髪は、遠い昔と同じ、甘い花の香りがした。

カラージャの花びらを浸した水で髪をすすぐのだと、メイシャは言っていた。彼女がくれた形見の髪束は、儚いはずのその香りをいつまでも留めていた。

あるいはそれは、すでに幻だったのかもしれない。それでもジムサはその匂いをかぐたびに彼女と過ごした短くも輝くような日々を思い出し、何があっても生き抜くことを誓うのだった。

ジムサは彼女の肩にそつと手を置き、泣きぬれた顔を覗き込んだ。「メイシャ、一緒にサイラムへ帰ろう。身分の問題ならもう大丈夫なんだ。バークトリシュの正式な騎士に取り立てられたから、属領でも同様の扱いを受けられる。それに、今はカティガラ太守の名代がサイラムを治めてるんだろう？」

しかしメイシャはおずおずと首を振った。

「サイラムには帰りたくないわ。とても帰れないもの……。私はもう死んだと思われているはずだし、その方がかえっていいのよ」

「じゃあ、どこか余所の国へ行こう。ふたりで暮らせるなら、どこだつて俺はいいんだ」

「でも……」

何やら言いにくそうにもじもじするメイシャの様子に、ジムサは首を傾げた。

「どうした？」

「実は……借金があるの。ここに売られた時のお金とか、娘の養育費とか、衣装代とか、いろいろ……」

「金ならどうにかするよ。乗ってきた馬と替え馬を売ればいい。剣も売れる。エンギシャル鋼の剣は高く売れるはずだ」

「そんなことしていいの？ その剣、あの人……王太子殿下からいただいたものなんでしょう」

「それはそうなんだけど、正直言って戦争はもううんざりなんだ。別の仕事を探したい。羊を飼うか、畑仕事でもしたいよ。——
とにかく行こう、女将に話をする」

腕を取られて慌ただしく廊下に出ると、階段の降り口に座ったアラライトとミアザが楽しそうに遊んでいるのが見えた。

「……メイシャ。あの子は……。いや、いいんだ」

ジムサは頭を振った。今さら聞くまでもないことだ。しかし、き

つぱりとメイシャは答えた。

「父親はセレス兵よ。私が殺した兵士かどうかはわからないけど」
ジムサはメイシャの肩を抱き寄せ、囁いた。

「……可愛いな」

「ええ、可愛いわ……」

眼を細め、メイシャは愛情のこもった声で呟いた。

ふたりに気付いたアダライトに耳打ちされ、嬉しそうな顔で立ち上がったミアザは一直線に駆け寄って母親の足に抱きついた。その様子に微笑んだアダライトはふたりに会釈して静かに階段を下りて行った。

「やあ、ミアザ。昨夜会ったね」

傍らに屈み込んで話しかけると、ミアザは母親にまといつきながら含羞^{はにか}んだような笑みを浮かべた。

「おじさんは、だれ？」

「ジムサって言うんだ。ずっと前からお母さんと知り合いなんだよ。これからお母さんと暮らそうと思うんだけど、ミアザも一緒に来てくれるよね？」

「うん」

頷いたミアザは、急に思い出したように顔を上げた。

「もしかして、おかあさんに指輪をくれた人？」

「そうだよ」

ミアザはぱつと顔を輝かせ、嬉々として叫んだ。

「じゃあ、おとうさんだ！」

呆氣にとられてメイシャを見上げると、彼女はばつの悪そうな顔を赤らめている。ジムサは微笑み、ミアザに向き直って力強く頷いた。

「ああ、そうだよ。ふたりを迎えに来たんだ。これからは三人で一緒に暮らそうね」

「ほんと？ もうどこにも行かない？」

「行かないよ。ずっと一緒にいる」

無邪気に抱きついてきたミアザを、ジムサはひょいと腕に抱え上げた。歓声を上げる娘の頬を撫で、メイシャはジムサの肩にそつともたれた。

恋い焦がれていた、この懐かしい温もり。約束どおり、彼は戻ってきてくれた。信じていたとおりに。

ようやく取り戻したのだ。何にもまして、見失いかけていた自分の心を。

「……愛してるわ、ジムサ」

メイシャはありったけの想いをこめて囁いた。本当は、そんな言葉では言い表せない。ずっと胸に抱き続けてきた、この想いは。

「俺もだよ……」

そつとくちづけを交わし、メイシャはジムサの腕を抱えてゆつくりと歩き出した。

これからはずつとふたり一緒に歩いていくのだ。

そう思っただけで、無限に強くなれる気がした。

第8章 永遠のほとり（2）

階下に降りると、ざわついた空気がふたりを迎えた。

つい先ほどまで人気もなく静まり返っていたはずなのに、いつものまにやら慌ただしく人が出入りし、声高に言い合う声が頭上を飛び交う。ふたりの姿に眼を留める者もなく、ジムサとメイシャは啞然と周囲を眺めた。

右往左往しているのは大部分がカティガラ城市の警備兵だ。しかし、手にしているのは武器ではなく、鍬や鋤といった作業道具だった。

「……何だ？ いったい……」

「見て」

メイシャに突つかれて眼を転じると、中庭に多数の兵士が入り込み、一斉に地面を掘り返しているのだった。ジムサは呆れて呟いた。

「何してんだ、あいつら……」

「ラピス・ラズリを探しているんだわ」

丹精込めたカラージャの花が次々に引き抜かれていくのを痛ましげに見つめ、メイシャは低く囁いた。

「ラピス・ラズリ？ しかし、あんなところにあるわけないんじゃない？」

「……？」

「それが……」

ジムサが面食らっていると、メイシャが小声で事情を手短に説明してくれた。イオレーが実はカーシャ国の元王女であり、ラピス・ラズリの密輸の手引きをしていたと聞き、ジムサはひどく意外だった。

元王女というのは、わからなくもない。気品のある顔だちをしていたし、話す言葉の端々からは育ちの良さが窺えた。しかし、復讐だの反乱だのといった謀略とは最も縁遠い人物に思えたのだ。

昨夜、傍らに侍っていた彼女は、しおらしく優婉だった。寂しげ

なその姿には、どこか儚い諦念がにじむような風情があつた。

その高雅な美貌の下に過酷なまでの激情を押し隠し、彼女もまた夢見ていたのだろうか。いつか遠い故郷へ帰る日を……。

そんな彼女をかつての佞臣たちは言葉巧みに丸め込み、利用していたのだ。大義名分の下、実は自分たちの享樂のためだけに……。それを知ると、ジムサは彼女の境遇に慨然としてしまふのを禁じ得なかつた。

辺りを見回したジムサは、部屋の隅に思いがけない人物の顔を見いだして小さな声を上げた。

それはシンドの商人、タシユカガだつた。

彼は朝方出会つた格好のまま、縛り上げられていた。その浅黒い顔は絶望でゆがんでいた。ジムサはミアザをメイシヤに預け、急いで彼の下へ歩み寄つた。

「タシユカガじゃないか。何をしてるんだ」

「あつ、旦那！」

ジムサを見て、タシユカガの顔に希望が浮かんた。

「旦那、助けてくださいよオ」

今にも泣きだしそうな声で彼は訴えた。

「いったい何をやらかしたんだ」

「あたしは何にもしちゃいませんよ！　旦那にご挨拶して帰ろうとしたら、いきなりあいつが現れて、あたしを縛り上げたんですよオ」
必死に顎で指し示す方向を見ると、そこにはフィディアスが無表情に立っていた。すぐ側の椅子にはゆつたりとディオドトスが座り、小太りの男と何やら話をしている。アダライトの姿もあつた。

「フィディアス！　こいつが何をしたと言ふんだ」

ジムサの詰問にフィディアスは鋭い眼を上げはしたが、黙つたまま答えなかつた。代わつて王太子御自らの涼しい声が飛ぶ。

「密輸の片棒担ぎさ。そいつが今回の受け取り手なんだよ」

ジムサは啞然として振り返つた。タシユカガは青ざめた顔いちめに冷や汗を浮かべていた。

「本当なのか……？」

「あ、あたしは真面目な商人ですよ。そんな、密輸なんてとんでもない。あたしはまっとうに商売させていただいてます。本当ですよ、旦那ア」

「確かに博打に嵌まらなければ、まっとうな商売を続けられたことだろうな」

冷やかに言い、ディオドトスは底光りする瞳でシンドの商人を眺めた。

「博打……？」

「賭け事をするなどは言わないよ。俺だって好きでしょっちゅうやつてる。しかし、のめり込んで全財産を突っ込むのはなあ。どう考えても嵌まりすぎだろ」

「全財産、って……」

「そいつはな、ジムサ、バクトラの数ある賭場のなかでも特に評判のよろしくない店で大負けして、交易の荷を全部巻き上げられてしまったのさ。身ひとつでシンドに帰らなきゃならなかった。いや、旅費すらなくて帰るに帰れない。シンドの店も、主人が帰らなければつぶれるか乗っ取られるか、いずれにせよどちらかだ。そこで、もちかけられた危ない話に一か八か乗ることにした」

ディオドトスは眼に冷笑を浮かべた。

「そいつの店があるのはマドウーラの港だろ。海路で物を運ぶには好都合だし、ムドラーヤとの取引にも使える。残念だったな、タシユカガとやら。バクトラからこっち、おまえはずっと見張られていたんだよ」

「ま、まさか旦那が……！？」

信じられないといった顔で、タシユカガはジムサを振り仰いだ。

「あー、そいつは違う。ジムサになんぞ頼んだら、即座に勘づかれておしまいさ。そいつは馬鹿正直な奴だからなあ」

正直よりも馬鹿の方に力点がかかっているように感じたが、ジムサは努めて無視した。ディオドトスは溜息をつき、懐から小さな包

みを取り出した。

「それにしても、おまえもつくづくツイてないよな。よりもよつて、俺にこんなものをくれるとは」

彼が示したのは、お近づきのしるしと言ってタシユカガが渡した媚薬だった。

「パンカステの美酒。麗しい名前だが、こいつは媚薬というより毒薬だよ」

「毒薬……！？」

ジムサは愕然としてタシユカガとディオドトスを交互に見た。タシユカガは真つ青になり、激しくかぶりを振った。

「そ、そんな、違いますよ。毒薬だなんて、そんな、嘘ですよ。そいつは媚薬です。本当に、効果の高い媚薬なんですよ」

「どんなに効果があるうが、ちよつと量を間違えただけであの世行きは危険すぎるだろ。パンカステの美酒は現在売買禁止だ。高いヤミ値がついているから、商売の足しにしようと考えたんだろうが、運が悪かったな」

ディオドトスは顎を撫でにやりとした。

「それに、俺には媚薬なんぞ必要ない」

その自信満々な口調にジムサは肩を落としたが、ディオドトスは平然とした顔で太守に包みを手渡した。

「薬師を集めて分析させろ。類似品が出回っているかもしれん。言っておくが、ちよつと試してみようなんて妙な助平心は起こさん方がいいぞ。こいつは心臓に来るそうだ。おまえ太ってるし、きつとイチコロだぞ」

「起こしませんよつ。——おい、そいつを牢に放り込んでおけ」
太守は赤面して叫び、包みを懷に突っ込みながら兵士に指示した。
「旦那ア、助けくださいよオ……」

引っ立てられながらタシユカガは泣き声を上げたが、ジムサにはどうしてやることも出来なかった。

タシユカガがこの店に来たがっていたのは、取引のためだったの

か。

「でもあいつ、何で俺を誘ったりしたんだろう……」

思わず呟くと、ディオドトスは軽く肩をすくめた。

「眼眩ましろうよ。おまえをだしにして裏でこっそり受け渡しをしようと思んだのかもしれん。あるいは……」

「何です？」

「取引にかこつけて、おまえを歓待したかったのかもしれんな。ま、わからんが」

ジムサは、タシユカガの人懐っこい笑顔を思い浮かべた。彼に悪意はなかったのだと、出来ればそう信じたい。

「……でも、どうしてタシユカガを酔いつぶしたりしたんです？」

あいつが店に来ないと、取引が成り立たないじゃないですか」

ディオドトスは呆れた顔でジムサを眺めた。

「鈍い奴だなあ。余計な邪魔者を排除してやったというのに」

「……………」

もういいとばかりにディオドトスはしかめ面で手を振った。側に控えていた太守がごほんとかい払いをし、待ちかねたように伺いを立てた。

「ところで、殿下。女将の尋問はいかがでしたしょう。あの女も連行しますか」

「そうだな。まあ、とりあえず言い分を聞いてみよう」

太守が合図をすると、兵士に付き添われた女将がおどおどした足どりでやってきた。縛られてはいないが、窮屈そうに左右をちらちらと窺っている。

女将はディオドトスの前に跪き、哀れっぽく訴えた。

「聞いてくださいませ、王太子殿下。わたくしは何も存じませんのでございます。そんな、密輸だなんてとんでもない！ 恐れ多いことですわア」

ギルジラは躍起になって身振り手振りを交え、くどくどと釈明をした。

「まさかねえ、あのイオレーがそんな大それたことをしでかすなんて。ええ、あの娘はね、ちょっとした知り合いの紹介で引き取ったんです。そりゃ、元はいいとこのお嬢さんだったというのは小耳にはさんでおりましたけれどね。人それぞれ事情がありますもの、詳しいことは聞きませんでした。本当にわたくしは何も存じませんのでございますよ。まさかあんなところに密輸品のラピス・ラズリが転がってるなんて、まったく夢にも……」

「それはそうだろうな。気付いてたら今頃あらかたネコババしてるさ」

他人事めいたディオドトスの呟きに、女将はひきつった笑いを洩らした。

「ま、まあっ、いやですわ旦那様！」

「馴れ馴れしい口をきくな！ 王太子殿下は東部諸州の長官であらせられるのだぞ」

太守に一喝され、女将は慌てて額を床に擦りつけた。こすつからく上目遣いで見上げながら、女将は懸命に追従の笑みを浮かべた。

「どうぞお慈悲を……。本当にわたくしは何も存じませんのでございます。確かに監督不行届かもしれませんが、わたくしだって勝手にこの店をそのような犯罪に利用されたのでございます。これからはこのようなことがないように、娘たちにもよく言って聞かせ、怪しいそぶりがなくどうかよく見張ることにいたしますわ。なにとぞご勘弁を……。ああ、どうぞあれ以上庭を滅茶苦茶にしないでくださいまし。うちのはるばる東から取り寄せたあの花を売りにしておりますですよ。これでは 赤い花の館 を名乗れなくなってしまうすわ……」

ディオドトスは、ちらりと中庭を一瞥した。

「太守。何もあんなに掘つくり返さなくてもいいのではないか？

女ひとりであんな地中深くには埋められないだろう。泥をつけて転がしておいただけではないのか」

「念には念を入れませんと」

カティガラ太守は胸を張って答えた。もし取りこぼしてもあったら自分の責任になるのだ。下手をすれば左遷されかねない。

ディオドトスはあつさり肩をすくめた。

「だ、そうだ。ま、やむを得んな」

「もとに戻していただけるのでしょうか？」

「埋め戻しはするが、兵士どもは庭職人ではないのでな」

と、太守はそっけない。女将は哀れっぽく嗚咽を上げ始めたが、傍から聞いているとどうも嘔泣きのようにしか聞こえない白々しさだった。

下がってよろしいと言われ、女将はホツとした顔で退いた。だが、しおらしく引き下がったとたんに女将は憤然と眉を吊り上げ、中庭で作業中の兵士たちを睨んだ。その顔に涙の痕跡はなかった。

ミアザを抱いたメイシャが、心配そうな顔でジムサに寄り添う。

ジムサは彼女の手を握って頷くと、女将に呼びかけた。

「女将、ちよつと話がある」

「後にしていただけませんかねえ。ご覧のとおり忙しいんですよ」
ぷりぷりしながら女将は突慥貪に応じたが、遠慮などしてはいられない。

「こつちも急いでるんだ。メイシャ、いや、ディアネイラを、今すぐ身請けしたい」

「はあっ？」

女将はぎょろりと目を剥いたかと思うと、物凄い剣幕で怒鳴った。
「冗談じゃありませんよ！ イオレーが捕まって、稼ぎ頭の遊女がディアネイラひとりになっちまったんですからね。これからあの娘のぶんまで働いて、稼いでもらわなければなりません。身請け話なんぞ当分お断り！」

これを聞いて、ディオドトスが面白がるような声を上げた。

「おい、女将。昨夜俺が前払いで渡した金、まだまだ余ってるはずだよな？ あのていどのもてなしで底をついたとは思えんぞ。なあ、フィディアス」

ファウニ族の男はしかつめらしく頷いた。

「あれだけあれば、王都の最高級の妓楼で遊女を何人も侍らせて大騒ぎしたところで、充分お釣りが来ることでしょうよ。……何もあんなに出さずともよかったと思いますか」

「ケチくさいこと言うなよ、俺が自腹を切ったんだぞ。——で、釣りを返すのと、そのまま懐に入れるのと、どっちがいいかなあ？釣りを返すと言うのなら、きっちり明細を書いてもらったうえで適正価格かどうかいちいち確かめるからな」

女将は握りしめた拳をふるふると震わせ、ひきつった笑い声を洩らした。

「こ、この妓には大変なお金をかけましたのよ。上流の方々とお話が合わせられるよう、詩や哲学の先生を付けてやって、オアシス訛りのヘラス語もきちんと直してやったんですから」

鼻息荒く、女将は並べ立てた。

「娘が生まれた時だってこつちで全部面倒見てやったし、店の手伝いもさせずに遊ばせておいたんですよ。あんなごくつぶし、本来なら店の掃除くらいさせるところなんですがねえ。こんなによくしてやったんですから、身請けするんならその分もきっちり返していただきますと」

「稼ぎの大半を取り上げてたくせに……！」

さすがに頭に来てメイシャは抗議したが、女将は動じずフフンと鼻で笑った。

「さんざ世話になっておいて、何だいその言いぐさは。誰のおかげで綺麗な服を着て美味しいものを食べられたと思うんだえ。あたしが拾ってやらなかったら、おまえさんは父無し子を抱えて道端で物乞いするしかなかったんだよ。どこへ行っても通用する一流の遊女に仕込んでやった恩も忘れて、何さ」

怒りで頬を紅潮させるメイシャを抑え、ジムサは静かに言った。

「足りないと言うのなら、金は作る」

「おや、何か当てがありそうだね」

女将は狡猾そうに目を細めた。

メイシャに告げたとおり、よく訓練された軍馬二頭とエンジンヤ
ー鋼の剣を売れば充分な額にはなるはずだ。

しかし、それをくれた人間の前ではさすがに言いづらい。場所を
変えようとジムサが言いかけるのを見透かし、尊大にディオドトス
が呼ばわった。

「ジムサ、ちよつと来い」

しぶしぶ歩み寄ると、耳を貸せというふうにし招かれる。仏頂
面で耳を傾けるなり、秘密めかした口調で王太子は囁いた。

「おまえ、俺がくれてやった剣を売るつもりだろう」

思わずギクリとすると、ディオドトスは悪魔めいた笑みを浮かべ
た。

「そんなことをしてみる。その剣でおまえの素っ首叩き落としてや
るからな」

蒼白になったジムサがよろよろと後退ると、ディオドトスは掌を
返したように善良そうな笑顔になった。

「心配するな。俺が用立ててやるって」

「……どうせ暴利なんでしょう……」

「なに、そうでもない。担保はおまえの首でいいよ」

「そんな借金、したくありませんっ」

しかしディオはジムサの抗議をあっさり無視し、後ろを振り向い
た。

「そついえばアダライト。内偵中、思わぬ発見をしたと言っていた
な。何だっけ？」

「二重帳簿です」

控えていたアダライトは淡々と答えた。おどおどした下働きの少
女の面影など、きれいさっぱり消えている。

顔色を変えて睨む女将を怜悯な瞳で見返し、平然と彼女は続けた。
「妓楼の売り上げを実際より低く装っています。ざっと見たところ、
本来納めるべき税額をだいぶ偽っているようでした」

「ほう。それは大変なことだ。なあ、太守」

太守はここぞとばかりに猛然と吼えた。

「いかにも！ 脱税もまた重罪です。悪質な場合は罰金と加算金に加え、禁固刑も課すことになっております」

女将は縮み上がった。デイオドトスはにやにやと顎を撫でた。

「ふむ。そうなると店はどうなるのかな」

「当然、営業許可が取り消され、廃業となります」

王太子はからからと笑った。

「ライバル店がさぞかし喜ぶだろうなあ。しかし店がつぶれて女たちが路頭に迷っても気の毒だ。足りない分の埋め合わせと罰金だけにしておいてやるか。しかし、あんまり態度が悪いと……」

自棄になったように女将は叫んだ。

「わかりましたよっ、もうどこへなりとも好きなところへ行っちゃいな！ その代わり、指輪をお寄越し」

ラピス・ラズリの指輪を指さし、女将は叫んだ。メイシヤは指輪をさっと隠し、怒りで瞳をきらめかせた。

「いやですっ！」

「だったら代わりにミアザを置いていきな。あたしはイオレーにかけた金だつて取り返さなきゃならないんだ。自分らで捕まえたくせに、あの娘の借金は払ってくれないってんだよ！」

「当たり前だ……」

びしびしと指さされた太守が呆れた口調で呟く。メイシヤは怒りで声をふるわせた。

「どうして私があの娘の借金まで肩代わりしなきゃならないんですか」

「イオレーはおまえの妹分だろう。監督不行届じゃないか」

「自分の監督不行届だと認めていたじゃない！」

「うるさいッ。あたしだって金がいるんだよ。税金を納めなきゃならないんだからねっ。さあ、指輪をお寄越し。古そうだけど、石は大きいし台座は黄金だ。それなりの金にはなるだろうさ」

「いやだと言つたらいやです！」

憤然と拒否するメイシャの横からすつと手が伸び、ジムサが指輪を抜き取った。躊躇することなく女将に指輪を手渡し、静かに彼は尋ねた。

「……これで満足か？」

ぽかんとした女将は、即座に満面の笑みを浮かべた。

「まあ……！ 気前がいいねえ、お客さん。いい男を見つけたもんじゃないか、ディアネイラ」

「ジムサ！ それ、お母さんの形見なんでしょう！？」

「いいんだ。母はきつと許してくれる。これで君の自由を取り戻せるなら」

「ジムサ……」

メイシャは思わず声を詰まらせた。見つめあいながら感極まった様子で手を取り合うふたりを、憎々しげに女将は追い立てた。

「いちやいちやするのはどこか余所でやっておくれ。もううちの妓じゃないんだ、さつさと出てお行き。言っとくけど、服や宝飾品は置いていくんだよ。裸じゃ可哀相だから、今着ている服だけはくれてやる。さあ、その黄金の腕輪も外すんだ」

ほら、と邪険に手を出され、メイシャは叩きつけるようにして腕輪を渡した。

「——では、そろそろ引き上げるとするか」

悠然と立ち上がったディオトスは、従者たちとともに出口へ向かった。ふと足を止め、彼は肩ごしに振り向いてにやりとした。

「来いよジムサ。結婚のお祝いをしてやる。そうそう、担保の首を忘れるな」

からかうように言い残し、飄然と彼は出ていった。兵士たちに指示を与えた太守が急いで後を追う。

がつくりと肩を落としたジムサの顔を、メイシャは心配そうに覗き込んだ。

「大丈夫？ 担保の首って何のこと。まさか、首を刎ねられてしま

うの……!？」

「いや、そうじゃない……と思うけど」

メイシャはまだ不安げな面持ちで尋ねた。

「あの王子様って優しいの、それとも腹黒いの？ どっちだかよくわからないわ」

「……たぶん、両方」

いずれにせよ、今後も付き合わされるはめに陥りそうだ。しかし、これからはメイシャと一緒にいてくれる。

たとえばこへ行こうとも、どの城市に住もうとも、メイシャとミアザのいる場所が自分の故郷になるのだ。

「さあ、行こう」

ジムサはメイシャを促し、ふたたびミアザを抱き上げた。すっかりジムサの腕が気に入ったようで、ミアザは上機嫌でニコニコしていた。

まばゆい陽光が照り映える街路で、王太子一行がふたりを待っていた。ディオドトスと太守が馬に乗り、フィディアスが王太子の轡を取る。

ディオドトスはしきりに辞退するアダライトを強引に鞍に引き上げた。軽く腹を蹴られ、馬はのんびりした歩調で歩きだす。互いに頷き交わし、メイシャとジムサは足早に一行の後に続いた。

暑く乾いた空気が、今までになくかくわしく感じられる。幻のようになにカラージャの花の香りが鼻孔をくすぐり、熱風に溶けていった。

第8章 永遠のほとり（3）

ディオドトスは馬に揺られながらぼつりと洩らした。

「……リユシアスは、俺を許してくれるかな」

鞍に横座りしたアダライトが黙ってディオオを見つめる。フィディアスは足を止めず、静かに主人を見上げた。

「許すも何も、あいつは殿下を恨んでなどいませんよ」

「そうかな」

「そうですね。俺が保証します」

「そうか」

確固たる口調に、憂鬱そうだったディオドトスの顔にようやく微笑が浮かんだ。ほっと安堵してアダライトの表情も緩む。

ディオドトスは肩ごしに振り向いてジムサたちを眺めた。三人はまるでずっと一緒に暮らしていたかのように仲むつまじく見えた。胸の奥に食い込んだまま痛み続けていた棘が、ようやく消えていくような気がした。

久しぶりにディオドトスは旧友の笑顔を思い出した。幼い頃、ともに遊んだときと同じ無邪気な笑顔で、彼は笑っていた。

その笑顔が消え去ることはないのだ。いつでもこの胸で息づいている。自分が生きている限りは、永遠に――。

ディオドトスはそつとアダライトの手を取った。

「……荒れたな」

呟くと、アダライトは恥ずかしそうに手を引っ込めようとした。

「お手が汚れます」

構わず彼は少女の手を握った。

「しばらくゆつくりするといい。……苦勞をかけたな」

「いいえ！ 私が迂闊でした。あんな目の前にあったのに気付かないなんて……。申し訳ありません……」

項垂れるアダライトの背を、ディオドトスは軽く叩いた。

「気にするな。誰だって、どこか秘密の場所にしまっていると思うのが普通だよ。そのおかげで二重帳簿を発見できたじゃないか」

「でも……」

無念そうなアダライトに、彼はおどけたようなしかめ面をしてみせた。

「それでも心配してたんだぞ。下働きとは言え、妓楼なんぞに送り込んで。おまえに何かあったらと思うと、気が気じゃなかった」

アダライトは眼を瞠ると、含羞^{はにか}んだ笑みを浮かべた。

「……この傷のおかげで、客の相手はまぬがれましたから」

ディオドトスは黙って彼女の顔の傷跡を掌で覆った。そつと手を添え、アダライトは心のなかで囁いた。

あなたのお役にたてれば、それだけで私は満足なのです……。
燃え盛る炎をなから救い出してくれた人。

見捨てられて当然の立場だったのに。王命で婚約はとづくに破棄されていたのに。それでも危険を顧みず、私を助けてくれた。

ずつと側に置き、何くれとなく面倒を見てくれた。誰よりも大切な人……。

「だったら今は俺の側にいろ」

何故か怒ったような口ぶりでディオドトスは命じた。戸惑って見上げると、彼は怒っているというよりも、どこか渋い顔をしていた。昨夜ディアネイラの指示で酒を運んだとき、一目だけでも顔が見たくなつて閨を覗き込んでしまった。目が合うと、彼はやはりこんな顔をした。

不用心さを咎められたかと、あのときはしよげたものだが、違っていたのだろうか。ディオドトスの口調は、まるで自分自身に腹をたてているようにも響いた。

「そんな粗末は服はさつさと脱いで、湯浴みして灰を落とせ。新しい服を仕立ててやる。生地屋と仕立屋はもう呼んであるからな。メイシャと一緒に好きなだけ作らせる」

「ありがとうございます。でも、あまり怠けていると腕が鈍ります

ので……」

「俺が相手してやるよ。フィディアスの奴、最近さっぱり付き合ってくれなくてな。俺も退屈してたところだ」

皮肉っぽく言われ、じろりとフィディアスは主君を睨め上げた。

「……俺に無断でそこらじゅうを徘徊しないと約束してくだされば、いつでもお相手いたしますよ」

「徘徊とは失礼な奴だな。微行して市中の様子を探るのも、為政者としては当然の勤めじゃないか」

フィディアスは深々と溜息をついた。

「つたくもう、人の気も知らないで……」

「知ってるよ。心配してくれてるんだろ？」

目を上げたフィディアスは、につこりする主君の顔に、諦めたように頭を振った。

「付き合いきれませんか、あなたには」

「とか言いながら、ちゃんと呼き合ってくれるんだよな」

「……ときどき、北の草原に逃げ帰りたくなりますよ」

「逃げなくても帰れるようになるさ。近いうちにな」

確信にみちた声に顔を上げ、フィディアスは王太子を見つめた。

微笑みながら彼は轡を取り直した。

「そうですね……。そうしたら地平線まで馬で競走しましょう。絶対俺の勝ちですから」

「ふん、負けるもんか」

こらえきれない様子でクスクスとアダライトが笑いだす。

愉しげにディオトスも笑い、惘然としていたフィディアスも、

ついにはお手上げといった調子で苦笑したのだった。

第8章 永遠のほとり(4)

「……ねえ、見てよ。綺麗よねえ」

女将にせがんでラピス・ラズリの指輪を見せてもらった娘が、歓声を上げて他の娘を呼んだ。集まってきた女たちが次々に指輪を受け取っては熱心に眺める。

「素敵！　こんなに大きな石だったんだ」

「お姐さん、どうしてだかいつも石を内側に回してたのよねえ。こんなに大きいとは思わなかったわ」

「見せびらかしてもよかったのにねえ」

「あつ、そうだ。そういえば今日ねえ、道でばったり出会ったのよ」
「えつ、誰と？」

「決まってるじゃない、ディアネイラ姐さんよ。あ、今はメイシヤだっけ」

「まだカティガラにいたんだ。どこかへ移るようなこと言ってなかった？」

「うん、明日出発するって」

「バクトラへ行くのかな」

「それが、シンドのガダーラだってさ。よくわかんないけど、旦那の仕事だそうよ」

「そうなんだあ。シンドは遠いよねえ。峠越えもあるし、盗賊も出るって言うしさ」

「ラピス・ラズリって災難避けだよな？　道に迷わないとか……」

「じゃあ、この石持ってた方がよかったのにね」

「——いいんだよ。あの子らは、もう迷わないんだから」

背後から歩み寄った女将が、ひよいと指輪を取り上げる。灯したばかりのランプにかざすと、青い色のなかで金色の粒が夜空の星のように輝いた。

「あの子らは永遠とわのほとりで舟に乗ったんだ。行く先がどこである

うとも、辿り着く場所があの子らにとって樂園なのさ」

「なんですか、それ？」

娘のひとりが首を傾げる。

「あんた知らないの？」

「知らないわ。何それ」

「この辺に昔から伝わる伝説よ。ほら、沙漠に大きな涸れ河の跡があるでしょ。あれが夜露でいっぱいになると、不思議な舟が出るんだって。その舟に乗れば桃源郷へ行けるの。そうやって旅立って行った恋人たちの話が、いくつもあるのよ」

「そんなのただの言い伝えでしょ。あんな涸れ河が、夜露なんかでいっぱいになるわけじゃないじゃない」

「だからね、一生添い遂げられる愛しい人と巡り逢うことを『永遠とわのほとりで舟に乗る』って言うの。素敵じゃない？」

「いいなあ。あたしもそういう人と巡り逢いたーい」

「姐さんを身請けしてった人、ずっと前から恋人同士だったんだってよ」

「いいよねえ。姐さんも今では貴族の奥様だもん。あの人、王太子殿下の側近なんですよ。玉の輿だあ。あたしもあかりたーい」

「だったら遊んでないで、その窓辺にでも立ってたらどうだい」

女将は腰に手を当て、だらだらしている娘たちを睨んだ。取り返した指輪を嵌め、ギルジラはけしかけるような表情で娘たちを見回した。

「お大尽を巧く引っかけて気に入られれば、愛妾にしてもらえるかもしれないよ。さあ、お客を迎える準備は整ったのかい。今夜もがつつり稼いでおくれよ、私の可愛い娘たち」

はあーいと声を揃え、年若い娼婦たちが窓辺に群がる。道行く力毛を品定めしては、婀娜な声や流し目を送る娘たちの後ろ姿を眺めながら、女将はそつと指輪を撫でていた。

この指輪を初めて眼にしたときは、それが見覚えのある指輪にあまりにも似ていたのでひどく驚いたものだ。

もちろん別物だとすぐにわかったが、それは記憶の底に封じていたギルジラの想いを鮮やかに呼び覚ましたのだった。

かつて若い娘だった時分、ギルジラはそれなりに成功した商人の娘で、父親が荷主となっている隊商キャラバンの駱駝使いの青年に恋をしていた。

青年は、今回の旅から戻ったら結婚しようと言い、父親も快諾してくれた。ギルジラは旅のお守りにとラピス・ラズリの指輪を彼に贈った。

旅立つ青年が振り返って、自分に手を振ったときの姿が今でも忘れられない。

それが、最後に見た彼の姿になったから。

青年は二度と帰って来なかった。隊商キャラバンは沙漠で大規模な砂嵐に巻き込まれ、全滅してしまったのだ。ギルジラのもとには形見ひとつ残されなかった。

今もなお、青年の亡骸はラピス・ラズリの指輪を嵌めたまま、砂の海深く埋もれているのかもしれない。

果たされなかった約束を、その虚ろな胸に抱き続けて……。

それとも命長らえて、別の城市まちで別の人生を送っているのだろうか。

嘆いているうちにギルジラの実家は傾き、意に染まぬ結婚を強いられた。跡継ぎができないからと婚家を追い出されたとき、迎えてくれる両親も家ももうなかった。

やがてギルジラは娼家で働き始め、コツコツと貯めた金で自らの店を開いた。妓楼の女主人となり、かつての自分と同じような哀れな身の上の娘たちを容赦なく使い捨てるようにもなった。

それでもふとした瞬間に、振り向いた許嫁の笑顔を思い出すことがある。

もはやそれは影のようで、顔だちもさだかでなくなってしまうてはいたが……。

——舟に乗り損ねたよ、私は。

ギルジラは小さく吐息を洩らし、目を閉じた。

それともあの人は待っていてくれるのだろうか。永遠とわのほとりで、私がいつかそこへ辿り着くまで。

信じて待ち続けていたら、あの人は帰って来たのかもしれない。

私には信じ続けることができなかった。信じるのではなく、忘れることで必死に生きようとした。

信じ続けることも、できたかもしれないのに。

メイシャがこの指輪だけをよすがに待ち続けたように、私も信じてみようか。

いつか永遠のほとりで、ふたたびあの人に巡り逢うことを。

それがどこであろうとも、ふたりでいられる場所が至福の楽園。心から、今はそう思える。

『永遠とわのほとり』(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4668f/>

永遠（とわ）のほitori〔長篇版〕

2011年6月18日15時56分発行